余市水産博物館 研究報告

BULLETIN OF
YOICHI FISHERIES MUSEUM

第 5 号 2002 年 3 月

越田賢一郎：余市町の中・近世遺跡 ---------- 1

小嶋　芳孝：大川遺跡出土の黒色壷再々検討 ---------- 5

盛　　昭史：野口雨情の来町年をめぐって ---------- 11

乾　　芳宏：天内山遺跡出土の続縄文土器について ---------- 15

浅野　敏昭：余市町豊浜地区の「ニシン漁労」民俗について ---------- 23

小川　康和　乾　　芳宏
：大川遺跡本多地点発掘調査報告 ---------- 37

平成13年度史跡フゴッペ洞窟保存調査事業の概要について ---------- 66

平成13年度博物館活動報告 ---------- 71

余市水産博物館

余市水産博物館
研究報告

第 5 号 2002 年 3 月

余 市 水 産 博 物 館

余市水産博物館研究報告第5号：1－4.Mar.2001

余市町の中・近世遺跡

越田賢一郎
北海道江別市西野幌685番地1（財団法人　北海道埋蔵文化財センター）

皆さんこんにちは。北海道埋蔵文化財センター普及活用課におります越田です。北海道立埋蔵文化財センターは平成11年11月11日に展示室をオープン致しました。それとともに図書の閲覧ができ，講演会，講座などをもてるようになりまして，本年度から本格的な事業を行っております。

平成12年度の事業の一つとしまして，昨年9月から10月に西崎山ストーンサークルの調査をいたしました。これは重要遺跡確認調査と申しまして，北海道教育委員会文化課で選んだ北海道内の50ヶ所の遺跡を順に調査していき，できれば保存していきたいと考えております。

その第1回目として，西崎山の調査を行ったのですが，本当に地元の教育委員会の方と，そして町民の方々にお世話になりました。ありがとうございました。

あともう一つ，私事になるのですが，西崎山の調査は，昭和25年から28年にかけて東京大学の駒井和愛先生がずっと行われておられました。その中で，写真の担当として中川成夫，吉田章一郎という名前が出ております。

中川成夫先生は，実は私の大学時代の恩師にあたります。丁度調査中に恩師の訃報に接しました。これも何かの因縁かと思います。また，今日こうやって余市町でお話させて頂くのも先生とのめぐり合わせでしょうか。

～略～

私が専門にしております本州の中世から近世の初め頃に相当する時期に，余市がどのようであったのかについて，その時期の遺物を通して少しお話していきたいと思っております。

一応参考になるかと思い，資料を持って参りました。題を北海道の南と北としておきたいと思っています。上の図が南からの要素，下の図が北からの要素をまとめております。だいたい時代的には本州の鎌倉，室町，江戸初期。このような時期にあたるものが並んでいると思っていただければいいと思っております。

まず上の図から説明します。15，16世紀と書いておりますが，道南の方に館と言われている和人の拠点ができます。これは本州と北海道を結ぶ交易を担った人達の拠点だったと考えております。

そこを掘りますと南の物，北の物など，様々な物が出て参りますが，多いのが南方から入りました陶磁器，そしていろいろな鉄製品などです。

このような館で有名なのは，上ノ国勝山館と，函館にあります志苔（しのり）館です。特に志苔館のすぐそばには37万枚というお金を埋納した遺跡があります。14世紀半ごろの珠洲（すず）焼，これは能登半島の先の焼き物。そして越前焼，これは福井県の焼き物。このような3つの甕に大量のお金が入っていました。国内でこれを超す数は未だ出ておりません。

何でこんなにお金が集まったのでしょうか。おそらく北海道の中で通用することがなかったと思いますので，それはその人達が南へ，何か北海道の物を持って行って交易して稼いだお金だと思います。北の物は何かと言いますと，干した鮭や昆布，それから鹿皮をはじめ，海獣のアザラシ，オットセイ皮，上質なものではラッコの皮などだと思います。道南にいた人達は北海道の奥地へ交易のた

めに入っていたのでしょう。

実際に陶磁器は誰が使ったかというのは難しいのですが，千歳あたりでみつかる珠洲焼の擂鉢などは交易に入っていた和人が残したものではないかと思っています。こちらから行きますと石狩川河口から入って千歳川を溯る。そして丁度新千歳空港あたりで山越えをして勇払の方へ抜ける。これをシコツ越えと呼んでいますが，そのあたりに遺物が沢山出てまいりますので，きっとそこまで入っている。文献で見ますと，和人の居住地は余市から鵡川までと言われていますので，それと珠洲焼の分布が一致しております。

この他にどういった遺物があるのか。ここに兜の図があります。これは南北朝頃と考えられており，深川の納内（おさむない）という所から出ています。それから余市をはじめ各地で刀が沢山出ております。それから鎧の一部が大浜中遺跡でも出ています。また鏡の類は上ノ国勝山館，これは和人の本拠地なのであたり前と思いますが，寿都の朱太川右岸遺跡それから千歳市末広遺跡，そして余市町大川，入舟遺跡でも出ております。

こういった交易を担った人の墓はないだろうかと見ていきますと，道南では福島の穏内館，上ノ国町夷王山墳墓群にあります。木槨墓とありますが，四角く木で囲んで，釘を打って木棺の角を留めている。これは座棺だろうと思います。

それともう一つ，火葬墓です。夷王山墳墓群と瀬棚河口遺跡にあります。

そして余市では鏡を副葬した墓があります。末広遺跡では，膝を曲げた状態のお墓が三つ程出ております。その一つにこの鏡が伴っていました。朱太川右岸遺跡でも同じ様な形態の墓に伴っておりました。その周りには15世紀中頃の珠洲焼がありました。そうしますと鏡を持つ人達がやって来てそこで葬られたお墓，これは和人の交易者の可能性があると考えております。

これが15，16世紀に見られる南方的要素だと思っていただければいいと思っています。

これに対して同じ時代に北からの要素と，土着の要素が見られます。

まず，常呂町のライトコロ河口遺跡の内耳土鍋，これは吊り下げられる目的で，こういう耳が付けられたと思っております。遺跡の時期は15世紀位と思っておりますが，なかなかはっきりした事がわかりません。内耳土鍋はそれ以降，樺太（サハリン）南部，千島，カムチャッカ南端あたりまで広がっており，アイヌの人達の分布と非常によく似ています。樺太の北部には無いので，北方の大陸とはつながらないような気がします。

次に瀬棚の南川2遺跡の墓など，体を伸ばしてそのまま葬られた伸展葬のお墓も見られます。墓からは刀，漆器そして一緒に鹿の角や鯨の骨で作った中柄という鏃を支えるための部品が出てまいります。

それからガラス玉が出てきます。これは大陸からの影響だと思います。大川遺跡のお墓から出土したものは，トンボ玉といいましてガラス玉に模様がついています。ガラスの模様が目のような形をしていますので，ガラスに詳しい方はアイビーズと呼んでいます。この時期本州の方でこういうガラスは作られておりません。あるとしましても仏様の瓔珞（ようらく）という頭の珠飾り，それから数珠などごく限られた用途にしか作られていません。本州から来たとは考えられないですね。その逆に中国の明，清の頃はガラス玉が作られております。清朝になりますと乾隆ガラスという有名なガラスがあります。17世紀の初めに東北アジアの黒龍江，今のアムール川下流域の人達が，ガラスや小さな金属の板を非常に好み，中国から手に入れます。それを服に縫い付けたりすることもあるのです。その玉が樺太を経由して北海道の方へやって来ているのでしょう。

そして江戸時代になると山丹（さんたん）交易が文献

に出ています。文献の用語ですので考古学の方では直接は使えないのですが，このような交易が当時も行われていたのでしょう。山丹交易では黒龍江の下流域の人達が中国との交易品，中にはガラス玉もあるし，山丹錦と呼ばれる中国の官人の服などを持って，樺太，そして一部は北海道の北部にまで渡ってきていることが知られています。

平取町二風谷遺跡からコイル状鉄製品が出土しています。ライトコロ河口遺跡からも同じ物が出ております。これは何か良くわかっておりません。ただワラビ手状のものや鎖の様なものがついています。これはもしかすると，大陸の方でシャーマンが腰に色々な音のする物を付けて飛び跳ねる時に使う，腰ベルトの飾りではないかと私は推測しています。

この他に大陸系の物では鷹の羽や，山丹錦などが入って来たと思います。文献では秀吉の時代に松前氏が朝鮮攻めで名護屋城へ行き、山丹錦の陣羽織を秀吉へ献上しています。その後，徳川家康にもやはり献上しています。それから松前藩から毎年江戸城の大奥へ付届（つけとどけ）として山丹玉を献上している記事があります。ですから，大陸との交易で得たガラス玉，毛皮，服などを特産品として松前藩が握っていたということがわかります。逆にそこから類推し，アイヌの人達が沢山手に入れており，それを持って松前や本州に行って様々な自分達の使う鉄製品などと交易して北海道へ持ちかえっていると考えられます。

ちょっと考えますと，北海道の人達は北と南に挟まれていい様に操られていたと捉えがちですが，そうではありません。南から入ってくる鉄製品を最大限に利用する。そしてそれを使って北の人達と交易して，北の方から大陸の品物を得ている。そして，その得た物で再び南の方とも交易できる。そして自分達の食べる物は北海道の自然の中で十分に見つけることができる。余剰の鮭，昆布などを持って南の人達と交易することができるんです。

そうしますと，地元の資源が大きな意味を持っていまして，それをもとに様々なものを手に入れることができる。ですから中世から近世はじめ頃のアイヌの人達は決して近世後半のアイヌ勘定などと言われている様な状況ではなくて，主体的な交易者だった可能性があります。そして，交易をする為には一つの川などを単位とした組織をしっかり固めていかないといけない。男 6，7 人がいないと船を松前へ年一回出したり，本州あるいは，北の方へ出すことができないのです。広い地域にわたり，大きな動きをするダイナミックな人達がいたのでしょう。

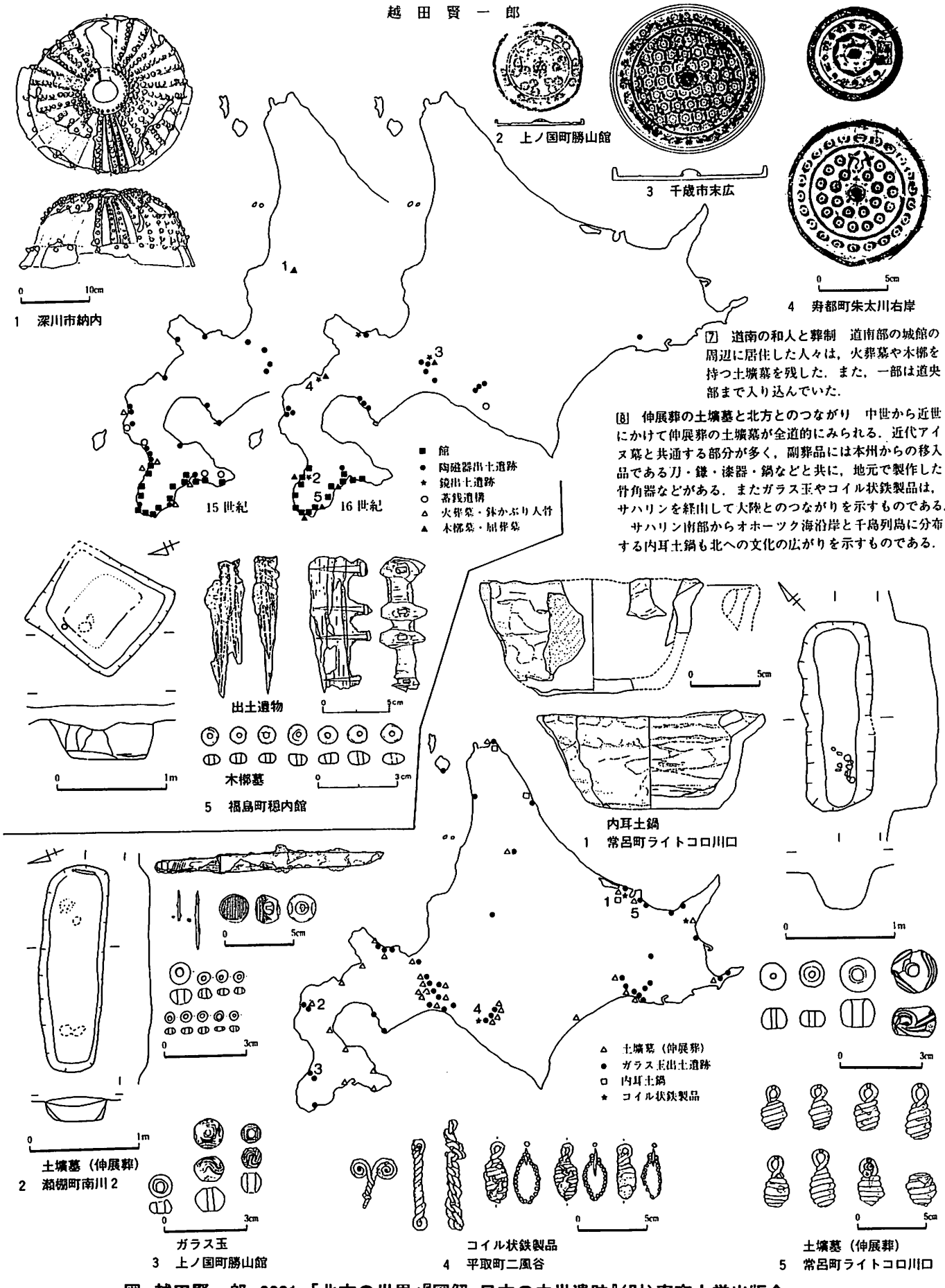
恐らく，余市アイヌの人達もそういう動きの一部を担っていたのでしょう。

ここで忘れていけないのは余市の位置付けです。北方と南方の文化を受け止めることのできる場所だったという事なのです。ここに居た人達が主体的に文化を受け止めなければ何の意味もなかった。積丹半島を通過することだってありえた訳ですが，この人達はそれをやりすごさずその文化を受け入れる。そして持って来た人達がここに定着する。そういう場所だったと考えなければいけないと思います。

～スライド説明～

以上でございます。どうもありがとうございました。

※この収録は，平成 13 年 3 月 18 日に余市町中央公民館で講演されたものです。しかし，紙面の都合から越田氏の承諾を得て前段の部分を大きく割愛させて頂きましたことを記しておきます。



[7] 道南の和人と葬制　道南部の城館の周辺に居住した人々は，火葬墓や木棺を持つ土壙墓を残した．また，一部は道央部まで入り込んでいた．

[8] 伸展葬の土壙墓と北方とのつながり　中世から近世にかけて伸展葬の土壙墓が全道的にみられる．近代アイヌ墓と共通する部分が多く，副葬品には本州からの移入品である刀・鐔・漆器・鍋などと共に，地元で製作した骨角器などがある．またガラス玉やコイル状鉄製品は，サハリンを経由して大陸とのつながりを示すものである．

サハリン南部からオホーツク海沿岸と千島列島に分布する内耳土鍋も北への文化の広がりを示すものである．

図　越田賢一郎　2001.「北方の世界」『図解・日本の中世遺跡』(財)東京大学出版会

余市水産博物館研究報告第5号：5－10.Mar.2002

大川遺跡出土の黒色壷再々検討

小　嶋　芳　孝
石川県金沢市中戸町18-1（(財) 石川県埋蔵文化センター　調査部長）

1. はじめに

余市町大川遺跡で出土した黒色壷については，これまでに概報[1]と報告書Ⅳ[2]で検討を進めてきた。検討の詳細については，報告書Ⅳでまとめたので参照願いたい。本稿はクラスキノ土城の井戸出土土器との比較をおこなって，大川遺跡出土の黒色壷について再度の検討を試みるものである。

これまでの検討で，この黒色土器の形状が渤海末期ないし女真初期の土器に類似しており，断定はできないが該期にこの土器が搬入された可能性も否定できないとしてきた。しかし，比較対照としてきた渤海や女真の土器は，報告書に掲載された実測図や博物館等の展示室で観察するしかなく，細かな調製や製作技法を検討することができなかった。幸い，2001年3月17～19日にかけてロシア共和国沿海地方ウラジオストク市にある，ロシア科学アカデミー極東支部歴史学考古学民族学研究所で，クラスキノ土城の井戸から出土した土器群を実測する機会を与えられ，ようやく渤海末期の土器について製作技法を観察することができた。今回の調査が実現したのは，同研究所で渤海と女真遺跡の調査研究を担っているボルデイン，イブリエフ，ニキーチン，ゲルマン，ニーナの各氏と青山学院大学の田村晃一教授の配慮によるもので，貴重な機会を与えていただいた各氏に心から謝意を表したい。

クラスキノ土城は，ロシア共和国沿海地方のハサン区クラスキノ村にある。中露国境に連なる標高200m前後の丘陵南裾にあり，また北朝鮮との国境を流れる図們江が村の東約20Kmを流れている。村の南側はエクスペデイツイン湾が広がり，湾に面して広大な低湿地がある。エクスペデイツイン湾はポシエット湾の奥にあり，湾口はハサンから伸びる砂州とポシエット岬が区切る地形になっている。ちなみにポシエット湾は深い入り江になっており，現在も貨物船が荷揚げする港が置かれている。クラスキノ土城は，クラスキノ村とエクスペデイツイン湾の間に広がる低湿地にあり，渤海から女真の時期に営まれた遺跡である。一辺が約300mの城壁が卵形に巡り，城内から寺院関係の建物や井戸，瓦窯などが発掘されている。渤海の龍原府塩州の州城で，港湾を管理する施設を兼ねた遺跡と推定されている。今回，実測することのできた土器群は，寺院関係の建物群の南隅で検出されている。井戸は上部を石組とし，底に蒸篭組の木枠が二段置かれていたようである。井戸の内部から，完形品を多く含む21個体の土器と木椀が出土している[3]。今回の調査では，このうち10点を実測することができた。

2001年3月に刊行された報告書Ⅳで黒色壷を検討した時は，大川遺跡の黒色壷に近い形状を持ち，また胎土も比較的精良な点が共通しているとして図5に掲載したクラスキノ土城の井戸出土資料17または18を参考として提示した。今回の実測調査では，この黒色短頸壷を実測することができ，大川遺跡出土の黒色壷と詳細な比較検討をする手懸りを得ることができた。その後、検討を進めるに当たって大川遺跡の黒色壷を再度詳細に観察する必要が生じ，2001年7月23日に余市水産博物館で観察と実測をすることができた。

2.大川遺跡出土の黒色壷

図1は，これまで大川遺跡出土の黒色壷として公表されてきた実測図である。この実測図は，調査担当者から提示されたもので，黒色壷の観察に当たっては この図に観察記録

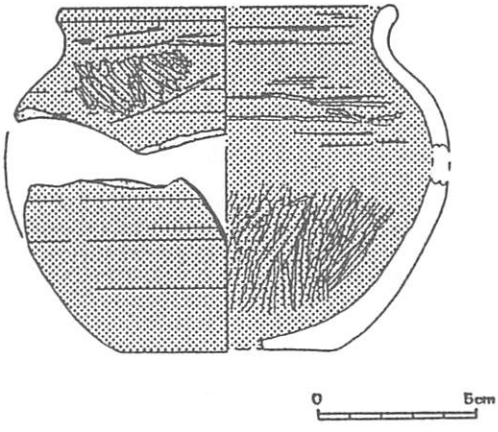


図1 大川遺跡出土黒色壷(旧実測)

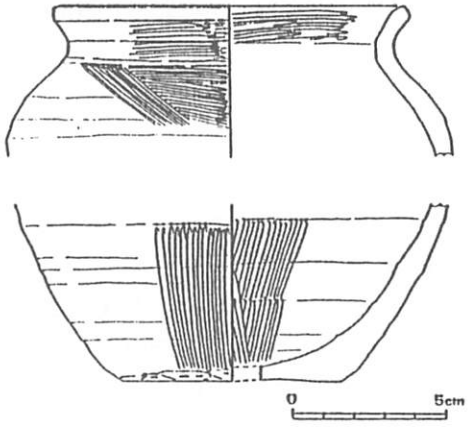


図 2 大川遺跡出土黒色壷(再実測)

を書き込んで原稿を執筆してきた。しかし，今回，クラスキノ土城の土器を実測したところ，大川遺跡の黒色壷についても自分で観察・実測する必要性を痛感した。今回，再実測をおこなったのは，球形に復元されている胴部の形状を再確認すると共に，底部付近のヘラ削りを確認する目的があった。大川遺跡の黒色壷は，図 1 では胴部が球形に表現されており，女真土器と対比する重要な根拠になっていた。しかし，復元された土器を再度観察したところ体部の中央で土器は破断しており，上半分と下半分に接合点の無いことが判明した。体部のカーブを検討したところ，上半の器壁は肩部付近に膨らみを持つのに対し，下半は底部から直線的に外反していることがわかった。この結果，体部の形状は従来の球形とは異なり，やや肩の張る形状になる可能性が高くなった。したがって，器高も従来の 12.4cm から 4mm ほど高くなり，今回掲載した図では 12.8cm に復元している。器面は粘土紐の積み上げ痕が残り，体部の下半を反時計回り方向にタテ磨きし，上半を左斜め上がりに磨いている。頸部から口縁にかけて，反時計回りにヨコ磨きを施している。底部から器壁の立ち上がり部分は，反時計回りにヘラ削りをおこなっている。また，底部外面はヘラ削りの上を磨いて調整している。底部の上に粘土を厚く重ねて体部下半を立ち上げており，器壁の下部は分厚くなっている。内面の調整は，下半を時計回りに二段のタテ磨き（上段から下段），上半から口縁にかけてヨコ磨きを行っている。

3. クラスキノ土城出土の黒色壷

報告書Ⅳでは図 5 の 17・18 が球形体部を持っていることから，図上で比較をおこなった。これらの土器群を実測して，製作方法を観察することができた。体部外面はヘラ磨きで，内面はナデ調整をしている。底部外面は静止糸切りか，砂底になっている。いずれの土器も，底部から器壁立ち上がり部分を幅広くヘラ削りしているのが特徴である。また，底部から立ち上がる器壁の厚さは体部上半と同じくらいで、大川遺跡の黒色壷とは底部接合技法に相違が見られる。体部下半を大きく削っている事例が多いことから，いったんは底部付近の器壁を分厚くつくって底部と接合し，生乾きの頃に外面を削って器壁を薄く仕上げたものと思われる。この体部外面の削り方向は時計回りに行われており，大川遺跡の土器に見られた反時計回りの磨き方向とは反対である。

底部の静止糸切りないし砂底，底部付近の器壁外面をヘラ削りすること，ヘラ削り方向が時計回り，以上の特徴は井戸から出土した土器群に共通して見られる技法である。実測の際に研究所に展示してある渤海から女真の土器を見たところ，いずれも底部付近を大きくヘラ削りしていた。このような底部付近

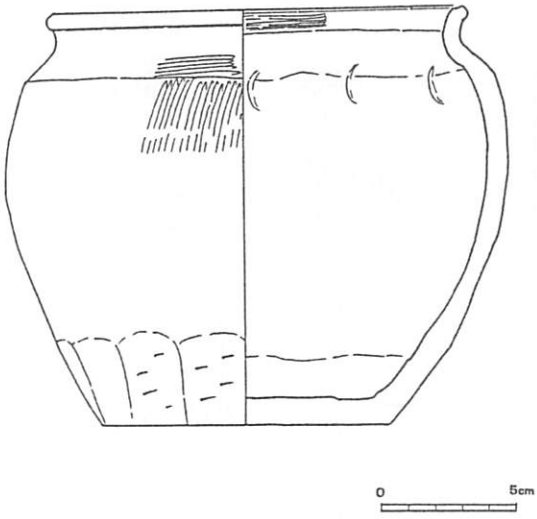


図 3 クラスキノ土城井戸出土土器実測図
(図 5-15)

のヘラ削りは，渤海後期から女真にかけて，底部整形技法の一般的な特徴と考えられる。また，胎土は図 5 の蓋が精良で砂礫をほとんど含まないのに対し，壷や鉢は全て多量に砂礫を含んでいた。

4. 大川遺跡出土黒色壷の再評価

大川遺跡出土の黒色壷は，底部に器壁を乗せており，器壁立ち上がりのヘラ削りは小規模で，ヘラ磨きの回転方向は反時計回り，底部の切り離し痕跡は不明でヘラ削りの上を磨いている。以上の観察の結果，大川遺跡出土の黒色壷とクラスキノ土城の井戸から出土した土器群との間には製作技法に大きな隔たりのあることが明かとなった。また，大川遺跡の黒色壷の胎土には砂礫がほとんど含まれていないのに対し，クラスキノ土城の井戸から出土した壷や鉢の胎土には砂礫が多く含まれていた。

大川遺跡出土の黒色壷については，球形胴部の形状から渤海末期の土器に比定できる可能性を考えてきたが，今回の検討によりその可能性は否定的に考えざるを得なくなった。それでは，この土器の系譜をどこに求めたらよいのだろうか。大川遺跡で黒色壷が出土したときにその出自を国外に求めたのは，この土器がつくられたと推定される 10 世紀初頭前後の北海道南部で擦文土器に黒色壷が見られないことが理由のひとつだった。大川遺跡とほぼ同じ頃に，千歳市美々8 遺跡から出土した体部上半の肩がはる黒色壷は，大川遺跡の黒色壷を考える上で重要な資料であるが，球形体部を持つとされてきた大川遺跡の黒色壷とは器形が異なるので別系譜の土器と考えてきた。しかし，今回の検討で大川遺跡の黒色壷も体部上半に肩を持つ器形となり，美々8 遺跡出土の黒色壷と相似形となった。この二つの黒色壷は，出自を共通にする可能性が高いと思われる。

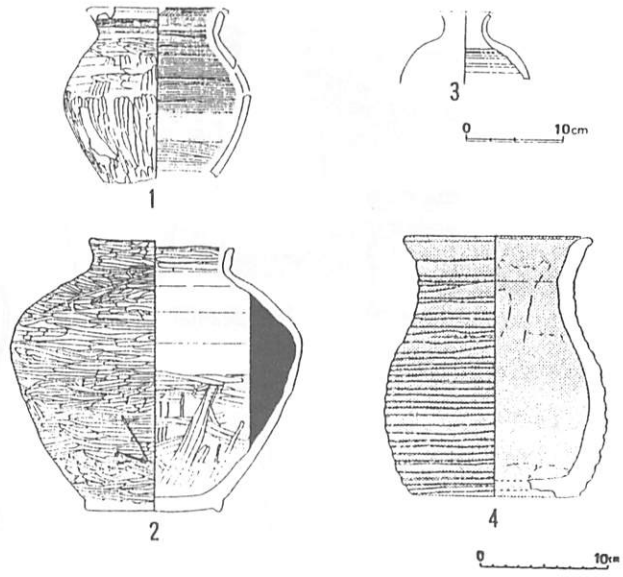


図 4 東北、北海道出土の黒色土器
1. 美々8 遺跡 2. 長谷遺跡 3. 雀館遺跡 4. ウパトマナイ沢遺跡

北日本における黒色土器の生産地は現在のところよくわかっていないが，報告Ⅳでも書いたように黒色土器が比較的多く出土する秋田県大館盆地が生産地の一つだった可能性がある。大川遺跡の黒色壷や美々8 遺跡の黒色壷は列島内で生産された可能性は高くなったが，北日本の黒色土器は日本列島の古代土器のなかで異質な存在であることには変わりがない。土器組成に黒色壷を持つようになった背景に，北日本の人々と渤海や女

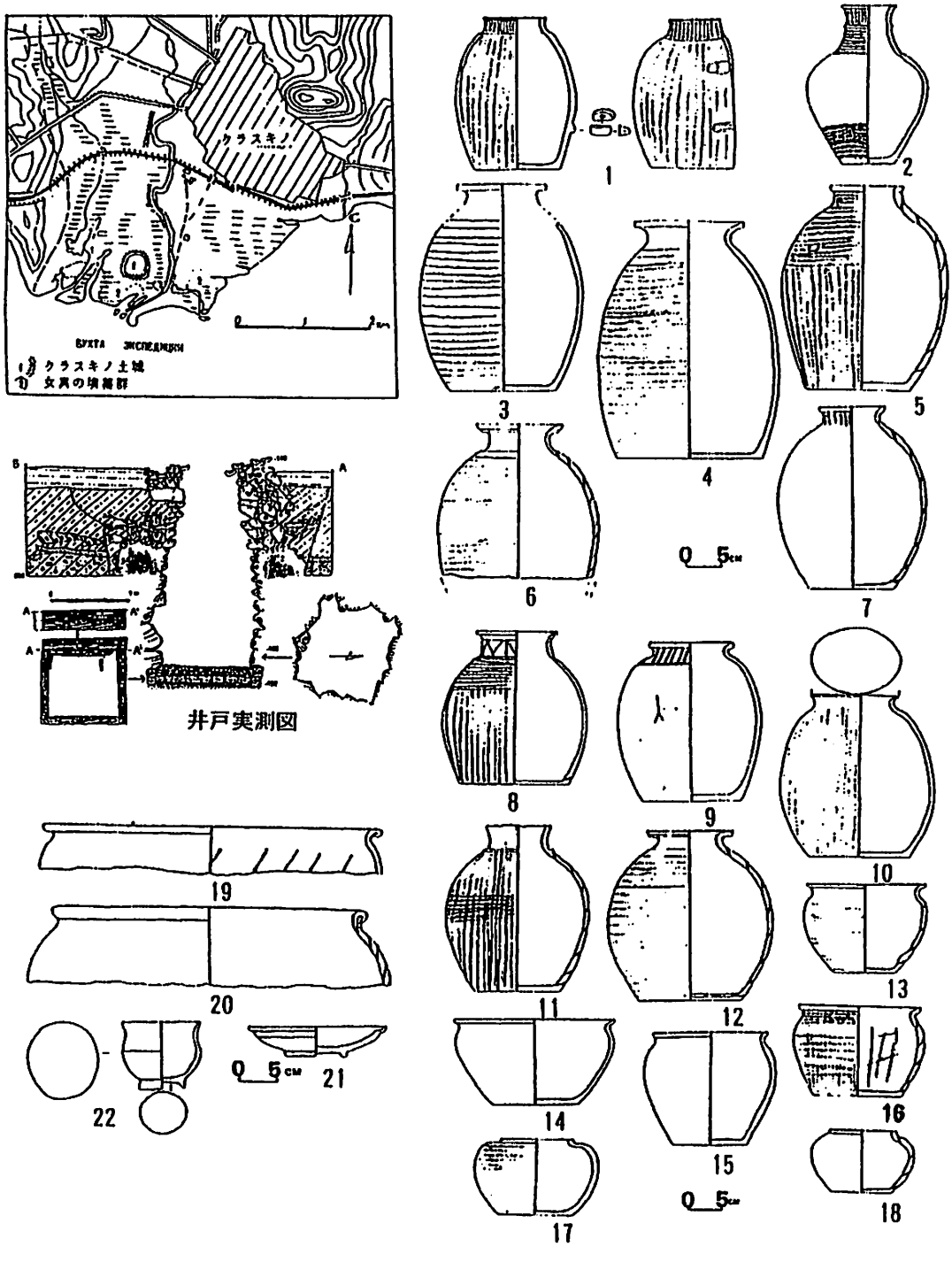


図5 クラスキノ土城井戸出土の土器

真との接触が何らかの形で反映しているのではないだろうか。

5. あとがき

当初は器形の類似点に気をとられていたが，クラスキノ土城の出土土器を実測したことにより両者の製作技法や胎土は異なることが判明した。最初に大川遺跡の黒色壷を見てから，10年の歳月を経てようやくその出自について日本産の可能性が高いという結論を出すことができた。遺物の観察にあたって実測が如何に重要な作業であるかを，今更ながら身を以て体験することになった。貴重な機会を与えていただいた，ロシア科学アカデミー極東支部の諸先生や青山学院大学の田村晃一先生，大川遺跡の黒色壷の再調査に便宜を図っていただいた余市町教育委員会の乾芳宏氏に心から感謝の意を表して小文を終わりたい。

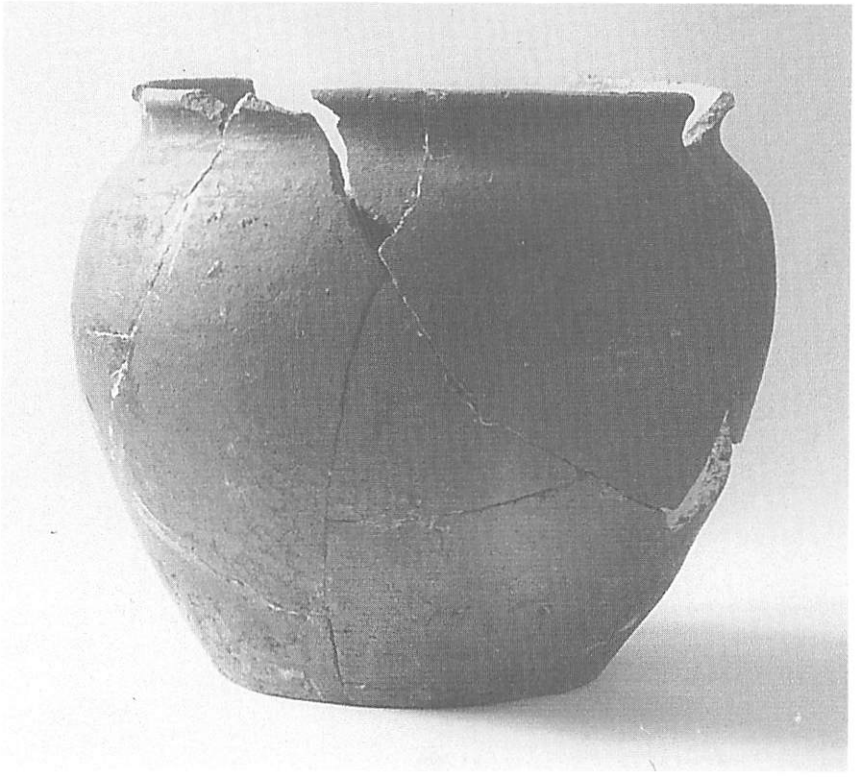


写真 1 クラスキノ土城井戸出土土器（図3写真）

〈脚注〉

1）「中国東北地方の渤海土器について－大川遺跡出土の黒色壺を考える－」『1993年度大川遺跡発掘調査概報』北海道余市町教育委員会 1994年

2）「黒色土器の再検討」『大川遺跡における考古学的調査Ⅳ』北海道余市町教育委員会 2001年

3）Е.И.Гельман、В.И.Болдин、А.Л.Ивлиев「РАСКОПКИ КОЛОДЦА КРАСКИНСКОГО ГОРОДИЩА」『ИСТОРИА И АРХЕОРОГИЯДАЛЬНЕГО ВОСТОКА』2000

余市水産博物館研究報告第5号：11－14.Mar.2002

野口雨情の来町年をめぐって

盛　昭史
北海道余市郡余市町入舟町21番地（余市水産博物館）

1. はじめに

余市水産博物館では，1994年に特別展「余市文学散歩」を開催した。その際，余市ゆかりの文学者について調査する機会を得た。いざ作業に取り掛かるとその資料は膨大であり，また，通説とされているものの中に疑問点も散見された。いわば消化不良をおこしたままでの特別展開催となったわけだが，その際宿題として積み残していた事項のうち，野口雨情の来町年についてここで記述をしてみたい。

2.「大正15年説」と「昭和15年説」

野口雨情（本名英吉　1882～1945）の業績については，ここで多言を費やすには及ぶまい。童謡作家として「七つの子」「青い目の人形」「赤い靴」など数多くの作品を残し，その歌は現在でも多くの人々に親しまれている。

雨情と北海道の関わりは深く，明治40年代の新聞記者時代を始め，幾度となく本道を訪れている。余市もその例外ではなく，『定本野口雨情』第5巻（未來社　1986）には，余市に題をとった12の歌が掲載されている。この中で，以下の3作については雨情の直筆が軸装されて町内に現存しており，町の指定文化財となっている。

余市岳から朝風夜風　街も繁昌と吹いて来る
通ふておいでよ大川橋は　西と東のつなぎ橋
海は紫空青々と　朝日かがやく茂入山

このうち，「海は…」の歌については，茂入山頂に歌碑が建立されており，裏面には「大正十五年六月来町之作」と刻字されている。

それでは，雨情は一体いつ余市町を訪れ，これらの歌を残したのだろうか。『余市町文教発達史』（余市町教育研究所　1982）は，この経過を以下のように記している。

大正15年，日本作家者協会をつくり，西条八十，堀内敬三らと活躍したが，この頃，文部省嘱託となりその委嘱をうけて全国二等無賃乗車券を交附され，情操教育のため，全国を歴訪，来道した際，余市にも立ち寄った。（中略）
野口雨情の本道行脚は，大正15年7月に札幌から層雲峡をまわり帰京し，8月に再び，釧路，弟子屈をまわり，その帰路余市で来遊して作品を残した。

一方，『北海道文学大事典』（北海道新聞社　1985年）野口雨情の項の記載は以下の通りである。

昭和15年7月と8月に北海道を旅して余市に立ち寄った。同町茂入山の雨情詩碑はその折の詩を刻んで昭和43年7月に建立された（佐々木逸郎）

両説の間には，実に15年の開きがある。しかし，これはどちらかが単純に年号を取り違えたという底のものではなく，それぞれがある根拠をもって主張されている。

3. 両説の根拠

1）大正15年説について

大正15年来町説の大きな論拠となっているのは，町内在住の舩木一夫氏の回想である。舩木氏によれば，大正15年7月，同氏が中学一年の夏休みの折雨情が来町し，父徳一郎氏を始め有志が町内を案内したという。

大正15年7月のある朝，珍しく早く起床した父が私を伴って店に行った。昨夜野口雨情先生が突然来られこれから藤田さんと一緒に茂入山を案内するのだとの事であった。(中略)しばらくして宿から出てきた雨情らしき人を中にはさんで三人の白絣に一文字の後ろ姿が朝もやの中を大川橋のほうに消えていったものである。
(舩木一夫『野口雨情の歌碑』発表年不詳)

この時宴席で前述の3作を雨情が揮毫したとされ，軸装した2幅を舩木氏自身が保有されている。軸箱には「大正十五年四月」と記されている。

大正 15 年説には，舩木氏の回想だけではなく，「傍証」も存在している。

平成6(1994)年10月6日付北海タイムス朝刊後志版は「雨情，大正にも余市を訪問」という見出しで以下のように報じた。

一方，雨情の郷里でも昭和 30 年に文学碑を建立しているが，その際発刊した詳しい年譜に，大正15年説を裏付ける記述があった。

この「年譜」とは，昭和 30 年に雨情の生誕地茨城県磯原で開催された，「雨情建碑祭」式次第に掲載されたもので，大正 15 年の項には，以下のような記述がみえる。

日本作家者協会を設立，堀内敬三，西条八十，葛原滋，松原至大とともに理事となる。この頃文部省嘱託となり，全国二等無賃乗車券交付され，情操教育のため東奔西走す。

この他にも，『石に刻んだ雨情の心』(宇都宮雨情会　1986)，『野口雨情の生涯』(長久保片雲　1980　暁印書館)が大正 15 年の来余としているが，両書ともに往時の花街や同席したとされる有志に関する記述がみられ，余市町への取材を元に書かれたものと思われる。更に，雨情研究の嚆矢とされる『野口雨情』(平輪光三　1957　雄山閣出版)には，大正 15 年に「文部省の国語調査関係の嘱託となって，二等の全国無乗車券を交付され，情操教育のため全国を奔西走した。」との記載がある。

2) 昭和15年説について

「昭和15年説」を採っているのは，『北海道文学大事典』のみではない。木原直彦氏の『北海道文学史　大正・昭和戦前編』(1976 北海道新聞社)巻末の年譜，『定本野口雨情』掲載の年譜，また雨情研究の第一人者である東道人氏の『野口雨情　詩と民謡の旅』(1995　審美社)などは，全て昭和 15 年の来道・来余とし，従って歌もその時の作としている。これには理由があって，昭和15年7月と8月，二度に渡り雨情が来道し，札幌・層雲峡・釧路・留萌等を巡ったことは，各地に残る資料や雨情自身の創作ノートから実証的に明らかになっているのである。雨情はこの時余市にも立ち寄っており，町内有志とともに撮影した写真が現存している。昭和15年の来余については疑問の余地がない。

従って，問題は果たして雨情が昭和 15 年の他に大正 15 年にも来余しているか否か，という一点に絞られることになる。もし大正15年来余が実証されれば，雨情年譜に新たな一項が加わることになるだろう。

4.「大正15年説」への疑問

いわば，「余市での定説」となっている大正15年説であるが，いくつかの疑問がある。先ず，来町したとされる月が資料によって異なっている。

・『余市町文教発達史』	大正15年	8月
・舩木氏の回想	同	7月
・舩木氏所有の軸の箱書き	同	4月
・雨情碑裏面の刻字	同	6月

なぜこのような食い違いが生じたのか不明である。

次に「傍証」とされる「雨情建碑祭」式次第年譜であるが，この年譜自体には，「東奔西走す」とあるだけで，来道・来余したとの記載はない。また，同年譜中「日本作家者協会を設立」とあるのは，「日本作歌者協会」の誤りである。現在の「日本音楽著作権協会」の前身的性格を持つ同会の設立は，大正 15 年ではなく，大正14年5月である。これは，大正 15 年 9 月に雨情，北原白秋，佐々木信綱らが設立した「日本作歌協会」との混同と思われる。前述した『余市町文教発達史』に

も同じ誤記がみられることから，そもそも同書がこの年譜を下敷きにして書かれていることは明らかである。従って，この年譜は大正 15 年説の「原資料」と言うべきものであり，「傍証」とはなり得ない。

また，『余市町文教発達史』中の，同様に式次第年譜を下敷きにして書かれたと思われる「文部省嘱託となりその委嘱を受けて全国二等無賃乗車券を交附され，情操教育のため，全国を歴訪，来道した際，余市にも立ち寄った」という記述にも疑問がある。当時文部省は理知教育に力を注ぎ，童謡など情操に訴える傾向のものを教育の場から排斥していた。これに対し雨情は，大正 14 年 6 月『芸術と教育』誌に「文部省の童謡禁止とその無智」と題する小文を寄せ，「なんという無暴（ママ）、あきれ切った無智」と，激しく批判している。このような時代背景の中で，その翌年に文部省が雨情を嘱託に委嘱し，情操教育のために無賃乗車券を交付するということがありえるのか，近年刊行された評伝等にはこのような記述がないだけに，疑問が残る。

そして，もしこのような事実があったとして，大正 15 年に雨情が全道を行脚したとするならば，必ず余市以外にも足跡を残しているはずである。しかし，年譜や研究書，そして雨情の書簡をみても，大正 15 年に北海道を行脚したという記録はない。ちなみに，余市町文教発達史』に記載されている「大正 15 年 7 月に札幌から層雲峡をまわり帰京し，8 月に再び，釧路、弟子屈をまわり」云々というのは，明らかに昭和 15 年の誤りである。前述のように，回ったとされるそれぞれの土地で昭和 15 年とする記録が残され，雨情自身の創作ノートからも実証的に明らかになっている。

以上のことから，雨情がもし大正 15 年に余市を訪れたとするなら，その目的が問題となるだろう。大正 15 年説の最も信頼すべき論拠は舩木氏の回想であり，同氏は雨情の来余を自身の「中学一年の夏休み（7 月のある朝）」とされている。一方，『定本野口雨情』に収録された書簡をみると，雨情は大正 15 年 7 月 23 日に，「明日中には帰れる」という内容の葉書を，草津温泉から吉祥寺の自宅に出している（野口通宛）。従って，雨情が来余したとすれば，吉祥寺の自宅に戻った 7 月 24 日から 7 月 31 日までの間ということになるが，雑誌投稿欄の選考などで多忙を極めていたはずの雨情が，さしたる目的もなしにこの期間に来道し，余市の有志と遊興しただけで他の土地には足跡を残さず離道した，というのはいかにも不自然である。

次に，雨情揮毫 3 作の成立年をめぐって，疑問がある。

『定本野口雨情』第 5 巻には雨情が全国各地を訪れた際作った地方民謡が収められている。雨情の地方民謡には類型的な作品が多くみられ，余市を歌った作品もその例外ではない。

余市岳から朝風夜風街も繁昌と吹いて来る
（余市）
震岳から朝立つ風は山鹿繁昌と吹いて来る
（熊本昭 8）
三階山から朝立つ風は港繁昌と吹いて来る
（島根昭 10）
暑寒岳からそよふく風は
留萌繁昌と留萌繁昌と吹いて来る
（留萌昭 15）
心して吹け朝風夜風ここは竜王城の跡
（愛媛昭 16）
高盛山から朝立つ風は内子繁昌と吹いて来る
（愛媛昭 16）
通ふておいでよ大川橋は西と東のつなぎ橋
（余市）
通ふておいでよ夜昼峠春は桜の花吹雪
（愛媛昭 10）
参宮街道の伊勢大橋は伊勢と東路つなぐ橋
（三重昭 11 前後）
日本ラインの犬山橋は美濃と尾張のつなぎ橋
（愛知昭 13）
海は紫空青々と朝日かがやく茂入山
（余市）
杉は緑に空青々と小国山里日も長閑
（熊本昭 9）
山は緑に空青々と竹東住みよい暮しよい
（台湾昭 14）

注目すべきは，これらの作品が創られた年である。いずれも昭和 10 年前後に集中し，大正年間や昭和初年のものは見当たらない。この事情には，創作童謡の勃興と衰退という文学史の一断面が介在している。

雨情，北原白秋，西条八十らによって主導された童謡運動は大正 14，15 年にピークを迎えるが，昭和に入ると急速に衰退してゆく。この点について，東道人『野口雨情　童謡の時代』(1999　踏青社）は次のように記している。

> これまで童謡運動を主導していた他の有力な詩人たちも，新たな文学的展開をめざしてそれぞれの道筋を辿り始めることになる。北原白秋は短歌の分野へ，西条八十は歌謡（戦時中は軍歌）の分野へと向かい，野口雨情の場合は新民謡とも呼ばれる地方民謡の分野だったのである。

雨情の場合，童謡から地方民謡へと新たな道へ踏み出す，その分岐となったのが昭和 2～3 年だったのである。これ以後，雨情は民謡の普及のため精力的に全国を回り，各地に多くの歌を残していった。作品の多くは創作ノート「旅の風草」に書き留められ，余市を歌った作品はその 6 冊目，昭和 15 年に訪問した留萌，弟子屈，十勝などの道内各地に並んで書かれている。これらの事情を斟酌するならば，前掲の 3 作についても昭和 15 年の作とみるのが妥当であり，大正 15 年とするには疑問が残る。

5. まとめ

雨情の来余年をめぐって書き進めてきたが，結果的に「大正 15 年説」に疑問を呈するかたちとなった。一方で，舩木氏の記憶は鮮明であり，「大正 15 年説」を完全に否定する論拠もまた示し得たわけではない。

大正 15 年，もしくはその前後に雨情が余市を訪れた可能性は依然として残されている。例えば，大正 15 年 6 月 10 日付北海タイムスには，次のような記事が見える。

> 民謡詩人野口雨情，詩人時雨音羽，作曲家藤井清水，独唱家権藤円光の四氏は来る（6 月=筆者註）二十三，四日当地に於て凡影会主催札幌市教育会及び本社の後援の下に音楽童謡会を催すことになった。

この「音楽童謡会」の帰路，余市に立ち寄った可能性は否定できない。ただ，この会については開催されたとする大正 15 年 6 月 23，24 日前後の新聞に全く関連記事がみられなく，なにかの事情で中止になった疑いがある。また，雨情は少なくとも 6 月 19 日の時点では京都に滞在しており，そこから吉祥寺の自宅に充てて「21 日の夜までに帰ります」と葉書を出している。この当時，東京・札幌間の移動には急行で約 33 時間を要しており（小樽交通記念館　佐藤卓司氏のご教示による），21 日帰京，23 日札幌で講演という行程は，不可能ではないにせよ，実際には雨情の来道がなかったと推定するに十分な要因である。

この他、書簡や年譜によれば雨情は昭和 2 年，3 年と連続して 7 月下旬に北海道を訪れており，この際余市に立ち寄った可能性は否定できない。

これら一つ一つの可能性について細かく検証してゆく作業は，今後の課題として自らに課しておきたい。野口雨情の来余年については，半ば以上郷土史の分野に属しており，先達の助言を乞う意味で拙論を開示した。願わくば，大方の批判を頂戴したい。

追記：本稿の執筆にあたり参照した主な文献は本文中に記載しました。
また，東道人氏（岐阜市），前田克己氏，舩木一夫氏（余市町）から貴重なご助言をいただきました。付記してお礼を申し上げます。

余市水産博物館研究報告第5号：15－22. Mar. 2002

天内山遺跡出土の続縄文土器について

乾　芳宏
北海道余市郡余市町入舟町21（余市水産博物館）

Ⅰ はじめに

天内山遺跡は，余市川河口左岸の標高約20mの舌状台地に立地している。古くからチャシとして知られており，昭和45年（1970）に土木工事のため遺跡が破壊されるとのことから発掘調査が行なわれ，翌年には報告書が刊行されている。昭和51（1976）年には続縄文・擦文時代の貴重な出土遺物であるとのことから171点が北海道有形文化財に指定されている。この遺跡についての歴史，発掘状況等については報告書[1)]に譲ることとして，出土土器についてのみ再報告するものである。

報告する土器は，すべて報告書に掲載されているものであるが，続縄文時代の墳墓及び墳墓外出土の土器は写真のみであり，他の遺跡と比較する上で基本となる実測図が無いために多くの研究者に不憫をかけていたものである。このような現状をふまえ復元されている土器について実測を行ない一般及び研究者に供することを目的とするものである。

Ⅱ 土器について

報告書において後北式土器を第Ⅰ群土器，擦文式土器を第Ⅱ群土器としており，本稿もその分類に従って以下に第Ⅰ群土器の説明を加えることとした。

（1）墳墓出土土器

1）C区2号墓出土の土器（第1図）

ほぼ完形に近い土器が2点出土している。

・No1（4類）は大形の深鉢形で内面には炭化物の付着がみられる。口縁は2個1対の緩やかな突起をもち，口唇部に刻みを施し，底部は上底を呈している。高さ35.5cm，口径26cm，底径8cmを測る。地文となる縄文原体はＲＬで胴部は帯縄文，胴部下半は縞縄文である。口縁から胴部には微隆起線（細い粘土紐と棒状工具による撫で付け）による楕円形の組み合わせ文がみられ，内部に三角の刻文を施している。

・No2（4類）は深鉢形で口縁は2個1対の緩やかな突起をもち，口唇部に刻みを施し，底部は上底を呈している。高さ18cm，口径15.8cm，底径5cmを測る。地文となる縄文原体はＲＬで胴部は帯縄文，胴部下半は縞縄文である。口縁から胴部には微隆起線（細い粘土紐と言うよりは棒状工具による撫で付けによる隆起）による半楕円形の連続文の組み合わせとなっている。その内部に三角の刻文を施している。

2）C区6号墓出土の土器（第2・3図）

ほぼ完形に近い土器が5点出土している。

・No3（5類）は胴部下半を欠損する細頸壷で赤色顔料が塗られ，口縁は平縁で吊耳状の把手を有している。口径7.5cmを測る。地文となる縄文原体はＲＬで胴部は帯縄文，胴部下半は縦位縄文である。頸部下から胴部には微隆起線（細い粘土紐と棒状工具による撫で付け）による円形文がみられ，それらを曲線で繋いでおり，内部には三角の刻文を施している。

・No4（5類）は細頸壷で赤色顔料が塗られ，口縁は平縁で吊耳状の把手を有している。口唇部に刻みを施し，底部は深い上底を呈している。高さ18.5cm，口径9cm，底径5.5cmを測る。地文となる縄文原体はＲＬで胴部は帯縄文，胴部下半は縞縄文である。頸部下から胴部には微隆起線（細い粘土紐と棒状工具による撫で付け）による円形文がみられ，それらを曲線で繋いでおり，内部には三角の刻文を施している。

・No5（5類）は細頸壷で赤色顔料が塗られ，

口縁は平縁で吊耳状の把手を有している。口唇部に刻みを施し，底部は深い上底を呈している。高さ 22.7 cm，口径 12 cm，底径 5.5 cm を測る。地文となる縄文原体はＲＬで胴部は帯縄文，胴部下半は縞縄文である。頸部下から胴部には微隆起線（細い粘土紐と棒状工具による撫で付け）による円形文がみられ，内部には三角の刻文を施している。また胴部下半には条線文が一周している。

・No6（5 類）は深鉢形で口縁は平縁で吊耳状の把手を有し，底部は上底を呈している。高さ 18.4cm，口径 11.5 cm，底径 5.5 cmを測る。地文となる縄文原体はＲＬで胴部は帯縄文，胴部下半は縦位縄文である。口縁から胴部には微隆起線（細い粘土紐と棒状工具による撫で付け）による半楕円形の連続文の組み合わせとなっており，その内部に三角の刻文を施している。

・No7（5 類）は深鉢形でゆるやかな山形口縁となり，底部は上底を呈している。高さ 20 cm，口径 11.2 cm，底径 5 cmを測る。地文となる縄文原体はＲＬで胴部は帯縄文，胴部下半は縞縄文である。口縁から胴部には微隆起線（細い粘土紐と棒状工具による撫で付け）による円形文を 4 個配置し，四角形で囲む独特な文様構成となっている。

3）C 区 8 号墓出土の土器（第 3・4 図）

ほぼ完形に近い土器が 4 点出土している。

・No8（3 類）は口縁が朝顔状に開く壺形で，胎土は精錬された丁寧な造りで，底部は上底を呈している。高さ 20.5 cm，口径 7.7 cm，底径 5.3 cmを測る。地文となる縄文原体はＲＬで胴部は帯縄文，胴部下半は縞縄文である。口縁下から胴部には細い粘土紐に刻みを施し擬縄文風に見せている。円文を上下に配列し直線で繋いでおり，内部には三角の刻文を施している。

・No9（Ｉ類）は深鉢形で口縁は平縁で刻みを施し，底部は上底を呈している。胎土は小石粒子を多く含み，器面の撫では殆ど見られないものである。高さ 13 cm，口径 11 cm，底径 5.7 cmを測る。地文となる縄文原体はＲＬで胴部は帯縄文，胴部下半は縞縄文である。口縁から胴部には沈線による鋸歯文を 2 段描き，その上下を結節沈線で区画している。

・No10（1 類）は深鉢形で口縁は平縁で刻みを施し，底部は上底を呈している。高さ 11.5 cm，口径 10.5 cm，底径 4.5 cmを測る。地文となる縄文原体はＲＬで胴部は帯縄文，胴部下半は縞縄文である。口縁には細い粘土紐に刻みを施し擬縄文風の貼り付けが 2 条見られ，帯縄文部分には 3 段に三角の刻文を施している。

・No11（1 類）は深鉢形で口縁は平縁で刻みを施し，底部は上底を呈している。高さ 10.2 cm，口径 8.5 cm，底径 4.5 cmを測る。地文となる縄文原体はＲＬで胴部は帯縄文，胴部下半は縞縄文である。口縁には細い粘土紐に刻みを施す擬縄文風の貼り付けを 2 条配していたが大半が剥脱している。

（2）墳墓外出土の土器（第 4 図）

・No12（5 類）は深鉢形でゆるやかな山形口縁となり，口唇部に刻みを施している。底部は上底を呈し，高さ 21.5 cm，口径 18 cm，底径 5.5 cmを測る。地文となる縄文原体はＲＬで胴部は帯縄文，胴部下半は縞縄文で部分的に帯縄文が見られる。口縁から胴部には微隆起線（細い粘土紐と棒状工具による撫で付け）による方形区画内に楕円形文を配置する文様構成となっており，胴部の帯縄文はそのために大半が磨消されている。

・No13（5 類）は深鉢形でゆるやかな山形口縁となり刻みを施している。底部は上底を呈し，高さ 10.2 cm，口径 8.5 cm，底径 3.2 cm を測る。地文となる縄文原体はＲＬで胴部は帯縄文，胴部下半は縞縄文が見られる。口縁から胴部には微隆起線（細い粘土紐と棒状工具による撫で付け）による半円形文を描き、三角の刻文を配列している。

・No14（5 類）は深鉢形でゆるやかな山形口縁となるもので，底部は上底を呈している。高さ 17 cm，口径 16 cm，底径 5.8 cmを測る。地文となる縄文原体はＲＬで胴部は帯縄文，胴部下半は縞縄文が見られる。口縁から胴部には微隆起線（細い粘土紐と棒状工具による撫で付け）による半円形文を描き，爪形の刻

みを配列している。

Ⅲ まとめ

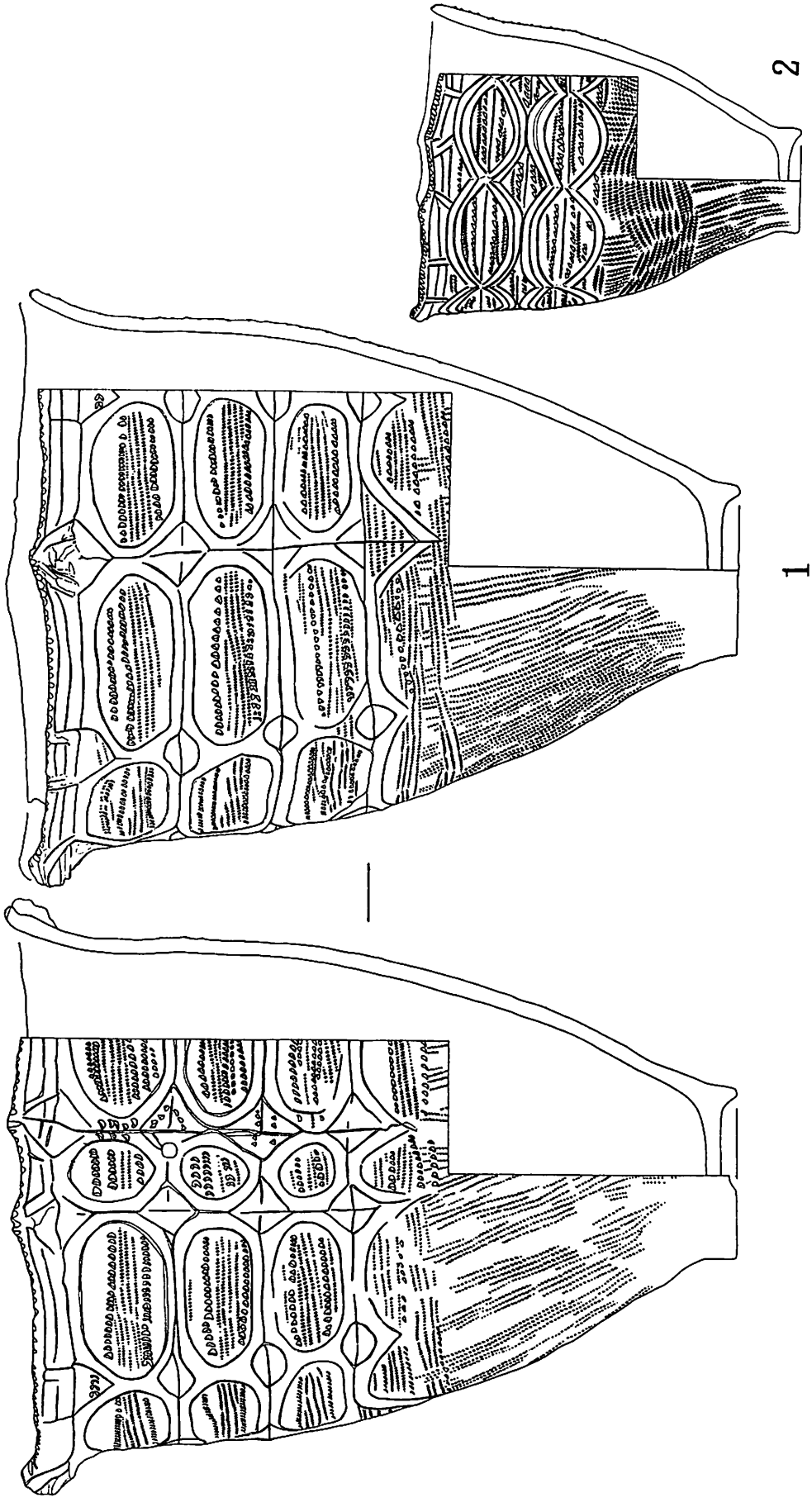
報告における土器の分類は，「第Ⅰ群 1 類は恵山式要素をもつもの，2 類は 1 類に近い関係，3 類は隆起線のもつもの，4 類は特殊な操作の微隆起線のもつもの，5 類は微隆起線の発達しているもの」としている。土器型式からは 1・2 類は恵山式の面影を残す後北 A 式，3 類は後北 B 式，4・5 類は後北 C1 式に相当し[2]，1・2・3 類が供伴していることから後北 A 式から後北 B 式への移行期の土器と思われる。4・5 類は細い粘土紐と棒状工具による撫で付けによる文様構成となっており，円形（同心円）を基調として直線で繋ぐもの，格子を基本として半楕円形，半円を連続する 2 種の文様構成がある。

施文順序は大きく分けるとａ：胴部下半に縞縄文（縦位縄文をあらかじめ間隔をおいて施すもの）の施文，ｂ：胴部の帯縄文（横走縄文）の施文，ｃ：器面をわずかに撫でる，ｄ：細い粘土紐を貼りつけの後に棒状工具による撫で付け，ｅ：三角の連続刻文施文の 5 工程となっている。さらにｄ工程では細い粘土紐をより器面に接着させるための細い棒状工具による撫で付けであったが，次第に太い棒状工具による撫で付けの微隆起が文様要素となっていくようである。恵山式土器ではｃ工程において縄文施文後の半乾きの段階で器面を丁寧に磨きをしていることが多く，文様構成の差とともに土器製作においても留意すべき点となっている。

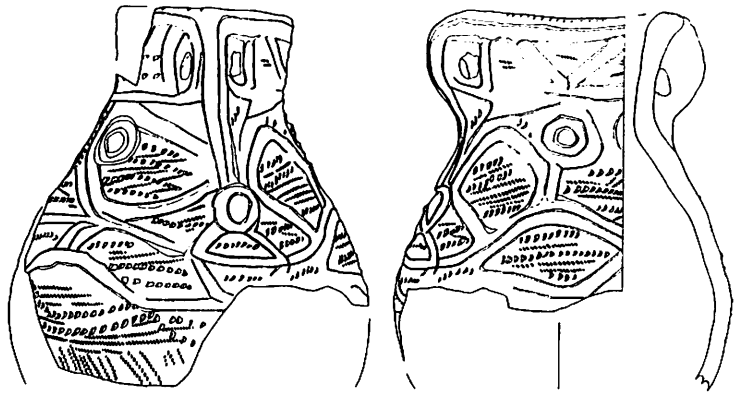
続縄文時代前半の道央部は恵山式と後北式文化の接点地帯にあたり，C 区 6 号墳墓における副葬品は土器型式としての供存関係を知る上で興味深いものである。

周辺地域における後北式期の遺跡において町内では余市川河口右岸の大川遺跡[3]，フゴッペ川河口左岸のフゴッペ洞窟[4]，小樽市では蘭島川流域の餅屋沢[5]・チブタシナイ遺跡[6]などが知られるが，続縄文時代後半の拡散期に相当する後北 C2 - D 式期の遺物が主体となっている[7]。道内においても前半の後北式期の遺跡は少ないことから，天内山遺跡のようなまとまった資料は非常に重要であると認識される。

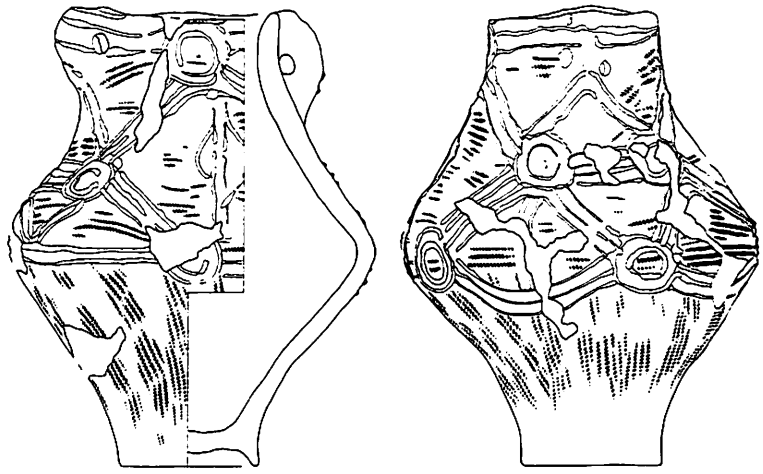
以上，土器の実測図に重点を置いてきたが，型式は相対年代の基本をなすものであり，今後は墳墓形態，副葬品なども比較，検討されるべきものと考える。なお，実測図作成に当たり，斉藤麻紀氏の協力を得ましたことを記して感謝いたします。



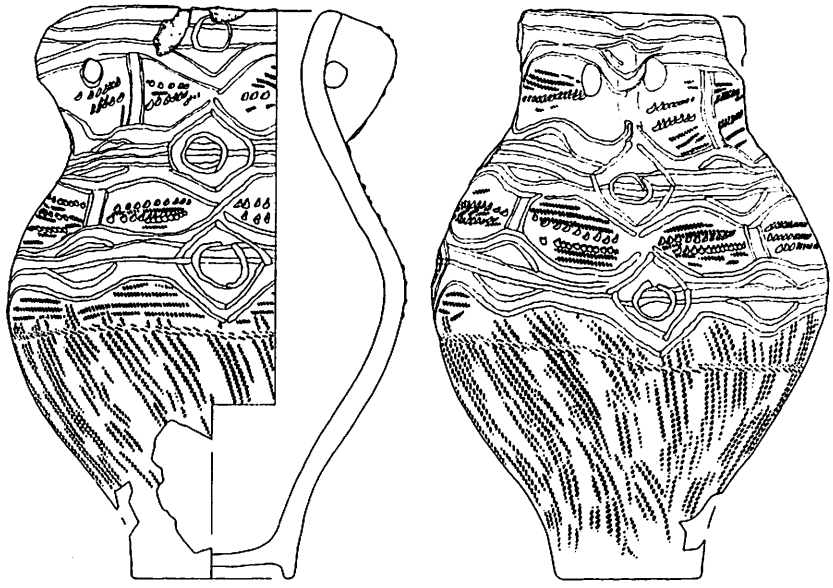
第1図　C区2号墳墓出土の土器(1／3)



3

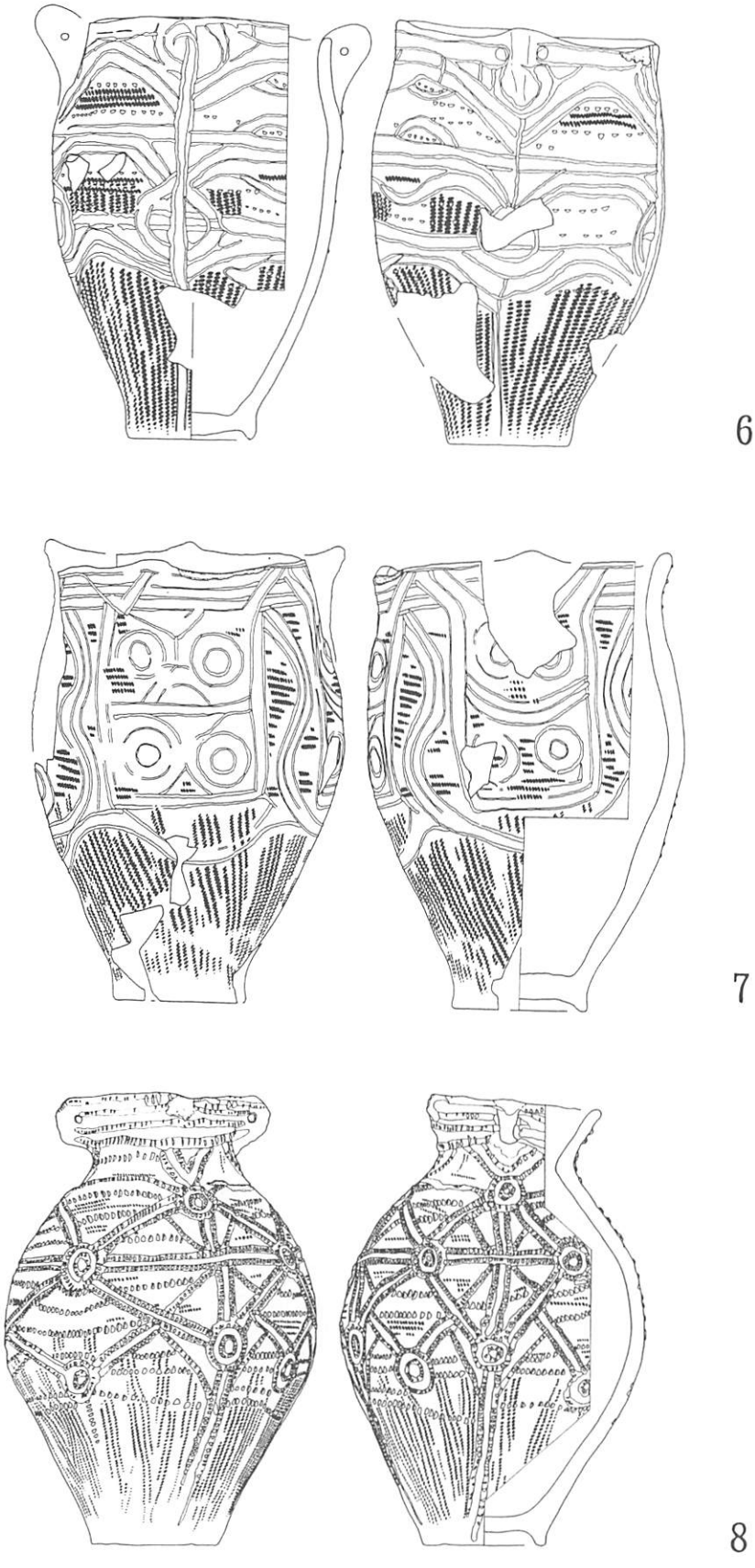


4

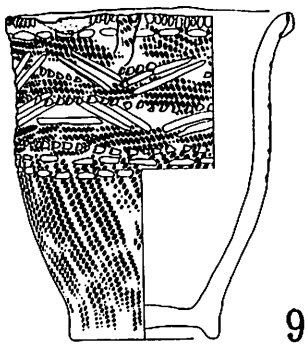


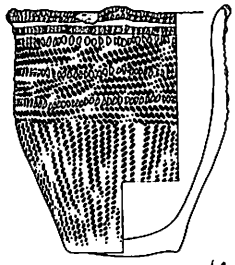
5

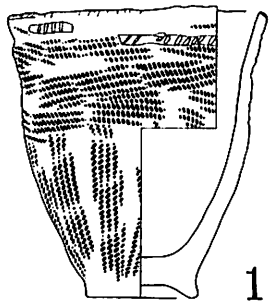
第２図　Ｃ区６号墳墓出土の土器(1／3)

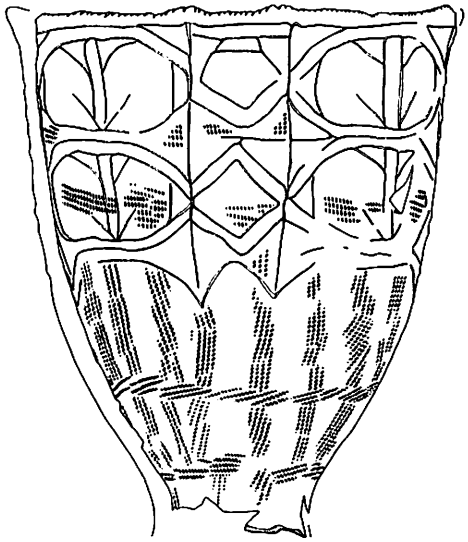


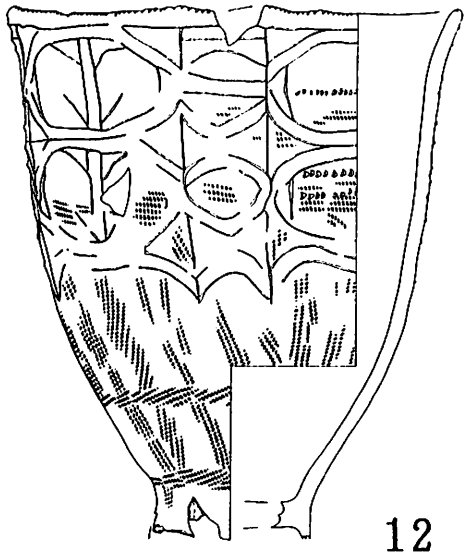
第３図　Ｃ区６号(No.6, 7)・８号(No.8)墳墓出土の土器(1／3)

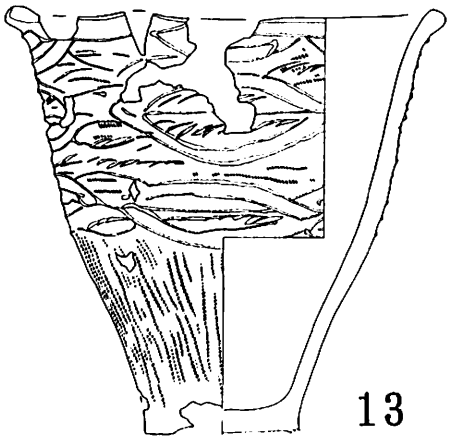


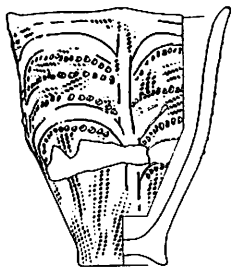












第４図　Ｃ区８(No.9-11)・墳墓外(No.12-14)出土の土器(1／3)

＜脚注＞

[1] 峰山巌他　1971『天内山』余市町教育委員会

[2] 河野広道　1959「北海道の土器」『郷土の科学』23

[3] 乾　芳宏他　2000『大川遺跡における考古学的調査』II　余市町教育委員会
乾　芳宏他　2001『大川遺跡における考古学的調査』III　余市町教育委員会

[4] 名取武光他　1970『フゴッペ洞窟』フゴッペ洞窟調査団

[5] 大島秀俊他　1991『蘭島餅屋沢遺跡』小樽市教育委員会

[6] 大島秀俊他　1992『チプタシナイ遺跡』小樽市教育委員会

[7] 後北 C_2 - D 式期になると，北海道をはじめとして，本州，千島，樺太等の周辺地域に分布を拡大しはじめるが天内山遺跡ではその頃の墳墓は発見されておらず，大川，餅屋沢遺跡のように低地に確認されている。また後北 C_1 式までは深鉢で上底の器形が主流であったが，後北 C_2－D 式になると注口・片口形で平底の土器が多く使用されるようになる。このような現象は生活様式において大きな変容があったものと想定される。

＜参考文献＞

石附喜三男　1976「鈴谷式土器の南下と江別式土器」『北海道考古学』12
髙橋和樹他　1981「瀬棚南川」瀬棚町教育委員会
髙橋正勝他　1984『元江別遺跡群』江別市教育委員会
石橋孝夫他　1984『紅葉山 33 号遺跡』石狩町教育委員会
田才雅彦　1993「続縄文時代後北期から擦文時代初頭の土墳墓について」『21 世紀の考古学』
石井　淳　1998「後北期における生業の転換」『考古学ジャーナル』439
青野友哉　1999「大洞～恵山式土器の墓と副葬品」『海峡と北の考古学』
長沼　孝　2000「続縄文文化」『季刊考古学』70

余市水産博物館研究報告第5号：23－36. Mar. 2002.

余市町豊浜地区の「ニシン漁労」民俗について

浅　野　敏　昭

北海道余市郡余市町入舟町21（余市水産博物館）

Ⅰ はじめに

昭和45年に北海道教育委員会より刊行された『日本海沿岸ニシン漁労民俗資料調査報告書』（以下，『ニシン漁労』）は昭和43年度から2ヵ年に亘り，日本海側の6支庁管内，11市町村を抽出して実施された聞き取り調査の結果を掲載したもので，生産歴（ママ）や年中行事，衣食住，生業や社会構成，芸能，娯楽等ニシン漁に関わった地域の民俗調査として広範な範囲を対象として行なわれたものであった[1)]。

小稿では，余市町豊浜町（以下，豊浜地区）に生れ，そこで長く生活された久保田雷程氏にお会いする機会を得たため，『ニシン漁労』で用いられた聞取り項目を採用した聞取り調査を行った。

久保田氏が生活された大正末から昭和30年頃までの豊浜地区は，ニシン漁獲量に豊凶が見られつつも漁が依然続けられていた時期であった[2)]。

地区住民の大部分の生活は漁業に依存し，とりわけニシン漁の豊凶は地域の重大な関心事であり，このため地域の行事や信仰，共同作業は春のニシン漁が中心に据えられて行なわれることとなった。また漁労以外でも地域の行事や葬式，簡易な土木工事，冬期の除雪などが地域全体あるいは青年団によって行なわれ，地域の成員相互の関わりには深いものがあった。

かかることから小稿では同氏の個人史を記録し，ニシン漁が行われていた大正末から昭和にかけての豊浜地区の行事や習俗についての報告を行いたい。

豊浜地区の概況

豊浜地区は余市町の西端に位置し，西は古平町に接する。湯内岳より日本海に注ぐ湯内川下流の両岸，急峻な崖が迫る狭隘な平地に家並みが続く。海岸は断崖絶壁が続き海底も岩礁が多く，海上にはローソク岩が屹立し，付近は古くから鰊が群来る海岸とされてきた。

近世場所請負制下，同地区はユウナイと呼ばれた。場所請負人の出張番家には番人が配置され，請負人自らの漁業活動を行うと共に，幕末に向け増加する追鰊漁者の監視を行っていた[3)]。

安政年間の「西蝦夷地ヨイチ廉絵図面」中には同所に「字ユウナ井番家」，「土人小ヤ」，「出稼小ヤ」が見られる[4)]。

明治3（1870）年，豊浜地区は開拓使により沖村と改称され，「出樽平」，「島泊」，「湯内」の3地区により構成され，維新前の入稼者は12戸を数え，アイヌ戸数は7戸35名であった（昭和30年に町名改正され余市町豊浜町となる）[5)]。

明治31(1898)年時の戸数は188戸，人口1,355名，青森及び秋田県出身者が最も多く，「出樽平」には34名の「和人」，「島泊」には漁家27～28戸，村内で最も大きな集落である「湯内」は123戸であり，巡査駐在所，旅人宿，小売商等があった[6)]。

ニシン漁の規模でいえば，同年の建網漁者24戸，営業者14名，「差網」968放であったものが，翌32年には建網は同数，差網1068放となった。「湯内」の小黒浜蔵は角網5統を有し，158名の漁夫で操業していた。沖村の建場中，「余市市街人」の所有する建網は12統であった[7)]。

また明治32（1890）年の土地利用状況について見れば，畑約16町歩，宅地約1.4町歩，海産干場14町歩であった[8)]。

この後，昭和8（1933）年頃には出足平，湯内，島泊の総戸数170，人口は1,043名とあり，減少を見た[9)]。

学校は明治14（1881）年，小黒由蔵を総代人として私設の学校が設立され[10)]，明治34(1901)年余市郡沖尋常小学校が設置認可を得て開校した[11)]。

沖村稲荷社の創立は明治18（1885）年，保食神を祭る。京都伏見稲荷の分霊を勧請，毎年6月1日に祭典を行っていた[12)]。湯内川の右岸の

獅子ヶ沢にあったが，国道改修のため現在は別の場所に移設された。

寺院は明治40（1907）年に永全寺説教所が置かれた[13]。

余市住友鉱山は明治18年に発見，同27年三井鉱山部により探鉱を開始した。同45年，田中鉱業㈱が三井より買収，2年後放棄，昭和8年になって小樽市山崎幸輔が探鉱し，翌9年大阪住友合資会社が譲り受けた。同社は住友余市鉱山湯内坑として操業，昭和12年に山道選鉱場が完成し，昭和39（1964）年に閉山された[14]。

聞取り調査について

最初の聞取り調査は平成12年3月に行い，その後平成13年12月より5度にわたり集中的に聞取りを行った。話者である久保田氏には『ニシン漁労』で用いられた聞取り項目を伝え，それらの中から回答可能なものにお答え頂き，録音記録を実施した。記録時間は6時間程度のものとなった。それらを文章化し，併せて筆者が作成した豊浜地区の地形概況図に当時の建物や土地利用状況を記載した。聞取り結果の内，記憶が不鮮明なものは，確認の上，文章から削除した。聞取り調査の結果を以下に報告する。

（文中敬称略）

久保田家と雷程氏の生い立ち

久保田雷程の父久保田伝蔵は明治4（1871）年，久保田家の長男として松前町に生れ，積丹町美国において大船頭としてニシン漁に従事した。

余市町豊浜地区に居を移してからは同所において小黒家経営の建網漁の大船頭を務め，大正期からは古平町田岸家経営の建網の船頭を長く務めた。大船頭であった伝蔵には，隣接する古平町や余市町内の船頭が教えを乞いに訪ねるものが多く，地域の船頭の中心的な人物であった。

伝蔵の子，8人兄弟のうちニシン漁他漁業に携わったものは四男雷程を含めた4名であった。

雷程は大正7（1918）年，余市町大字沖村字湯内に父伝蔵の四男として生れ，沖尋常小学校を昭和5（1930）年に卒業，昭和43（1968）年に町内大川町に転居されるまで，昭和14年から約3年間の兵役を除いた45年余を豊浜地区に生活した。

昭和5（1930）年に小学校を卒業後，余市中学に進学の予定であったが，ニシン皆無漁の年と重なり進学を断念した。卒業後は仁木町でのリンゴの袋かけ作業などに従事し，昭和7年頃に荒木家所有の建場において久保田家が歩方制経営による操業を行なった頃から同家の兄弟と共にニシン漁に携わった。

Ⅱ 集落と年中行事

集落の様子

父伝蔵が豊浜に来た頃の集落は，松代宅までが家並みが続いていた。その後は100から110世帯にもなったと思う。ニシン漁の時期になると「雇い」の人達が来て集落の人口は1.5倍以上にもなった。

稲荷神社を過ぎて田岸家の段々状の干場を越えると滝があった。

海岸には東側から種田家の袋潤，かつての田岸番屋，荒木家のロウカ，大野家のロウカが並び，湯内川左岸の現豊浜トンネル近くにはカクサン猪俣家出張所のロウカがあった。猪俣家のロウカは，その前にはカネマル今家所有のロウカだったが，それは時化で壊れてしまい，その後山科家のロウカが建った。その並びで川の少し上流には猪俣家の木造の建物があり，電気館と呼ばれていたが，大水で流されてしまい，昭和の始めにはなくなっていた。

余市方面へ向かうと，中腹にトンネルがあり，そこを越えたところに滝があり，タキノサワと呼ばれていた。その滝の上には七面（シチメン）さんと呼んだ神社があって，潮見町の人がきれいにしていた。

今の道とほぼ変わらない集落の中心を通る道を奥に向けて歩くと，最初の橋の手前を左に折れる道があって，川沿いの道をカワラマチと呼び，7～8軒の家があった。カワラマチの家並みが始まる直前に余市方面へ向かう道の入り口があり，そこを上がるとヤマノウエマチと呼ぶ家並みがあった。

集落中心の道を更に上がり，沖尋常小学校を過ぎた湯内川右岸にも6～7軒の家があったが，春の大水で流されて，永宝寺の横に越してきた。そこはテラマチと呼ばれた。永宝寺とテラマチの間には細い川があり，テラノカワと呼んでいた。更に奥へ進んだところにある橋はジドウシャバシと呼んでいた。

山科宅は木造3階建ての家で「サンゲノウチ」

（三階のうち）と呼ばれた。

（職業）

地区の住民は殆どが漁師だったが，戦前は大工もいた。船と家の両方の大工がいて，大住宅は小黒家の船大工だったが，家も請負った。また小学校の先生や駐在，後には北電の工事屋がいた。

商店は天野，田中，遠島（とおしま），神（じん）があり，「カヨイ」とよぶ通帳で5月末に決算していた。反物，食料品，足袋，一般雑貨などを扱っていたが，豊浜地区では酒を飲む若者が少なく，酒の品数は少なかったと聞いた。

（湯内産軟石）

湯内産の軟石はニシン粕を炊く竈場に使われたり，余市の漁場にも使われた。5～6軒の石屋さんがいて，余市鉱山の土木工事を請負っていた大場組，石川の父さんと呼んでいた人，相沢さん，成田さん，小林さんといった名前を覚えている。

石切場は寺の奥側にある道を上がったところにあり，右側に既に使っていなかった荒木の石切場を過ぎて，同じく右側に大場組，石川さん，相沢さんの石切場があって，その奥の左側には小林の石切場があった。切出した軟石を馬車運搬する家は馬車屋と呼ばれた1軒の家で行っていた。

軟石は幅1尺足らず，厚さ7寸，長さ4～5尺ほどにしたものを20本程度，大八車に積んで海岸まで運び，そこからは川崎船で運んだ。

年中行事

久保田家で年中行事をとりおこなう際に作るお供え物や行事の際のとりきめは，伝蔵が長く船頭を努めた小黒家の作法に則って行なわれた。

1月

（年越しと正月準備）

12月に入ると長男亮三が豊浜地区の山林から松，ミズキを採ってきて正月飾りを準備した。餅つきは12月27日と旧暦の12月27日の2回，1俵づつ搗いた。お供餅は神棚と仏壇，床の間，久保田家所有の磯船，田岸家所有の三半船の5ヶ所にお供えした。床の間には7つのお供え餅を飾った。これは父伝蔵が小黒家の後に大船頭をしていた田岸家のニシン船の数であった。

お供餅は25～30重ねほど作った。

家の中にはミズキにマユダマ飾りを飾った。食紅で赤く色をつけたモチと白いままの餅をちぎってマユダマとし，他には市販されていた紙製の米俵や大黒様などめでたい物，半紙を使って箱型に模した角網，ニシンに見たてた魚の飾りをぶら下げた。ミズキの根の部分には餅をつけて隠した。これはその後綿に代わった。

稲荷神社では，31日から氏子が当番で境内の除雪など初詣の準備を行なっていた。

マッコ（お年玉）は31日にもらった。

トシトリ（年越しの夕食）は風呂上りの4～5時頃にとった。風呂から上がると全て新品の下駄，足袋，メリヤスシャツ，モモヒキ，縞模様の着物が兄弟8人分用意された。

夕食は焼いたアキアジ，煮しめ，ナマス，キンピラゴボウ，煮豆，子和え，クジラ汁，お神酒が食卓にあがった。焼いたアキアジは仏壇にも供えた。アキアジは秋頃にとったものを塩蔵していたものを調理した。年越しの夜は9～10時頃には寝た。

元日の朝は，長男の亮三氏が家の前の湯内川で若水とりをした。その水は神棚にあげ又雑煮にも用いた。焼いたモチは神棚と仏壇にあげてから家族の分を焼いた。雑煮は醤油仕立て，具はゴボウ，ダイコン，ニンジン，鶏肉を入れた。

正月飾りの片付けは，現在の豊浜学園付近（豊浜町293番地）にあった双葉松や神社境内のイタヤの木に縛って行った。

冬の娯楽としてはホンビキ（宝引き）を正月とそれ以降も行ない，花札でも遊んだ。

初午の日には神社にお参りをした。

2月

（節分）

神棚へお神酒と一升枡に入れた大豆をあげた。一升枡をガラガラと振ってから拝み，その後豆撒きを行なった。父伝蔵は漁の際，神棚へあげた豆を袋に入れたものを肩から斜めにかけ，肌身離さず持ち歩いていた。

3月

（彼岸）

マンジュウをこしらえて近所の家に配り，よそからも頂いた。秋の彼岸も同様にしたが，春の彼岸の方がマンジュウをこしらえる家は多かった。

5月・6月

（節句）

鯉のぼりと武者幟を飾った。菖蒲とヨモギを束ねたものを軒先に下げた。また同じものを風呂に入れてつかった。ベコモチを作り，30軒位に配った。同じ物をあげたり，もらったりするので「やったり，とったり，節句の餅」という言葉があった。

（稲荷神社祭典）

お祭りは5月31日から6月2日までの3日間であった。戦争直後は6月1日までの2日間で後祭りはやらなかった。

神社社殿内にはダシ（山車）が3基あって，鯨，エビス様，大黒様があって，祭りが近くなると神社前の空地で組み立てた。

本祭りの日にダシ行列は稲荷神社を出発し，永宝寺に到着し，翌日までそこに置いた。後祭りの日にダシ行列は神社に戻った。ダシが3基あった頃は2基をお寺の境内に，もう1基を久保田家横の荒木家所有の空き地に置いた。

昭和20年代にはダシは1基となり，お祭りごとに地域の人達が新たに作成した。

昭和30年代には出さなくなった。

歌舞伎や青年団の芝居が今三郎宅で行なわれた。歌舞伎は大正末頃まで行われた。

お祭りに関わる一切の費用は荒木家，小黒家，大野家等のオオヤケ（親方宅）が一切を負担し，祭りの行列の花笠作成やお赤飯などを振舞うのもオオヤケが行った。

8月

コーレンを8月10日前後に作って8月一杯食べていた。米粉を水で溶いてふかして15ｃｍ位の丸いセンベイ状に作り，スダレの上に干して乾燥させ，食べるときに焼いた。何も混ぜない白いコーレンや，ゴマ，シソを入れたものがあった。

（お盆）

8月13日は地域すべての家が墓参りをした。信心が篤い家ではお盆の3日間，毎日の墓参りを行なっていた。

お墓のお供えは「ボンガヤ」と呼ぶ，漁で使うスダレに使う茅とは別の種類の茅で編んだ小さなスダレの上に「ホウノキ」の葉を敷き，その上に赤飯，煮しめ，果物，トウキビ，盆菓子を供えた。

盆踊りは8月13日から20日まで毎晩行なわれた。場所は稲荷神社下と永宝寺境内の2箇所だった。囃子はなく，越後踊りの民謡を喉に自信があるものが順番に唄った。盆踊りの参加者の多さや盛り上がりが翌年の豊漁につながるものと考えていた。

種田家の袋潤施工を行っている昭和の初め頃の数年は，南部から来た漁夫達が彼等独自に輪を作って南部の盆踊りをしていた。

9月・10月

（十五夜）

お供えは茅で作ったスダレを敷いた上にスイカ，トウキビ，アジウリ，ブドウ，リンゴ，アンコ入りマンジュウ（米ともち米をウスで搗いたもの）を供えた。マンジュウは15cm位もある大きなものを5つ作って三方に重ねた。

Ⅲ 衣食住

衣服

（普段の衣服）

着物を着ていた。冬は綿入れを着た。足袋も各家庭で布を購入して仕立て，底の部分を刺して丈夫にした。足首部分はコハゼのかわりにヒモをつけ，結わえていた。足袋を購入していたのは10世帯程度だったと思う。

履物は夏はワラジを履いた。尋常3年生のときゴム製の短靴を買ってもらった。紐付きのゴム製短靴は親方の子どもしか買ってもらえなかった。

（漁の衣服）

熊の毛皮は親方や大船頭が着用したが，操業時には着用せず，陸から沖の漁模様を眺める時など陸上でしか着用しなかった。

青森県南部地方から来た漁夫は犬の毛皮で作った半纏を着ている人が多く，ソーラン節の歌詞に「南部衆なら一目でわかる，犬の皮着て樺ジギリ」という言葉があった。

漁労作業に用いた防水衣料は天竺木綿にカッパアブラという油を塗った長い半纏や前掛けがあった。一度カッパアブラを塗ると一漁期中は防水が持続した。半纏には背中に各自が働いた漁家の屋号（シルシ）を墨書で大きく書き入れて，その上からカッパアブラを塗った。薄く黄色みがかった色になった。

ゴム製合羽ズボンの着用は，ニシンの網起しではあり得なかった。それは，網を起こす合図が船頭からを発せられれば，ズボンをはく暇を

与えられないほど直ぐに起さなければならないからであった。

履物は，古くはツマゴを履いていたようだが，自分が覚えているのは膝まであるゴム長靴だった。

主食・副食物

朝食は前日夜のご飯をお粥にしたものや，すりおろしたイモとオカユを混ぜたオカユモチだった。

昼食はふかしたイモやカボチャ，イモ，カボチャを混ぜたご飯（カテメシ）を食べた。

夕食は炊いたご飯，おかずはダイコンやニシン漬の漬物や焼き魚を食べた。

ニシン漁が終わる5月には1年分の米25俵(4斗入り，家族8人分)，塩，木炭（10～15俵），味噌をまとめて購入した。雑倉へは漬物や炭を入れ，鼠に食べられそうなものは家に保管した。

子どもの好きな甘いものはアメやコンペイトウがあって，それは町内沢町のキトさんから買った。

ニシン漁期中はオオヤケ（親方宅）で浜にお握りや漬物を用意しており，出面の労働者の他，彼らの家族も皆それを食べることが出来た。

Ⅳ 地域の活動

地域の組織

青年団の構成人員は15～16才からの男子30～40名で構成され，入団しない人はごく僅かであった。団の活動としては病人の搬送，トンネル，学校，お寺の除雪を行なっていた。団所有のラッパが2つあり，集合ラッパとして使われていた。

病人が出ると余市まで搬送した。搬送先の病院は沖尋常小の校医をしていた山岸病院だった。冬は戸板に二本の棒を渡して担げるようにし，棒の両端にロープを繋げた。その上に布団を敷き，さらに合掌型に屋根をかけて運んだ。豊浜の山を越え，島泊で降りて浜を通り，大村の坂の急坂を登った。

春の雪解けや秋の大水で橋が流されそうになった時などの簡単な修繕や，冬の薪準備は地域全員で行なった。薪の切出しは営林署に伐採の許可を受けてから行なった。

建築儀礼

（建前）

屋根の垂木が全て貼られたときに建前を行い，地域総出で準備した。建前には一番棟と軒の各所に大工が立って，一番棟に最大のお供餅と4つの軒にそれぞれお供餅をあげた。紅白のモチもまいたが，その中には硬貨を入れているものがあり，古い頃には一銭銅貨だったと思う。

Ⅴ 生活（信仰・占い）

生活

始めて電気がついたのは関東大震災があった5歳の頃で古平方面から引かれた。それでも家庭ではランプを使っていたので，ホヤ磨きは子どもの仕事であった。ランプには三分芯と五分芯があって五分芯のほうが明るかったが，裕福な家庭のものだった。

電話は豊浜地区で2軒にしかなく，荒木家が10番甲，種田家が10番乙だった。

農業ほか

粕製造の終わった干場を各自が借りて，畑にした。イモ（馬鈴薯），大根，カボチャ，マメを行なった。

小学校卒業の年から，リンゴの袋かけ作業のため仁木町に4年行った。6月10日頃から1ヶ月～40日程度の期間で，出面賃（日給制）をもらった。余市神社のお祭りと重なるため，お祭りの日程が後にずらされたことも3度か4度はあったと思う。リンゴの袋掛けはニシン漁家の家族も多く従事した。

信仰行事

（庚申講）

庚申講は豊浜地区約100世帯中，半分程度の家が参加したが，久保田家ではカノエサルの「サル」を「魚が去る」に繋がるものと嫌って参加しなかった。庚申の日が訪れるたびに講を行ない「庚申のお祭り」として集落には幟が立てられ賑やかに行なわれた。各家庭から持ち寄られたお供えは山中の庚申塚の前に供えられた。

年に6度の庚申の年が普通であるが，年5度の年を「五庚申」，7度の年を「七庚申」と呼んだ。庚申のお参りは主に今家2軒（同姓）建網船頭をしていた小林家，小黒家の船大工で家も請負っていた大住家，刺網漁家の松代家，吉田家の6軒の家の輪番制で行なわれていた。

唱えごとは正確には覚えていないが「オーシン，コーシン，マイタリ，マイタリ，ソーワーカ」と唱えていたのだと思う。これを地域の子どもらは「親死んで，子死んで，マイタリ，マ

イタリ，ソーワーカ」と替えてふざけていた。

祈願・占い

（ローソク岩の金毘羅様）

ローソク岩には金毘羅様の札を納めた祠があり，毎年父伝蔵が若い者を引連れて掃除を行ない綺麗にしていた。祠に入れたお札は地域に売りに来るものから買っていた。札売りは色々なお札を持っていた。交換した古いお札はまとめて家に保管しておき，稲荷神社の境内で伝蔵自らが焼いて処分した。

（節分の豆）

伝蔵は漁の際に，節分の豆を肌身離さず持ち歩いていた。時化により岸近くの波が高くて船が接岸出来ない場合，この豆を舳先から海中に投じて波が小さくなった隙をついて着岸し，難を逃れたという話を聞いた。

ニシン漁の豊凶を占うマメ占いはマメヤキと呼び，節分後，ニシン漁が近づく2～3月までの間に行なった。大安など日を見て占いをしていたのだと思う。節分で神棚に上げていた豆を炉の灰の上に10数個並べ，豆ごとに建場をあて，その焼け具合で漁の豊凶を占った。

豆が均等に焼かれて全体が白い灰になればその建場は大漁，半分だけが焦げたりしたものは不漁と見た。一番悪いのは真黒になって割れないくらい固くなったもので，その建場は豊漁が期待できないとした。不思議とほぼ同じ場所に置いた豆でも，焼け具合が違う結果が出た。

葬送

（火葬場所）

旧豊浜小学校裏の橋を渡ったところに火葬する場所があった。厚さ1尺5寸内外，長さ4～5尺の地元産の軟石（湯内石）を2本並べ，その上に線路を切った鉄柱を4～5本渡したもので，棺桶をその上に乗せた。鉄柱下方に薪を入れ，棺桶まわりにも大量の薪を積み上げて火葬にした。積上げた薪が燃え切るとご遺体は骨になった。

（葬式）

通夜，告別式とも自宅で行ない，自宅から出棺した。棺桶はお寺に保管している駕籠に入れて運んだ。棺桶の大きさは駕籠に入る大きさなので，ご遺体はひざを曲げて座る格好で棺桶に入った。この駕籠が使われたのは昭和30年前後までであったと思う。

（葬列）

葬列はオニと呼んだ木製幟状の板を持つ者6名を先頭に2列に並び，底にワラを敷いた木箱にシカバナ，レンゲの造花を入れたものを持つ者6～8名が続いた。他にも供物を持つ者も列に加わった。ここまでは地域のテツダイト（手伝いの人達）が行ない，その後に親戚が続いた。棺桶を運ぶ駕籠の後にも親戚が続いて，装列は寺に向かった。

オオヤケで葬式が行われると葬列は長くなり，その先頭がお寺に着いても最後尾はまだ家にいるほどであった。

葬列がお寺の境内に入ると駕籠と親戚が輪になり3回ほど回り，その間読経がされた。駕籠から降ろされた棺桶は一度本堂に入り，住職による読経が行われた後，棺桶の角を4人が持って火葬場所まで運んだ。

交通手段

余市や古平へ行くのは陸路だった。島泊方面へ抜ける続く長いトンネルが山の中腹にあり，かつてはバスが通っていた。そこを越えて海岸を歩き「大村の坂」と呼んだ急峻な坂を登って余市方面へ向かった。「大村の坂」は鼻がつくほどの急な坂で，豊浜への帰りは笹を尻に敷いて滑り落ちる方が早かった。

冬に美国から10～15頭の牛が売られるためか豊浜地区を通過することがあった。雪の深い時期には沢へ滑り落ちる牛がいて青年団に救助の要請がきた。ロープで引っ張る等して救助を試みても助けられないことがあり，死んだ牛は解体して集落で分けた。

発動機船が出来てからは，刺網漁家がカレイ等の漁獲物を売り捌くために余市へ赴いたが，その船に地域の住民も便乗した。

古平方面への連絡船は外浜丸（ソトハママル，ガイヒンマル），末廣丸（端廣丸）が就航しており，豊浜地区からそれらの船に乗り込むには磯船で航路上まで行き，筵や着物を竿などに掲げてマネ（合図）にして待っていた。航路は，ニシン漁期中はローソク岩の沖で，漁期以外はローソク岩と岸との間になった。

伝説ほか

（ローソク岩の光①）

父伝蔵から聞いた話だが，ローソク岩の先端が4月末から5月始め頃に光ると，父はその年

のニシン漁終了の合図としていて，付近の建場が漁を続けていても父は漁の終了準備に入り，網を撤収させた。この光は海上にいる漁夫に見られるもので，4 月から 5 月までの間しか目撃されなかった。

またローソク岩の対岸にある滝の潤の滝は，ローソク岩の光による熱によって雪や氷が溶けて流れているものだという伝説があった。

（ローソク岩の光②）

ローソク岩の肩が光ると言われていた。これは陸から見えるもので，時期は特に決まっていなかった。

（チャラツナイの火の玉）

海上で漁労作業をしていると，古平との境界のチャラツナイ方面に大きな火の玉が走ることがあった。またローソク岩の肩に光る火の玉が降りてきて，そのまま海上を走ってチャラツナイ方面に消えたこともあった。この光が見えると変事が起こると言われていた。

（ローソク岩の崩落）

昭和 3，4 年頃に父が「やがてローソク岩が転ぶ。」と言っていたことがあって，それを聞いた地域の人達が「神様の岩であるローソク岩が転ぶなどと伝蔵がおかしなことを言っている。」と陰口が囁かれたことがあった。私がそのことを告げると父は，ローソク岩には縦に走る亀裂があること，その亀裂には隙間があり夜間に沖にいるとその隙間から豊浜の灯りが見えること，また隙間に挟まっている玉石が年々下がって来ていることは亀裂が広がっている証拠で，自分が言っているのは嘘ではないと言っていた。

昭和 17（1942）年 5 月末に自分が戦地から帰った時には，ローソク岩は既に一部が崩落して細くなっていた。豊浜神社のお祭りの準備をしていた人達にローソク岩の崩落がいつだったのかを尋ねたところ，昨年（昭和 16 年）だったと言っていた。また後年になって従兄とそのことを話した際には，従兄に召集礼状が来た年のことなので昭和 16 年だったことは確かだと言っていた。

この崩落直後には兄の大三が漁に出ており，ローソク岩の崩落前後には深い霧が出ていたこと，海上に立ち込めていた霧の切れ間から崩落して細くなったローソク岩を仰ぎ見たことを聞いている。

天気の予想方法

西方の雲や風の状態を見て天気の変化を予測することに伝蔵は長けていて，地域の運動会や行事の前には問合せをうけることが多かった。また父は寒中日記を欠かさずつけていて，寒の入りから寒明けまでの約 30 日間の天気を事細かく記録し，1 年の天気を予想する助けとしていた。

風が変わる前にはカラスが動いた。豊浜地区西方の「蛸穴の岬」の山から東方「滝の潤の岬」の山へカラスの群れが一斉に移動すると風が変わる前兆だった。

地域の漁師が言っていた言葉に「ヤマセドコイク，タマカゼムカエニ，ダレトイク，アメトイク」というのがあった。

宿

旅から来た人やニシンの時期に来る商人，薬売り，春秋の種物売り，役場職員の出張などで宿泊する人がいた場合，食事付きで宿泊させる民宿のような家が 2 軒あった。

写真

写真を撮影するのは徴兵検査の時くらいしかなく，地域に写真屋が来るのは小学校の卒業式，運動会，お祭りの時で，沢町の川口写真屋や大川町の市川写真場で，主に川口写真屋であった。

Ⅵ 漁労

風の呼び名

（表 1 参照）

漁労

（漁家と諸設備）

豊浜地区の建網漁家は荒木家，小黒家，大野家，種田家，カクサン猪俣家出張所があり，昔は遠藤家もあったと聞いた。また猪俣家の番屋はかつてはカネマル今家のものだった。

ローソク岩から伸びる建場は 4 ヶ所あり，岸側に伸びた建場から時計回りに 4 統があった。岸側から伸びる第 6 号建場とローソク岩から伸びる 7 号の間が狭く，船の通行に支障をきたした為，第 7 号建場は後に沖側に移設された。

今も残る袋澗は古平種田家のもので，昔は陸上にウインチがあった。三半船 1 杯のニシンが 5 回のウインチ作業で陸揚げ出来た。

その袋澗は昭和 5（1930）年の皆無漁時には完成していたので，昭和初期頃には工事を始めていたのだと思うが，工事は漁期終了後も南部

からの漁夫 15～20 名がそのまま残って夏の間中作業をしていた。

田岸家が所有していた番屋，稲荷神社下の網倉，神社東側の段々に造成された干場は，後に田岸家親方から父伝蔵に譲られ久保田家が使用していた。他漁場の干場は湯内川左岸の古平側，現豊浜神社下（小黒家，豊浜町 329 番地-12），余市豊浜学園付近（豊浜町 293 番地）にあった。

（ニシン漁期）

初ニシンが乗網するのは 4 月 5 日頃で，3 月末に来るのは滅多になかった。初ニシンから 4 月 20 日頃までの約半月間程度の間は漁獲の多少はあっても毎日の漁獲があった。4 月 25 日頃を過ぎて漁獲した鰊は「ノチニシン」と呼び，この頃になると 1 統で 3～5 坏（三半船）程度の漁獲しか見込めなかった。「ノチニシン」の頃から網には鰊と一緒にヤリイカや青マスが乗網した。

初ニシンが乗網する 4～5 日前には積丹町美国で漁獲されたニシンを余市や小樽へ運ぶ船が発動機船に牽引されて沖を航行するのが見られ，それが前触れとなった。美国で漁獲された鰊は生食用の内地送りで貨車輸送されるものだった。後にはそれらは船による輸送となった。

（豊浜地区の漁夫数）

一般には水深 7 尋（約 13m）であれば，漁夫数は 1 統あたり 24～25 名を要したが，ローソク岩付近では水深が深かったため 30 名程度を要した。古平町種田家が経営した第 8 号漁場では 32～33 名で操業していた。これはローソク岩周辺の水深が深く，網起しに要する人員が多く必要であったためだった。しかし歩方制経営になってからは漁夫数は減少し，24～25 名での操業となった。

（久保田家のニシン漁経営）

父伝蔵は昭和 10 年頃まで大船頭を努めた。伝蔵は豊浜地区に居を移した後，小黒家経営の建網漁場の大船頭を務めた。この時期は不明であるが，大正末頃にはローソク岩から沖出しされる古平町田岸家経営の第 9 号建場の大船頭を務めた。

第 9 号建場はローソク岩から東に沖出しされ，ヤマフク林家の建場と隣接し 1 漁期に 3,000 石以上の漁獲が期待できる良好な建場であった。しかし，伝蔵が従事した当初から肩を並べていたわけではなく，むしろ漁獲は著しく少ないものであったため，伝蔵の発案でそれまで長い沖出間数だったものを短くしたところ，その年から林家と同規模の漁獲をあげることに成功した。

長男亮三は昭和始めより荒木家の「帳場」として漁場の経理を任され，25 才となった昭和 8（1933）年には父から漁場に関する一切を引継ぎ，「親方」としてニシン建網漁や大謀網漁の監督指揮を行ない，また家の諸行事一切も任された。

父の漁にいつも同行していた次男源三は，小学校高学年になった大正 10 年頃から父と共に海に出るようになり，朝の登校前に自家の船を一人で漕ぎ出し，いなくなったと騒ぎになったことがあった。源三は大正 13 年頃より漁夫として荒木家建場においてニシン漁に従事した。

三男大三も源三にやや遅れて昭和初めには同じく荒木家建場において従事した。

昭和 7 年頃からは荒木家所有の建場のうち 1 統が久保田家に任され，同家が実質的に経営した。当初は父伝蔵，長男亮三，次男源三，三男大三の 4 名で携わり，翌 8 年からは四男雷程も漁に従事した。亮三は親方として監督指揮をとり帳場も担当，源三は口引船，大三は一般漁夫として起船に乗り，雷程は父や兄のニシン漁を助けた。

昭和 19 年頃には建場を移しワッカケ岬付近で操業，再びローソク岩の田岸家所有の第 9 号建場において操業を行なった。

昭和 20 年代には長男亮三は海区調整委員として地域の漁家の調整役をしていたが，同時に住友余市鉱山への食料品販売業も行なっており，四男雷程は久保田家経営の建場の帳場となっていた。

（経営形態）

当初父伝蔵が大船頭を務めた小黒家に雇用された漁夫は青森県出身者が多く，伝蔵も青森へ赴き契約を行なってきたことがある。歩方制に転換する前の田岸家や荒木家の漁夫雇用は漁期中の給料を予め決定して契約を行なう契約制のものであった。

一般の雇い（平漁夫）は 30 円，船頭は倍の 60 円の給料だった。

漁期終了後の手当である九一金は純水揚高の 9 割を経営者側が，1 割が漁夫に分配されたも

のが，後には19/20が経営者側へ，1/20が漁夫へ分配された。九一金の配当は船頭が2人分，他は年齢に関係なく働きに応じて与えられた。

久保田家が実質的に経営した荒木家所有建場，ワッカケ岬付近の建場，田岸家所有9号建場の各建場では歩方制による経営が採用された。

歩方制経営はニシン皆無漁となった昭和5年頃を転機として地域の多くの漁家が採用した。

漁夫の出身母村は依然，青森県南部地方からが多く，雇用された漁夫数は概ね27～28名，これに地元の船頭などが加わった総計約30名で操業した。

部方制経営は「シブロクの歩方」と呼ばれ，全ての作業が終了する「キリアゲ」時に現金化した純水揚高の4割を漁夫へ支払い，残り6割が監督指揮を行なった久保田家の取り分となり，そこから予め決められた割合の金額で，建網所有者である荒木家へ賃借料が支払われた。

（出面作業）

モッコ背負いは集落あげての作業であった。早朝，漁獲の多い家がどこであるかは地域に口伝えで伝わり，そこに我先に集まり紐の付いた「フダ」（ヨコ4×タテ6cm大の木札）をもらい，モッコ背負いに従事した。モッコ背負いの出面報酬はすべて生ニシンで，モッコの数で払われた。

（魚肥製造）

粕製造は角胴が多く，圧搾機から出された粕玉を4分割程度にしたものを馬の背に乗せて干場まで運んだ。馬は「ダンジキウマ」と呼ばれた道産子馬で，15～20頭がニシンの時期になるとやってきた。

鰊以外の魚粕製造ではサバ粕製造を行ったことがあった。昭和5年以前，6，7月頃に父伝蔵を船頭として大謀網漁を行い，漁獲した大サバでの粕製造を行なった。

（最後の群来）

昭和29（1954）年の最後の群来があった年，北海道中央水試前の前浜が白濁したという報せが入った。余市では久保田家を含めた5統のみが建網を準備しており，久保田家は9号建場で操業していた。

この年，南部からの漁夫27～28名は戦後の食糧難のため，一人米2斗持参で漁場に来ていた。

ヒルニシンの漁獲があった年で昼間に乗網した。

沖では枠船の6～7人が待機，浜では起船が待機していた。ヒルニシンが来るとは知らず，通常のとおり夜間海上に待機していた起船は，朝になって帰ってきていた。

豊浜地区の粒買（生ニシン買い入れ）業者であった山科小四郎氏が久保田家の建網の上にゴメの群れが騒いでいるのを目撃し，急ぎ知らせた。しかしそれに気付かず，乗網し過ぎた魚群によって身網が海中に沈む事態となっていた。

海中に沈んだ網の浮子をサッカイの柄で保持し，やっと網を起すことが出来たものの，漁獲量は三半船で3坪（約60石）程度と少ないものになってしまった。

（作業唄）

大漁の際や，網起しの作業が後半になると木遣を唄ったが，若い船頭が唄うのと年季の入った船頭が唄うのとでは，網起しの効率が全く違った。100石乗網して約20,000貫もの重さを20人弱の人手で揚げることは陸上ならば不可能であり，波と魚群の浮き沈みを見計らいつつ漁夫の疲れ具合を見ながら，唄を長く唄ったり，間に節を入れるなどして作業を行うことに年季の入った船頭は長けていた。船頭の熟練度の違いは身網と枠網の接続後の追込み方にも現れ，枠網に入れる量が大きく違っていた。

喉に自信のある若い漁夫が木遣を唄おうとしたなら怒られたものだった。

（久保田家の大謀網経営）

久保田家は昭和9年頃から同30年頃まで落網による大謀網を経営していた。余市町内で大謀網の操業を行なっていたのは古平町の共立大謀，余市町の三印菊池，出足平の中島だった。それ以前に大謀網を所有していたのは豊浜地区では種田家のみであった。雷程氏は発動機船に乗り，陸との連絡を行った。

夏大謀は5月下旬から8月末まで行い，ホンマス（5月～6月），ヒラメ（6月以降），フグ，ソウダガツオ，マグロ等の漁獲があった。秋大謀は目数を同じくして糸の太い網を用いて行い，主にマグロ，ブリ，アキアジの漁獲があった。

大謀網による操業では，久保田家長女の嫁ぎ先であった古平沖村の沢田氏が船頭を努め，漁夫も古平町沢井家から17～18人が来た。

（漁獲物の運搬）

水揚げした漁獲物は小樽運河に隣接する集鱗市場へ船で運搬し，後に大川町の市場へ運んだ。港町に漁組が出来てからはそこに水揚げした。

（ニシン漁期終了後の漁労）

大謀網による操業以外では，刺網によるカレイ漁や，ナマコ漁，タコ漁を行った。

ナマコ漁は夏中行ない，各家で乾燥させ中国向けに送るために海産商が買い付けに来た。

タコ漁では通常のヤスの先端にL字型に更に伸ばした「シナイヤス」と呼んだ道具を使っていた。またニシンが来なくなってからはコナゴ漁もしていた。コナゴ漁は通常，5〜7人で操業した。

Ⅶ まとめ

以上，久保田雷程氏にご協力頂いた聞取り調査の結果を報告した。以下に若干の補足と今後の課題を述べたい。

(1) 葬送の項で紹介した葬式の諸道具（葬具）では，豊浜地区において昭和30年前後までは棺桶を運ぶための駕籠が使われていたことを紹介した。同地区に火葬場が建設される前までは駕籠が使われており，『余市町郷土誌』（昭和8年刊）にも「葬具屋」が一式を貸与し，駕籠や「輿」が使われていたことが記されている。

葬列の先頭に立つ者が持つ，オニと呼ぶ木製幟状の葬具を紹介したが，これを文章では説明することが困難であった。この葬具の所在は現在まで未確認であるが，発見されれば採寸，撮影を行いたい。

(2)袋澗は漁獲物を陸揚げするまでの一時的貯蔵や，船の繋留を行った施設で，積丹半島沿岸に99ヶ所が確認され，余市町内に1箇所のみ建設されたものが豊浜地区に現存している。

『積丹半島の「袋澗」』（北海道文化財研究所編昭和62年刊）中の「積丹半島袋澗調査図」（昭和3年8月調査，神恵内村役場蔵）に掲載されている図版を見れば，この種田家の袋澗は「築設年月」が昭和2（1927）年のことで，「工費」2万円を費やし，古平町種田富太郎により建設されたとある。備考には「十数年前ヨリ起工セルモ激浪ニヨリテ再三破壊セラレタリ」とあった。この袋澗に漁獲物を貯蔵するには三半船約2艘分ほど入る小袋にニシンを入れるのだが，その小袋を用いた沖揚が古平から余市までの海岸において，この建場1ヶ所でのみ行っていたのかは不明であった。

(3)荒木家始め久保田家が携わった歩方制経営（以後，歩合制経営）は後志管内の多くの漁家で採用されていた。昭和11（1936）年時を見れば，後志管内建網334統中，192統と6割弱が歩合制経営を採用していた時期で，昭和15（1940）年以降，後志管内は石狩管内とともにほぼ10割に歩合制が採用された。

歩合率を見れば，久保田家が採用した「シブロクの歩方」は大仲経費を差し引いた純水揚高のうち同家へ6割が分配されたもので，これは経営者7〜8割，漁夫3〜2割と一般に言われた歩合率と比して漁夫は優遇されていたと言えるであろう。

(4)豊浜地区においてはニシン魚肥製造には角胴が多く使用されていた。もっとも豊浜地区の他漁家では木製箍止の丸胴が数点保管されており，所有者のお話では大正の作と伝わるもので，角胴から丸胴への転換がいつの時期からなされたのか興味深い。

魚肥は豊浜地区のように平地が少なく，市街地に遠い場所においては，主たるニシン産品であった。これは大正期，余市町川内漁場の沖村本場に陸揚げされた漁獲の大半が魚肥として処理されていたこと，また『北海道漁業写真帖』（大正3年刊）にある沖村に居を構えた漁家，すなわち今佐一郎（建場は湯内），小黒嘉右エ門（建場シマトマリ），小黒寅蔵（建場前同），大村由太郎（建場前同）の「漁獲物ノ処理法」，「主製品並ニ副産製造品数量価格」を見れば，「絞粕」「胴鰊」「笹目」など魚肥製品が大部を占めていたことからも窺える。

小稿では聞取りの対象時期とほぼ同時期に操業を続け，豊浜地区に新たに大規模な集落を形成するに至った鉱山会社に関わる報告は，久保田家の長男亮三氏が関わったにも関わらず行っていないが，これは同家の仕来りが父伝蔵氏が大船頭として働いた小黒家のそれに則っていたことによる。

今後も久保田氏からの聞取り調査を継続し，より多くの情報を蓄積していきたいと考えている。またそれらを基礎資料としつつ，今後はこれまで報告されている研究成果と併せながら分

析を試みたい。

小稿を終えるにあたり，北海道立中央水産試験場，北海道立文書館，北海道開拓記念館山田 健氏，(財)北海道開拓の村　黒川 郁氏，佐藤 利雄氏，近藤 芳二氏の各機関，個人にご協力，ご指導を頂きました。記して感謝します。

また久保田雷程氏には長時間にも関わらず，幾度も訪問した若輩者の不躾な質問に対して，丁寧なお答えを頂戴しました。ここに深く感謝いたします。

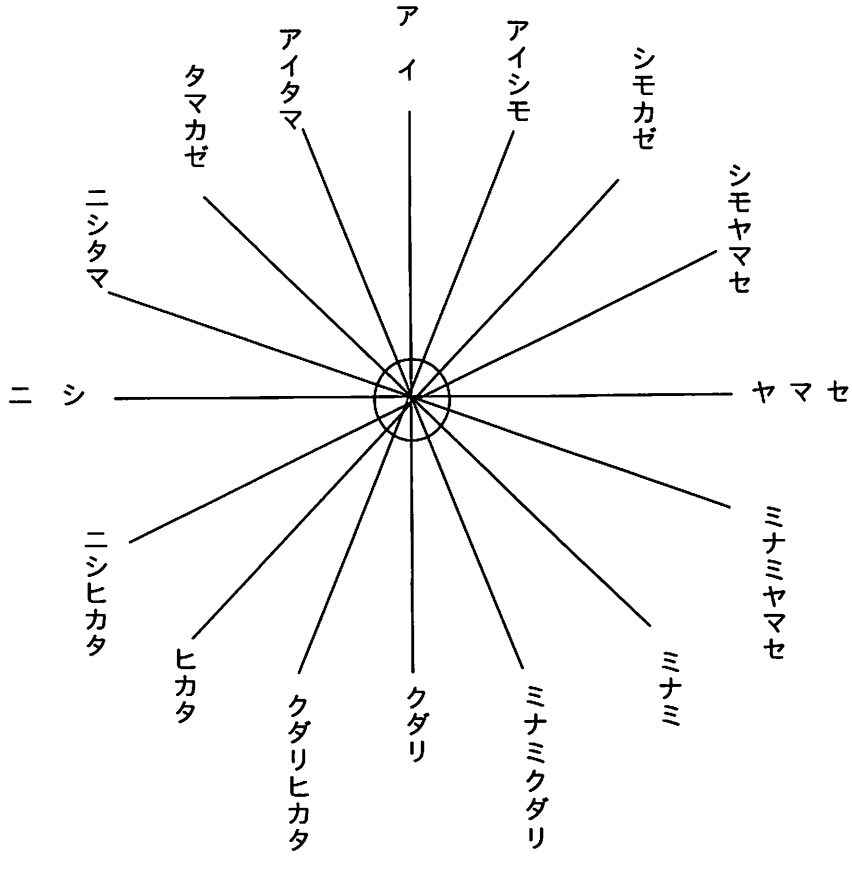


図 1 風の呼び名

＊久保田氏からの聞取りを基に筆者が作成したもので，『ニシン漁労』の「風の呼び名」余市町分とは異なるものであった．
＊＊久保田氏によれば，本図の風の呼び名は「古い漁師のもの」であって現在の地域のそれとは違うこと，また，南東からの風をミナミと呼ぶのは，漁師が辰巳（タツミ）を嫌ったからとのことである。

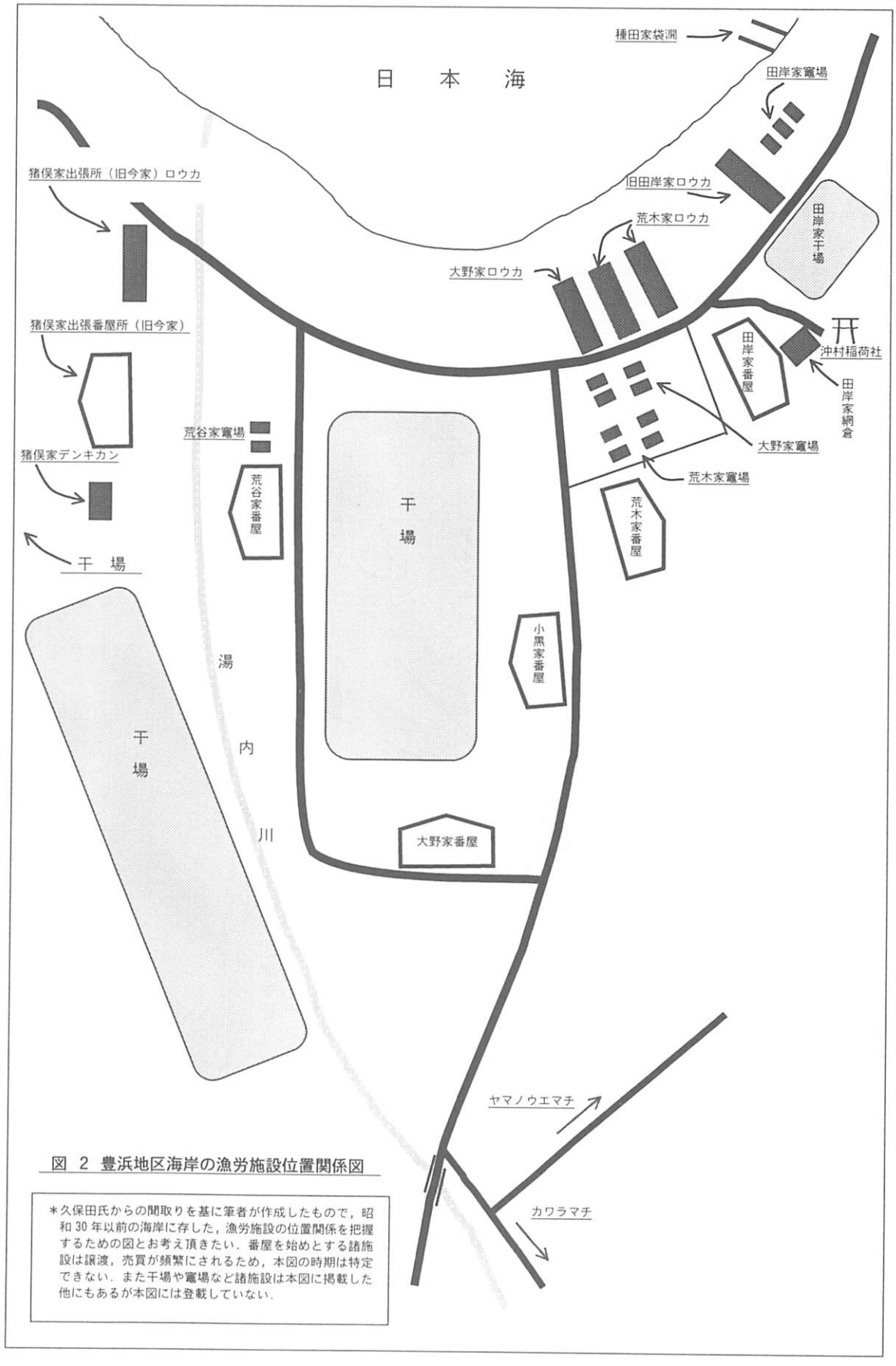


図 2 豊浜地区海岸の漁労施設位置関係図

＊久保田氏からの聞取りを基に筆者が作成したもので，昭和 30 年以前の海岸に存した，漁労施設の位置関係を把握するための図とお考え頂きたい．番屋を始めとする諸施設は譲渡，売買が頻繁にされるため，本図の時期は特定できない．また干場や竈場など諸施設は本図に掲載した他にもあるが本図には登載していない．

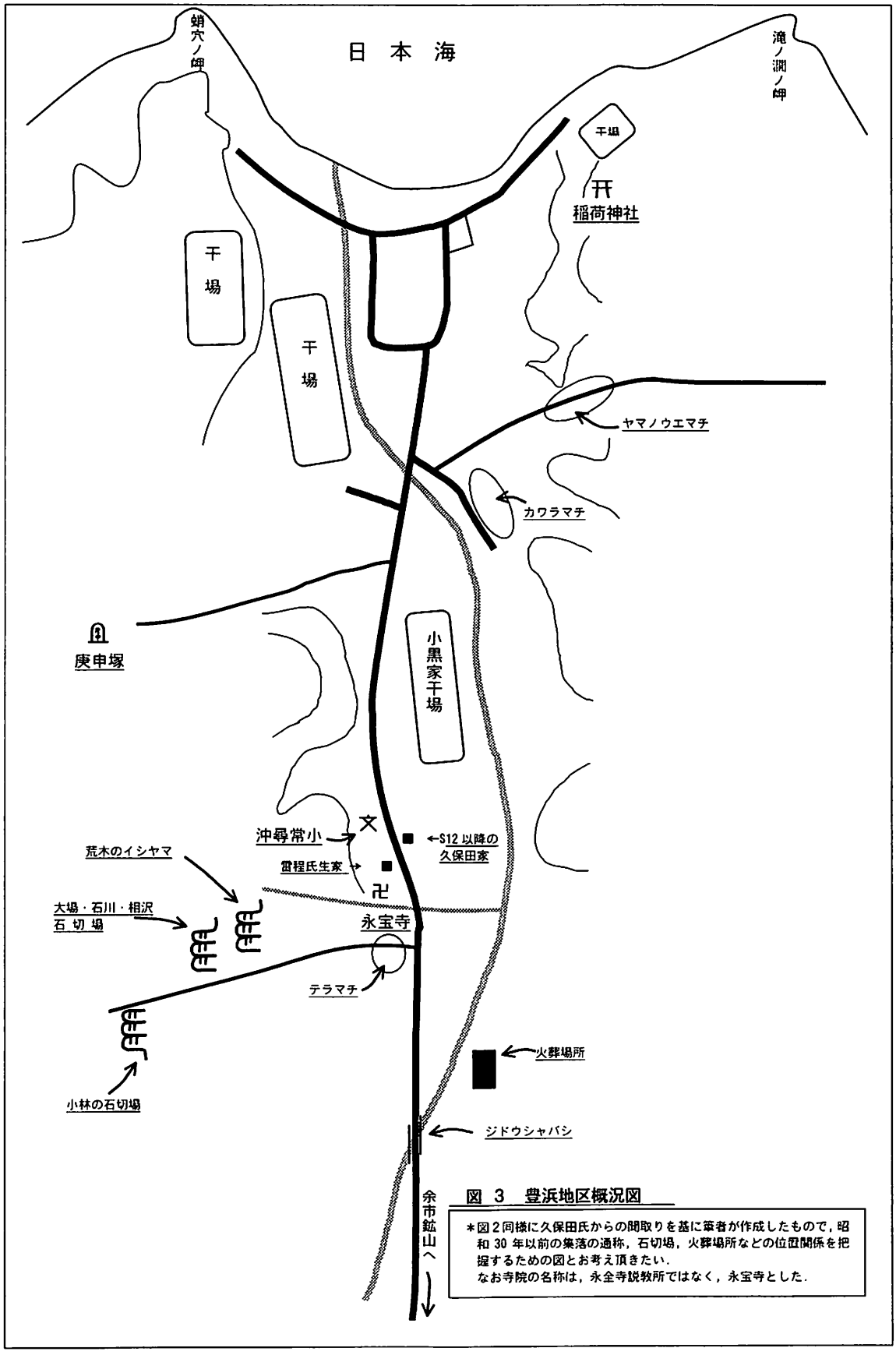


図 3　豊浜地区概況図

＊図2同様に久保田氏からの聞取りを基に筆者が作成したもので，昭和30年以前の集落の通称，石切場，火葬場所などの位置関係を把握するための図とお考え頂きたい．
なお寺院の名称は，永全寺説教所ではなく，永宝寺とした．

<脚注>

1) 『ニシン漁労』の余市町関連分では2名の調査員が，13名の話者から聞取りを行っている。もっとも同書による報告では塩谷，蘭島，祝津といったニシン漁が盛んだった地域を含む小樽市に係る報告が見られないことは残念である。

2) 余市水産会館編『余市水産』昭和6（1931）年によれば豊浜地区の湯内分の第1号～第9号漁場における大正10年から昭和5年までの10ヵ年平均は約450石であった。

3) 文政5年「漁業手配仕来書上」(『余市町史第一巻資料編一』P．112）のユナイを見れば，出張番家は「出張番家一軒」との記載があり，同じく同書中の林家文書，天保4年「上下ヨイチ御場所境より境迄里数漁小家書上」でも「春漁小家　一軒」の記載が見られる。

4) 「西蝦夷地ヨイチ廉絵図面」『江差町史資料編』付図

5) 昭和62（1987）年　河野常吉他編　『北海道殖民状況報文　後志国』　P.266

明治3年の「余市郡去午年調書　余市詰」(『余市郡諸調』北海道立文書館蔵）中の「漁場調」では，沖村に「建網鯡拾八統」とあり，また同書中「戸籍調」では「テタリヒラ　シユマトマリ　ユウナイ　漁民三軒」とある。
同じく同書中にはニシン建網以外の「昆布場所」1ヶ所の記載も見られる。

6) 前掲書5)『北海道殖民状況報文　後志国』に同じ。

7) 前掲書5) P．267

8) 余市町教育會　『余市町郷土誌』昭和8（1933）年　P．181

9) 前掲書8) P．73の字別戸口分布表中の数字だが，調査年不明。

10) 余市町立豊浜小中学校編　『豊浜』余市町豊浜小中学校閉校記念誌　昭和61（1986）年　P．22

11) 前掲書8) P．248

12) 前掲書8) P．328

13) 前掲書8) P．330
久保田氏によれば昭和30年代まで住職がつめており，お寺は町内沢町にある永全寺の「出張所」的なお寺だったのではないかとのことであった。永宝寺という名称は現在も住宅地図に残っている。

14) 前掲書8) P．140.

桑原真人「史料紹介・住友余市鉱山湯内坑に関する鉱毒調査」『北海道開拓記念館調査報告　第25号』昭和61（1986）年も参考とさせていただいた。同史料紹介のP．47に久保田氏の長兄久保田亮三氏の名が見える。

余市水産博物館研究報告第5号：37－66. Mar. 2002.

大川遺跡本多地点発掘調査報告

小川　康和　　乾　芳宏
北海道余市郡余市町入舟町21（余市町教育委員会文化財課）

調査に至る経緯

余市町では道道豊丘停車場線に面する大川商店街のアクセス機能の向上と交通安全確保のために，平成11年から16年の工期で道路の改良工事を実施するため河口港線街路事業を計画していたが，北海道小樽土木現業所の実施している大川橋線街路事業工事と重複する部分があり，早急に埋蔵文化財に対する協議が必要となった。平成13年4月25日，余市町から同事業に係る埋蔵文化財の事前協議書が提出され，試掘調査を実施した結果，10月31日付で発掘調査が必要との回答を受けた。そのため当面必要な最小限度の面積78㎡を11月12日から12月4日にかけて発掘調査を実施した。

調査体制

・余市町教育委員会　教育長　利　輝夫
教育次長　江戸栄男
文化財課長　盛　昭史
文化財課文化財係長　乾　芳宏（調査担当者）
博物館学芸員　浅野敏昭
調査員　小川康和

凡　例

1．本文中で使用した遺構の略称は以下の通りである。遺構番号はこれまで調査されてきた大川遺跡各地点の遺構と連番にはなっていないが，H－3については服部地点に跨がっており例外である。
　H（House）竪穴住居址　P（Pit）墓壙・土壙　FP（Fire Place）焼土
2．遺構図，遺物実測図の縮尺は基本的には以下の通りである。それ以外の縮尺のものについてはスケール等で示した。
　調査区土層断面図　1／40　遺構　1／20　土器・土器拓本・陶磁器　1／3
　石器・石製品・土製品・金属製品　1／2　古銭拓本　1／1
3．写真図版の縮尺は任意である。

遺跡の立地と層序

大川遺跡は余市川河口部右岸の標高約5mの砂丘上に位置している（図1)。本多地点発掘調査区は，道道豊丘余市停車場線から町道大川町13号線への曲がり口から町道に沿って北東～南西に細長い形を成しており（図2)，以前は店舗や住宅が存在した場所で，建物の基礎や各種配管等の工事による撹乱が見られる。

層序は基本的に以下の通りである（図4)。

Ⅰ　表　土　層（撹乱層）　建物の基礎や各種配管等による撹乱が著しく，それらの工事に伴うコンクリート・ブロックや砂利層が見られ，腐食土・粘土・褐色砂等が混在する。縄文時代晩期から近世・近代に亘る各時期の遺物が出土した。

Ⅱ　黒色土層　撹乱が著しく，厚さ10cm前後で断続的に見られる。縄文時代晩期から近世・近代の遺物包含層である。

Ⅲ　暗褐色砂層　撹乱が及ぶ箇所も見られるが，厚さ約30～50cmほどで，一部に炭化物や砂質凝灰岩粗粒を含む。縄文時代晩期から続縄文時代の遺物包含層である。

Ⅳ　褐色砂層　厚さ70cm以上を測る。上面より縄文時代晩期の遺物が出土し，下面は砂の粒子が粗く遺物は殆ど見られない。

調査の方法

本多地点発掘調査区は，2001年度服部地点発掘調査区の南東端に隣接している（図3）。このため，これまでに調査されてきた大川遺跡の各地点との関連から，従来のグリッド設定・グリッドNo.を踏襲し，調査区全体に5mグリッドを設定した。

表土層および大まかな撹乱部分は重機により除去し，その後に遺物包含層であるⅡ・Ⅲ・Ⅳ層を移植ごて等を使用し掘り下げ，精査を行った。

遺構については，各5mグリッドを1m四方に25分割した小グリッドを基準とした実測を行い，墓壙・土壙は縮尺1/10で，その他の遺構は縮尺1/20にて図面化し，写真撮影も適宜実施した。墓壙から検出された遺体や歯等は，大まかな部位が判断できるものについてはそれらの部位毎に取り上げ，札幌医科大学に鑑定・保管を依頼した。各遺構の壙底部の土壌は篩にかけ選別作業を行い，微細遺物の収集に努めた。遺物の取り上げ等については1m小グリッドを単位としたが，遺構に伴う遺物や一括出土遺物等については，写真撮影を実施後，出土位置・標高・種別等を図面に記録し，取り上げ作業を行った。また，発掘現場での遺構・遺物・調査風景等の写真撮影は35mmカラーリバーサルフィルムを使用して実施した。

遺構と遺物

本多地点の発掘調査により，竪穴住居址の一部1ヵ所（服部地点H－3），墓壙10基（P－4～8・10・11・13～15），土壙3基（P－9・12・16），柱穴様の小土壙3基（P－1～3），焼土1ヵ所（FP－1）が検出され，遺構からの出土遺物は埋土や覆土のものも含めて土器412点，石器12点，剥片29点，金属製品2点，その他2点の合計457点を数えた。遺構外の出土遺物は土器3,136点，土製品2点，石器85点，剥片297点，陶磁器463点，金属製品18点，その他28点の合計4,029点で，遺構・遺構外を合わせた総計は4,486点である。

以下に各遺構の詳細を述べる。なお，H－3については，本多地点より先に調査が実施された2001年度服部地点に跨がり位置しており，本多地点調査部分も含めて「大川遺跡（2000・2001年度）」にて報告し，本稿での説明は割愛する。

P－1・2・3（図5）

いずれもⅠ36グリッドに位置する小土壙である。上面を撹乱により削平されており，本来の掘り込みはもっと深いものと思われる。ピットの規模はそれぞれ現状で，P－1は長軸が北東～南西方向で径0.27×0.23m深さ17cm，P－2は径0.34m深さ25cm，P－3は径0.31m深さ38cm

を測る。形状は円形あるいは円形に近い楕円形で，P－1とP－2は中心点を結ぶと約0.45mと近接しているが，P－1とP－3は約1.88mと1間に近い距離である。また，P－1とP－2の覆土の状態は非常に似ており，P－2内には偏平な礫（凝灰岩，30×17×7cm）が置かれ，重みが集中したためか，中心から3つに割れている。他には伴出遺物がなく時期は不明であるが，検出状況から3基のピットは同時期に柱穴として機能していた可能性が考えられ，3基以外にも同様のピットが存在したが，撹乱により消失したものと思われる。

P－4（図5）

k38グリッドに位置する墓壙である。遺体直上まで撹乱が及び，表土剥ぎの段階で頭部は露出し破砕され，明確な掘り込みは確認されなかった。一部は発掘区外へと入り込んでいるため，関係者の了解を得て，発掘区の境界を拡幅した。遺体の検出状況からピットは北西～南東に長軸を持ち，長軸約1.90m短軸約0.75m前後であったと推定される。遺体は身長140～150cm程で，南東頭位の伸展葬，顔面はやや右向き，ゴザと思われる樹皮を編んだものにくるまわれている。ほぼ全身が確認されたが骨は脆弱で，左前腕部と左下腿～足部を欠く。胸部直上に銅製の鍔（図5－1），左脚部北西側に刀子（図5－2）を配し，腰部周辺3ヵ所にキハダと思われる種子の集中が確認された。鍔については垂飾具としての転用も考えられる。また，両脚部は礫の上に乗った状態であるが，意図的に配置された可能性がある。検出状況等から近世から近代に属するアイヌ墓と思われる。

P－5（図6）

l35グリッドに位置する墓壙である。東側の一部を撹乱により切られているが，径約1.70mの円形を呈し，深さ約45cmを測る。鮮やかなベンガラは確認されず，遺体上面にうっすらと見られるのみである。壙底部ほぼ中央と南西側壁際に遺体範囲が確認され，中央の遺体範囲内の3ヵ所より歯が検出された。検出状況から南あるいは南西頭位と考えられ，合葬の可能性もある。遺体上面および壙底部には土器（図6－1）や石器（図6－2・3）や剥片が配され，埋土からも土器片（図6－6）や石器（図6－4・5）が出土した。検出状況等から縄文時代晩期後葉に属するものと思われる。

P－6（図7・8）

k38グリッドに位置する墓壙である。墓壙全体を覆うように砂質凝灰岩細粒範囲が検出された。南側や西側を撹乱により切られているが，掘り込み自体は現状で長軸1.53m短軸0.97mの北西～南東に長い楕円形を呈する。埋土上面の砂質凝灰岩細粒層は厚さ約27cmを測り固くしまり，埋土全体に炭化物が混じる。砂質凝灰岩細粒層から壙底部までの深さは約72cmを測る。埋土上面やや北西側には土器（図7－1）が潰れた状態で，南東側にも土器（図8－2・3）が出土し，そのうちの1点は遺体上面から出土した土器片と接合した（図8－4）。埋土からは多数の土器片の他，石器類（図8－6・7）や丸玉（図8－8）や剥片が出土した。壙底部やや南東側には遺体が検出され，その直上と周辺には炭化物層が見られ，火を伴う葬送儀礼を行った可能性が考えられる。ベンガラは確認されず，頭位・埋葬方法等については不明である。検出状況等から縄文時代晩期前葉から中葉に属するものと思われる。

P－7（図9）

k37･38とl37･38グリッドに跨がり位置する墓壙である。径約1.28mのほぼ円形を呈し，深さ約51cmを測る。埋土上面西端に大型礫が配され，やや南西寄りに赤色顔料を塗布した土器片（図9－1）が出土した。埋土の一部には砂質凝灰岩細粒が見られ，炭化物が全体に混じる。

壙底部ほぼ中央には遺体範囲が確認され，その南端に人骨の一部が検出されたが，遺存状態が悪く脆弱で部位等は不明である。また，ベンガラは確認されず，頭位・埋葬方法等についても不明である。埋土および遺体範囲上面より土器片（図 9－2～4 他）や剥片が出土し，埋土出土の土器片のうち 2 点は P－7 の下に位置する P－15 の土器片と接合した。P－7 は P－15 の上面を削平し構築されたものと考えられる。検出状況等から縄文時代晩期前葉から中葉に属するものと思われる。

P－8（図 10）

k40 グリッドに位置する墓壙である。発掘区南西端の幅の狭い場所にあり，確認が遅れやや掘りすぎてしまい，壙底部直上での検出である。また若干拡幅したが，全体を把握するには至らなかった。南東側を撹乱されているが，現状で長軸 0.84m短軸 0.40mを測り，断面での計測では深さは 40cm 前後である。壙底部にベンガラ範囲が検出されたが，遺体は確認されず，伴出遺物も見られなかった。

P－9（図 10）

k39 グリッドに位置する土壙である。径約 0.43mのほぼ円形を呈し，深さ約 22cm を測る。覆土上面北側に土器片（図 10－1）が集中して検出された。検出状況等から縄文時代晩期中葉に属するものと思われる。

P－10（図 10）

k38 グリッドに位置する墓壙である。西側は発掘区外に入り込んでいる。長軸は東西方向で，現状で長軸 0.96m短軸 0.66m深さ約 25cm を測る。ベンガラは見られず，壙底部には東西に長く遺体が検出されたが，遺存状態が悪く頭位・埋葬方法等については不明である。埋土上面北側や南東側から土器片（図 10－1・2 他）が出土し，遺体上面や壙底部にも土器片の出土は見られたが，細片のため図示しなかった。検出状況等から縄文時代晩期後葉に属するものと思われる。

P－11（図 11・12）

k38･39 グリッドに跨がり位置する墓壙である。長軸 0.91m短軸 0.80mの北西～南東にやや長い楕円形を呈し，深さ約 55cm を測る。埋土上面に礫が配され，その直下に土器（図 11－1・2）が重なった状態で出土し，そのうち 1 点は隣接する P－13 埋土出土のもの等と接合した（図 11－2)。また，その周辺にも剥片や土器片（図 11－3 他）が出土し，うち 1 点はやや離れた位置にある P－12 覆土出土のもの等と接合した（図 12－4)。土器の下には偏平な大型礫が置かれ，埋土に斜めに入っている。遺体範囲は壙底部やや北西側に検出されたが，遺存状態が悪く，頭位・埋葬方法等については不明で，その上面と南東側に土器片（図 12－5）が出土した。検出状況等から縄文時代晩期中葉に属するものと思われる。

P－12（図 12）

k38 グリッドに位置する土壙である。北西側の一部は発掘区外に入り込んでおり確認できなかったが，径 0.50m前後の円形を呈すると思われ，深さは約 60cm を測る。伴出遺物はないが，覆土より剥片や土器片（図 12－1 他）が出土し，うち 1 点は P－11 埋土出土のものと接合した。検出状況等から縄文時代晩期中葉に属すると思われるが判然としない。

P－13（図 12）

k38 グリッドに位置する墓壙である。径約 0.75mの円形を呈し，深さ約 40cm を測る。埋土上面やや東寄りに礫が配され，その周辺に土器（図 12－1）や土器片（図 12－2 他）が出土し

た。土器片（図 12－2）はＰ－11･12 出土の接合資料（P－11　図 12－4）と同一個体と見られる。壙底部中央にＴ字型を呈する遺体範囲が検出されたが，遺存状態が悪く，頭位・埋葬方法等については不明である。検出状況等から縄文時代晩期中葉から後葉に属すると思われる。

P－14（図 13）

ｌ37･38 グリッドに跨がり位置する墓壙である。周辺は撹乱が著しく，南東側は発掘区外に入り込んでいるため，ピット全体の形状は判然としない。埋土上面に砂質凝灰岩細粒層が見られ，その上面は撹乱に切られているが，厚さ約 40cm を測り固くしまり，埋土全体に炭化物が混じる。断面においての計測では，掘り込みは径 0.94mで砂質凝灰岩細粒層から壙底部までの深さは約 86cm を測る。壙底部に炭化物混じりの遺体範囲が検出されたが，頭位・埋葬方法等については不明である。埋土の砂質凝灰岩細粒層や炭化物の状態，遺体範囲の検出状況等 P－6 との類似性が見られる。埋土から土器片が出土したが，細片のため図示しなかった。検出状況等から縄文時代晩期前葉から中葉に属するものと思われる。

P－15（図 13）

ｋ37･38 とｌ37･38 グリッドに跨がり位置する墓壙である。径約 0.64mの円形を呈し，深さ約 13cm と浅い。壙底部やや北寄りに遺体範囲が検出され，その上面および周辺から土器片が出土し，そのうちの 3 点はＰ－７埋土出土のものと接合した（図 13－1)。明確な重複関係は確認できなかったが，ピット上部は P－7 により削平され，P－15 は P－7 より時期的に旧いものであり，検出状況等から縄文時代晩期前葉から中葉に属すると考えられる。

P－16（図 14）

ｋ38 グリッドに位置する。発掘区の土層断面に礫と土器片が露出していたため，土器片を採集しようと周囲の砂を掘ったところ，上に置かれた礫の重みで割れが生じているもののほぼ完形の土器（図 14－1）が逆さまに立った状態で出土した。土器の周囲は暗褐色砂でしまりはない。発掘区を拡幅し遺構全体を確認するには時間が無いため，早急に土層断面図に描き入れ取り上げようとしたが，周囲の砂ごと落下してしまい，その時に確認されたのが石斧（図 14－2）とリタッチド・フレイク 2 点（図 14－3・4）である。状況から推測すると，これら石器 3 点は土器中に納められていたと思われる。検出状況等から縄文時代晩期前葉から中葉に属すると思われ，墓壙の可能性も考えられる。

FP－1

ｌ35 グリッドに位置し，P－5 の確認面より約 25cm 上で検出された。長軸 0.30m短軸 0.15mの楕円形を呈し，最も厚い部分は厚さ約 9cm を測る。遺物は確認されず，小範囲のため図示していない。

遺構外出土の遺物

遺構外出土の遺物は土器 3,136 点，土製品 2 点，石器 85 点，剥片 297 点，陶磁器 463 点，金属製品 18 点，その他 28 点の合計 4,029 点を数えた。以下に若干の説明をするが，各計測値等の詳細は遺物一覧表を参照頂きたい。

・土　器（図 15－1～17，図 16－1～18）

縄文時代晩期中葉から後葉に属するものが主体で，復元されたものは少ないが，いずれも亀ヶ岡文化の影響を受けている土器群である。中葉のものについては壷・甕・深鉢・浅鉢等が見られ，大洞Ｃ$_1$～Ｃ$_2$式に並行するものである。後葉のものについては深鉢が多く，大洞Ａ～Ａ'

式に並行するものである。続縄文時代については恵山式や後北式のものが見られるが，II～III層が撹乱されている部分が多いため，数も少なく大半が撹乱出土のものである。

・**土製品**（図16－19・20）

縄文時代晩期の土器片の周縁を打ち欠いてほぼ円形に加工したものである。中央に穿孔のないものは未成品の可能性がある。

・**石　器**（図17－1～30，図18－1～10）

石鏃（図17－1～9）は全て黒曜石製で，有茎と無茎のものが見られ，無茎のものについては基部に抉りのあるものとないものがある。削器（図17－10～19）・掻器（図17－20～24）は両面調整により刃を作出するものと片面を主体に調整したものが見られる。大半が黒曜石製，形状は様々で原石面を残すものも多く，泥岩製で石箆あるいは箆状石器と呼ばれるものも見られる。リタッチド・フレイク（図17－25～30）はやや薄手の剥片の縁辺の一部を加工し，片面を主体に調整を施すもので，頁岩製や黒曜石製のものが見られる。

石斧（図18－1・2）については，うち1点が通常，刃部と考えられる部分が使用により潰れており，石斧以外のものの可能性がある。石鋸（図18－3・4）はいずれも凝灰岩製である。石斧の原材を擦り切る道具と考えられ，側縁に使用時の研磨痕が見られる。敲石（図18－5）は緑泥片岩製で，敲打痕は多面に亘る。凹石（図18－6～8）はいずれも凝灰岩製で，2面に凹みがあり，うち1点は研磨痕も見られ，砥石としても機能していたものと思われる。砥石（図18－9・10）も2点とも凝灰岩製で，研磨痕が2面と4面のものがある。

・**近世以降の遺物**（図16－21～26）

煙管（図16－21・22）はいずれも銅製の雁首で，うち1点はラウが残存する。陶製の徳利（図16－23）は焼酎を入れていたものと思われる。

まとめ

今回の調査では，縄文時代晩期中葉から後葉に属すると思われる墓壙や近世から近代に属すると思われるアイヌ墓壙等，平成元（1989）年度からこれまでに調査された本遺跡各地点にも数多く確認された検出例が見られた。特に，アイヌ墓壙と思われるP－4は掘り込みが確認されなかったものの，ゴザ様の樹皮にくるまわれた状態で南東頭位のほぼ全身骨格が検出され，隣接する服部地点等でもアイヌ墓壙が数多く検出されているが，一部に盗掘かと思われるような撹乱を受けており，比較的良好な検出例と言えよう。

縄文時代晩期の墓壙については，これまでの検出例とも併せて代表的と言える，砂質凝灰岩粗粒あるいは細粒を埋土として使用しているP－6・P－14が検出された。砂質凝灰岩粗粒層の入り方には，縦方向に見られるものや，横方向でも埋土上面・中位・遺体上面等幾つかのパターンが確認されており，本多地点の2基は埋土上面に横方向に入るものである。特にP－6は砂質凝灰岩細粒が墓壙を覆うように広がりが見られ，その中に土器が配されており，これまでの調査結果とのより一層の比較検討が必要と思われる。

今回の調査報告と大川遺跡に関わる既刊の調査報告書と併せて，多くの方々に活用され，様々な文化財活動の一助となれば幸いと存じます。

表1　遺物一覧（遺構）

図No.遺物No.	出土遺構	層位	計測値（cm）（g）	名称分類	備考
	P－1				掲載遺物なし
	P－2				掲載遺物なし
	P－3				掲載遺物なし
5－1	P－4 ①	遺体直上	径9.6　厚さ0.5　重さ114	鍔	銅製
5－2	P－4 ②	壙底	全長(16.5)　刃長(13.6)　幅2.95　厚さ0.45	刀子	鉄製　一部欠損
6－1	P－5 ①	壙底	口径18.1　底径9.2　器高11.9	土器	一部欠損
6－2	P－5 ⑭	壙底	長さ2.05　幅1.55　厚さ0.4　重さ1.3	石鏃（黒曜石）	
6－3	P－5 ⑮	遺体上面	長さ(4.1)　幅2.8　厚さ0.55　重さ(5.4)	石鏃（チャート）	一部欠損
6－4	P－5 ④	埋土	長さ3.25　幅1.6　厚さ0.4　重さ1.4	石鏃（黒曜石）	
6－5	P－5 ⑧	埋土	長さ5.4　幅3.4　厚さ2.1　重さ20.8	ﾘﾀｯﾁﾄﾞﾌﾚｲｸ（ﾁｬｰﾄ）	原石面残存
6－6	P－5 ②	埋土		土器拓本	頸～肩部
7－1	P－6 ①	埋土上面	口径(11.0)　胴径21.1　底径10.4　器高(23.5)	土器	接合資料
8－2	P－6 ②他	埋土上面	肩径(18.8)	土器	接合資料
8－3	P－6 ②	埋土上面		土器拓本	胴部　137－06Ⅲと接合
8－4	P－6 ③・④他	埋土・遺体上面		土器拓本	口縁部
8－5	P－6	埋土	長さ3.45　幅1.55　厚さ0.4　重さ1.0	石鏃（黒曜石）	
8－6	P－6	埋土	長さ1.95　幅3.4　厚さ0.6　重さ2.1	削器（黒曜石）	原石面残存
8－7	P－6	埋土	長さ3.35　幅6.3　厚さ1.8　重さ16.0	掻器（黒曜石）	原石面残存
8－8	P－6	埋土	径1.2×1.0　孔径0.35　厚さ0.9　重さ1.5	丸玉（蛇紋岩）	
9－1	P－7 ①	埋土上面		土器	口縁部　赤色顔料塗布
9－2	P－7 ③	遺体上面		土器拓本	口縁部
9－3	P－7 ⑩・⑪他	埋土・遺体上面		土器拓本	口縁部
9－4	P－7	埋土		土器拓本	口縁部
9－5	P－7	埋土	長さ(2.15)　幅(1.9)　厚さ(0.7)　重さ(6.1)	石斧（泥岩）	一部欠損
	P－8				掲載遺物なし
10－1	P－9 ①	覆土		土器拓本	胴部
10－1	P－10 ①他	埋土上面		土器拓本	口縁部　k38－19Ⅲ他と接合
10－2	P－10 ⑧	埋土		土器拓本	口縁部　10－1と同一個体
11－1	P－11 ⑰	埋土上面	口径(41.5)　底径(11.0)　器高15.6	土器	一部欠損
11－2	P－11 ⑯他	埋土上面		土器拓本	口縁～胴部　P－13埋土他と接合
11－3	P－11 ⑥・⑨	埋土上面		土器拓本	口縁～胴部
12－4	P－11 ④他	埋土上面		土器拓本	口縁～胴部　P－12覆土他と接合
12－5	P－11 ⑲	壙底		土器拓本	胴部
12－1	P－12	覆土		土器拓本	口縁部
12－1	P－13	埋土上面	口径12.3　器高5.3	土器	一部欠損
12－2	P－13	埋土上面		土器拓本	口縁部
	P－14				掲載遺物なし
13－1	P－15 ④他	遺体上面		土器拓本	胴部　P－7埋土他と接合
14－1	P－16		口径10.8　胴径18.6　底径10.5　器高20.9	土器	
14－2	P－16		長さ(12.2)　幅5.65　厚さ2.9　重さ(315)	石斧（緑泥片岩）	一部欠損
14－3	P－16		長さ3.9　幅2.8　厚さ0.85　重さ4.4	ﾘﾀｯﾁﾄﾞﾌﾚｲｸ（黒曜石）	原石面残存
14－4	P－16		長さ2.35　幅3.0　厚さ0.6　重さ2.2	ﾘﾀｯﾁﾄﾞﾌﾚｲｸ（黒曜石）	原石面残存

表2 遺物一覧(遺構外①)

図No.遺物No.	出土地点	層位	計測値 (cm) (g)	名称分類	備考
15－1	l37－21他	Ⅲ	口径(12.2) 胴径(13.3) 器高(7.65)	土器	接合資料 大洞C_1～C_2式並行
15－2	k38－09他	Ⅲ	口径(26.2) 底径(8.4) 器高(13.8)	土器	接合資料 大洞C_1～C_2式並行
15－3	k38－14他	Ⅲ	口径(23.5) 底径10.55 器高18.3	土器	接合資料 大洞C_1～C_2式並行
15－4	k38－14他	Ⅲ	口径(25.2) 器高(8.6)	土器	接合資料 大洞C_1～C_2式並行
15－5	l37－21	Ⅲ	底径7.4 器高(6.9)	土器	接合資料 大洞C_1～C_2式並行
15－6	l35	撹乱	口径(13.9) 底径(8.4) 器高(3.6)	土器	接合資料 大洞A～A´式並行 赤色顔料付着
15－7	表採		器高(3.2)	土器	高台部 大洞A～A´式並行
15－8	k39－04	Ⅲ		土器拓本	接合資料 口縁部 桃内式
15－9	k37－20他	Ⅲ		土器拓本	接合資料 口縁部 大洞C_1～C_2式並行
15－10	k39－09他	Ⅲ		土器拓本	接合資料 口縁部 大洞C_1～C_2式並行
15－11	k38－14	Ⅲ		土器拓本	接合資料 口縁～胴部 大洞C_1～C_2式並行
15－12	k37－20	Ⅲ		土器拓本	接合資料 口縁部 大洞C_1～C_2式並行
15－13	k38－05	Ⅲ		土器拓本	口縁部 大洞C_1～C_2式並行
15－14	k38－14	Ⅳ		土器拓本	口縁～胴部 大洞C_1～C_2式並行
15－15	k37－20	Ⅲ		土器拓本	接合資料 口縁部 大洞C_1～C_2式並行
15－16	k39	撹乱		土器拓本	口縁部 大洞C_1～C_2式並行
15－17	l37－06	Ⅲ		土器拓本	高台部 大洞C_1～C_2式並行
16－1	k37 (31)・(33)	Ⅲ		土器拓本	接合資料 口縁部 大洞A～A´式並行
16－2	k37－19	Ⅲ		土器拓本	口縁部 大洞A～A´式並行
16－3	k38－20	Ⅲ		土器拓本	接合資料 口縁部 大洞A～A´式並行
16－4	k37 (71)・(72)	Ⅲ		土器拓本	接合資料 口縁部 大洞A～A´式並行
16－5	k38－19	Ⅲ		土器拓本	口縁部 大洞A～A´式並行
16－6	k38－01	Ⅳ		土器拓本	口縁部 大洞A～A´式並行
16－7	k38－19他	Ⅲ		土器拓本	接合資料 口縁部 大洞A～A´式並行
16－8	k37－05	Ⅲ		土器拓本	口縁部 大洞A～A´式並行
16－9	k37 (18)	Ⅲ		土器拓本	口縁部 大洞A～A´式並行
16－10	k38	撹乱		土器拓本	口縁部 大洞A～A´式並行
16－11	k39	撹乱		土器拓本	接合資料 胴部 大洞A～A´式並行
16－12	k38－20	Ⅲ		土器拓本	口縁部 大洞A～A´式並行
16－13	k40	撹乱		土器拓本	口縁部 大洞A～A´式並行
16－14	k35	撹乱		土器拓本	口縁部 大洞A～A´式並行
16－15	k37 (63)	Ⅲ		土器拓本	肩部 大洞A～A´式並行
16－16	k38－14	Ⅲ		土器拓本	口縁部 恵山式？
16－17	k39	撹乱		土器拓本	接合資料 口縁～胴部 後北B式
16－18	k38	撹乱		土器拓本	接合資料 口縁～胴部 後北B式
16－19	l37－21	Ⅱ	径(2.7) ×3.8 厚さ0.5 孔径(0.2)	有孔円形土器片	一部欠損
16－20	l37	撹乱	径4.2×4.05 厚さ0.8	円形土器片	穿孔なし
16－21	l36	撹乱	長さ4.75 火皿径1.45 火皿高0.85 管径1.0	煙管（雁首）	銅製 ラウ残存
16－22	k37	撹乱	長さ4.65 火皿径1.20 火皿高0.65 管径1.0	煙管（雁首）	銅製
16－23	k38	撹乱	口径5.0 胴径14.5 底径7.4 器高25.5	陶器（徳利）	接合資料
16－24	l37	撹乱	口径9.9 底径3.6 器高4.5	磁器（碗）	接合資料 染付 外側面区画文様
16－25	l37	撹乱	銭径2.3 内径1.8	古銭（寛永通寶）	銅一文銭 新寛永 背元
16－26	l37	撹乱	銭径2.3 内径1.95	古銭（寛永通寶）	銅一文銭 新寛永 無背

表3 遺物一覧(遺構外②)

図No.遺物No.	出土地点	層位	計測値 (cm) (g)				名称分類	備考
17－1	k38	撹乱	長さ(2.85)	幅1.7	厚さ0.45	重さ(1.3)	石鏃（黒曜石）	先端部・基部欠損
17－2	k39	撹乱	長さ3.25	幅1.75	厚さ0.4	重さ1.7	石鏃（黒曜石）	
17－3	k38	撹乱	長さ(1.9)	幅1.4	厚さ0.45	重さ(1.1)	石鏃（黒曜石）	先端部・基部欠損
17－4	k38	撹乱	長さ(2.0)	幅1.5	厚さ0.4	重さ(0.7)	石鏃（黒曜石）	基部欠損
17－5	l36	撹乱	長さ(1.75)	幅2.0	厚さ0.4	重さ(1.0)	石鏃（黒曜石）	先端部欠損
17－6	l35－13	Ⅲ	長さ2.65	幅1.65	厚さ0.35	重さ1.1	石鏃（黒曜石）	
17－7	k38－15	Ⅲ	長さ(2.0)	幅1.55	厚さ0.3	重さ(0.8)	石鏃（黒曜石）	先端部・基部欠損　原石面残存
17－8	k38－10	Ⅲ	長さ2.3	幅2.35	厚さ0.35	重さ1.5	石鏃（黒曜石）	
17－9	k39－09	Ⅱ	長さ(2.0)	幅(1.9)	厚さ(0.35)	重さ(1.1)	石鏃？（黒曜石）	一部欠損　削器の可能性あり
17－10	k38	撹乱	長さ3.25	幅2.6	厚さ0.95	重さ6.4	削器（黒曜石）	原石面残存
17－11	k38－10	Ⅲ	長さ3.75	幅2.2	厚さ1.4	重さ8.6	削器（黒曜石）	原石面残存
17－12	k39－09	Ⅱ	長さ5.4	幅2.6	厚さ1.4	重さ11.8	削器（黒曜石）	原石面残存
17－13	k38－14	Ⅲ	長さ6.75	幅3.2	厚さ1.4	重さ31.2	削器（泥岩）	石箆？
17－14	k38－09	Ⅱ	長さ4.8	幅2.8	厚さ1.9	重さ14.8	削器（黒曜石）	原石面残存
17－15	k38－14	Ⅱ	長さ3.25	幅2.15	厚さ0.7	重さ2.9	削器（黒曜石）	
17－16	k38	Ⅱ	長さ2.95	幅1.8	厚さ0.45	重さ1.5	削器（黒曜石）	
17－17	l38－06	Ⅲ	長さ3.85	幅4.2	厚さ1.1	重さ12.2	削器（黒曜石）	原石面残存
17－18	k38－10	Ⅱ	長さ3.35	幅3.85	厚さ1.4	重さ10.4	削器（黒曜石）	原石面残存
17－19	k38－09	Ⅱ	長さ(3.3)	幅3.4	厚さ(1.1)	重さ(13.0)	削器（黒曜石）	原石面残存
17－20	k38－13	Ⅱ	長さ3.8	幅3.35	厚さ0.85	重さ5.8	掻器（黒曜石）	原石面残存
17－21	l37－17	Ⅲ	長さ4.75	幅5.85	厚さ1.4	重さ35.8	掻器（玄武岩）	
17－22	k38	撹乱	長さ3.2	幅2.75	厚さ0.9	重さ9.5	掻器（黒曜石）	原石面残存
17－23	k37－25	Ⅲ	長さ2.75	幅3.65	厚さ1.0	重さ7.0	掻器（黒曜石）	原石面残存
17－24	k37－05	Ⅲ	長さ2.25	幅2.8	厚さ1.15	重さ5.5	掻器（黒曜石）	原石面残存
17－25	k38	Ⅱ	長さ3.2	幅3.35	厚さ1.0	重さ8.1	リタッチド・フレイク（頁岩）	
17－26	k38－14	Ⅲ	長さ4.2	幅2.2	厚さ1.15	重さ4.8	リタッチド・フレイク（黒曜石）	原石面残存
17－27	k38－14	Ⅲ	長さ3.95	幅1.75	厚さ1.2	重さ4.7	リタッチド・フレイク（黒曜石）	
17－28	k38－10	Ⅲ	長さ3.65	幅2.65	厚さ0.9	重さ5.3	リタッチド・フレイク（黒曜石）	
17－29	k38	Ⅱ	長さ2.0	幅3.2	厚さ0.75	重さ3.9	リタッチド・フレイク（黒曜石）	
17－30	k38－09	Ⅱ	長さ3.8	幅5.0	厚さ1.3	重さ10.4	リタッチド・フレイク（黒曜石）	
18－1	l37－11	Ⅲ	長さ7.0	幅3.15	厚さ7.5	重さ25.6	石斧？（層灰岩？）	
18－2	k39	撹乱	長さ(9.5)	幅4.35	厚さ1.45	重さ(111)	石斧（泥岩）	一部欠損
18－3	l37 ⑩⓪	Ⅱ	長さ5.2	幅(5.6)	厚さ1.1	重さ(38.0)	石鋸（凝灰岩）	一部欠損
18－4	k37 ㉔	Ⅱ	長さ7.7	幅(13.8)	厚さ1.1	重さ(150)	石鋸（凝灰岩）	一部欠損
18－5	k38 ④	Ⅱ	長さ11.4	幅6.4	厚さ4.3	重さ460	敲石（緑泥片岩）	敲打痕は多面に亘る
18－6	k37－19	Ⅱ	長さ14.6	幅9.4	厚さ5.6	重さ727	凹石（凝灰岩）	
18－7	k37 ⑥⑧	Ⅱ	長さ13.0	幅9.9	厚さ5.8	重さ451.5	凹石（凝灰岩）	砥石として兼用　研磨痕は１面
18－8	k37 ⑨⓪	Ⅱ	長さ11.2	幅8.8	厚さ4.4	重さ353.5	凹石（凝灰岩）	
18－9	l37	撹乱	長さ12.2	幅7.5	厚さ4.3	重さ540	砥石（凝灰岩）	研磨痕は２面
18－10	l37	撹乱	長さ11.3	幅6.3	厚さ2.0	重さ200	砥石（凝灰岩）	研磨痕は４面

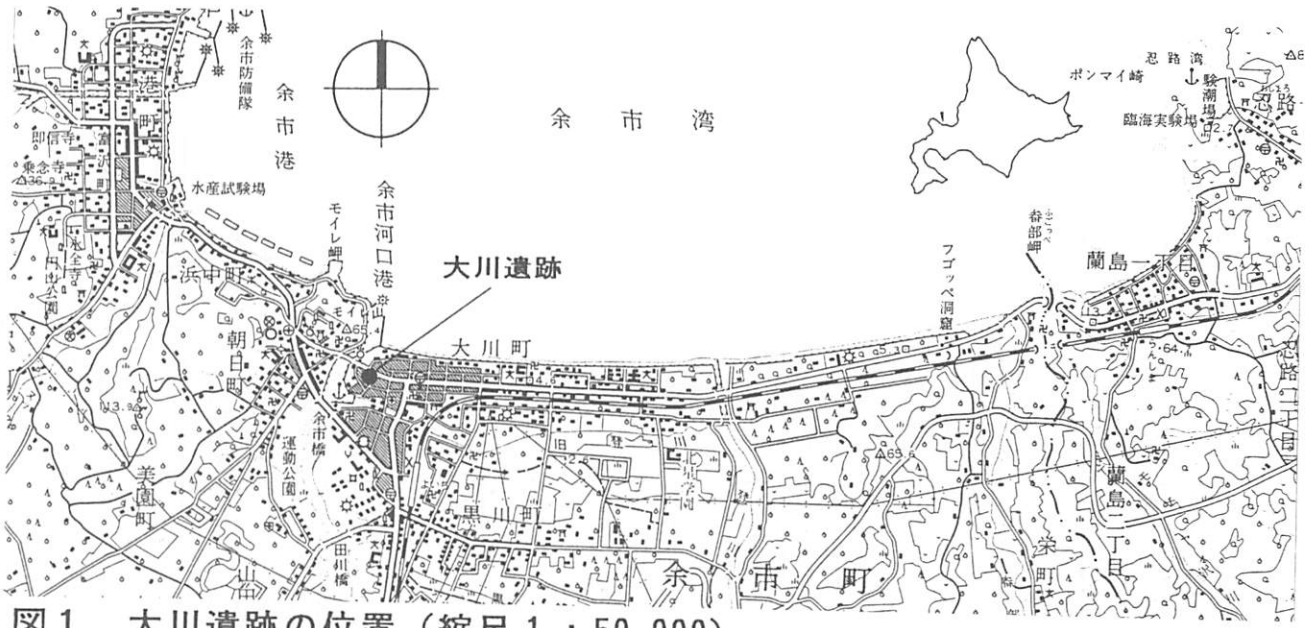


図1　大川遺跡の位置（縮尺1：50,000）

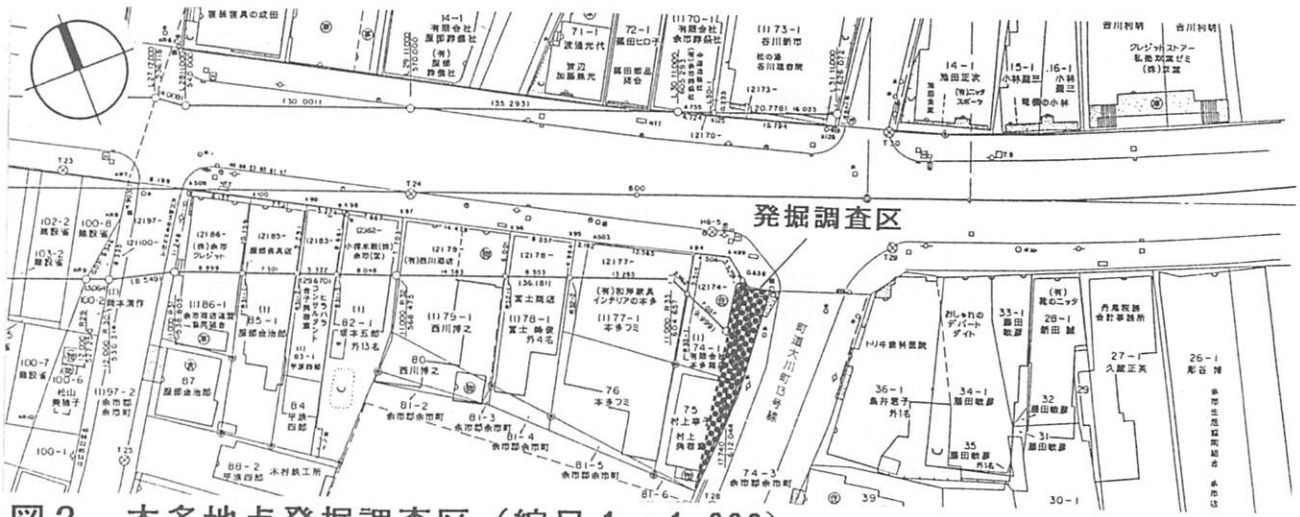


図2　本多地点発掘調査区（縮尺1：1,000）

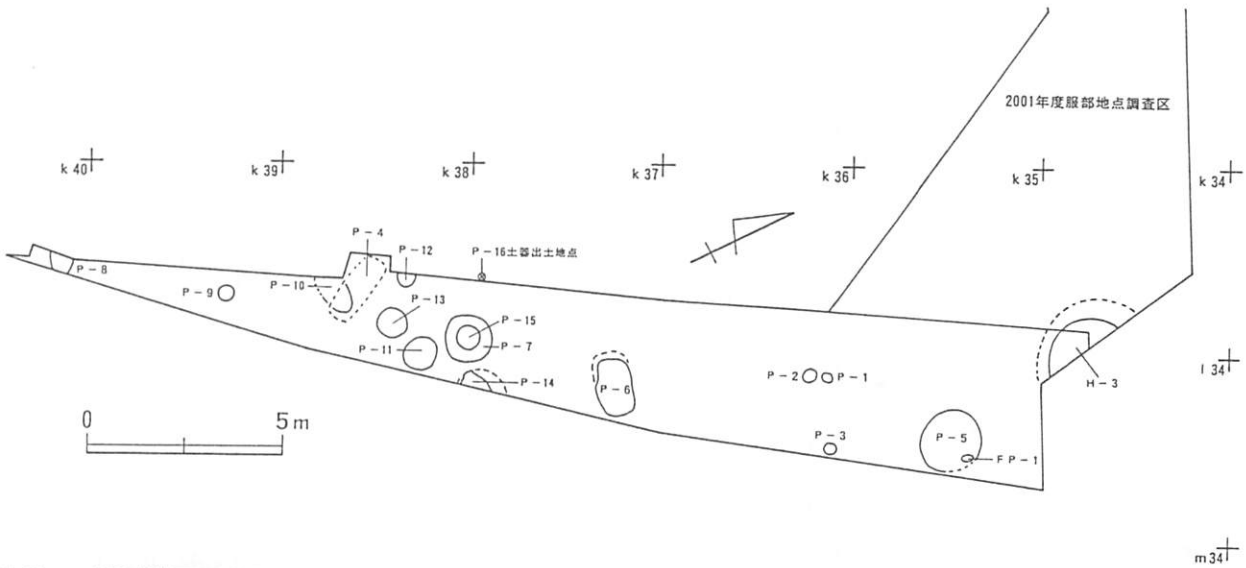


図3　遺構配置図

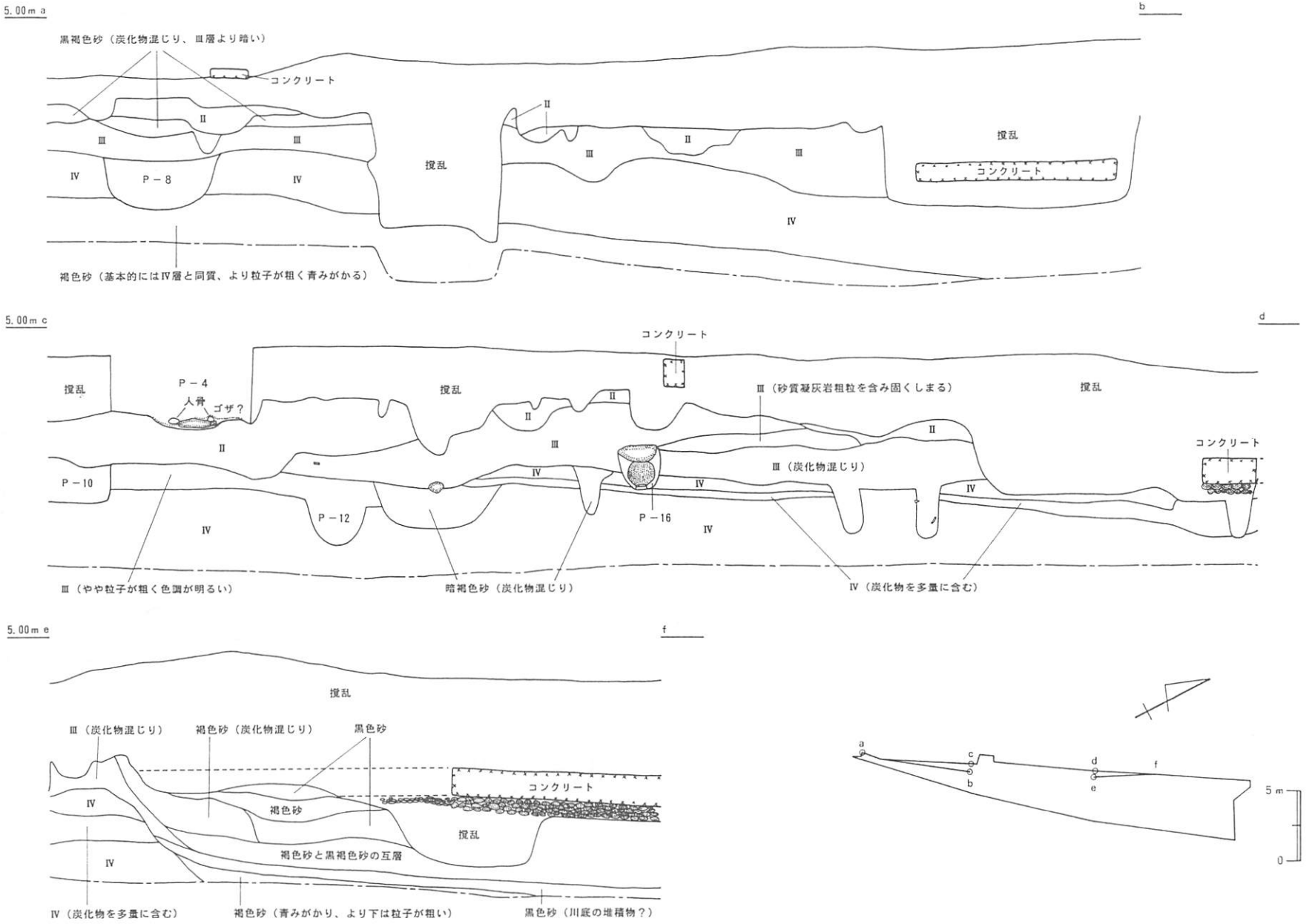

5.00m a
b
黒褐色砂（炭化物混じり、Ⅲ層より暗い）
コンクリート
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
P－8
撹乱
褐色砂（基本的にはⅣ層と同質、より粒子が粗く青みがかる）
5.00m c
d
P－4
人骨
ゴザ？
P－10
P－12
P－16
Ⅲ（砂質凝灰岩粗粒を含み固くしまる）
Ⅲ（炭化物混じり）
Ⅲ（やや粒子が粗く色調が明るい）
暗褐色砂（炭化物混じり）
Ⅳ（炭化物を多量に含む）
5.00m e
f
Ⅲ（炭化物混じり）
褐色砂（炭化物混じり）
黒色砂
褐色砂
褐色砂と黒褐色砂の互層
Ⅳ（炭化物を多量に含む）
褐色砂（青みがかり、より下は粒子が粗い）
黒色砂（川底の堆積物？）
a
b
c
d
e
f
5m
0

図４　調査区土層断面図

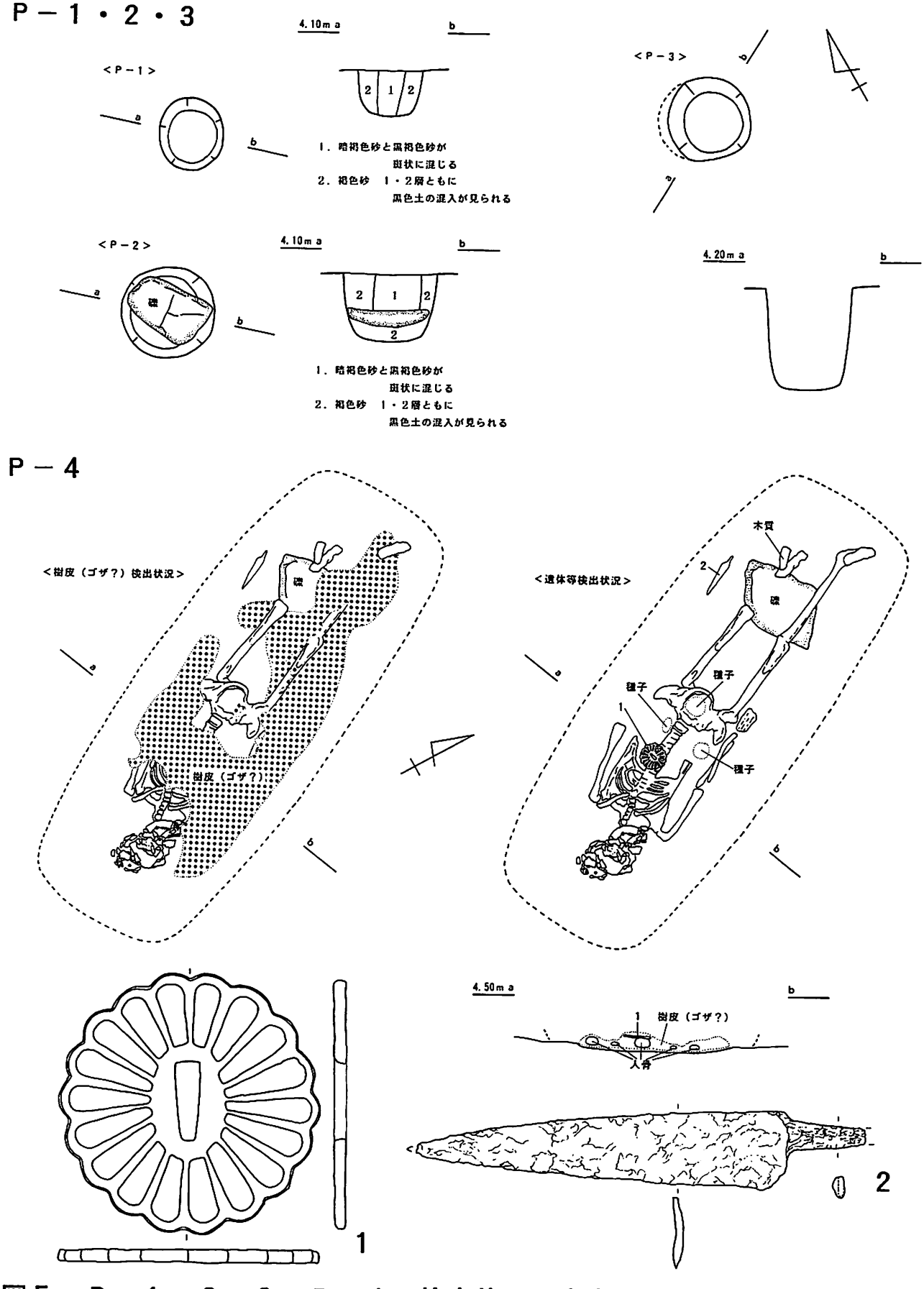


図5　P－1・2・3，P－4の検出状況と出土遺物

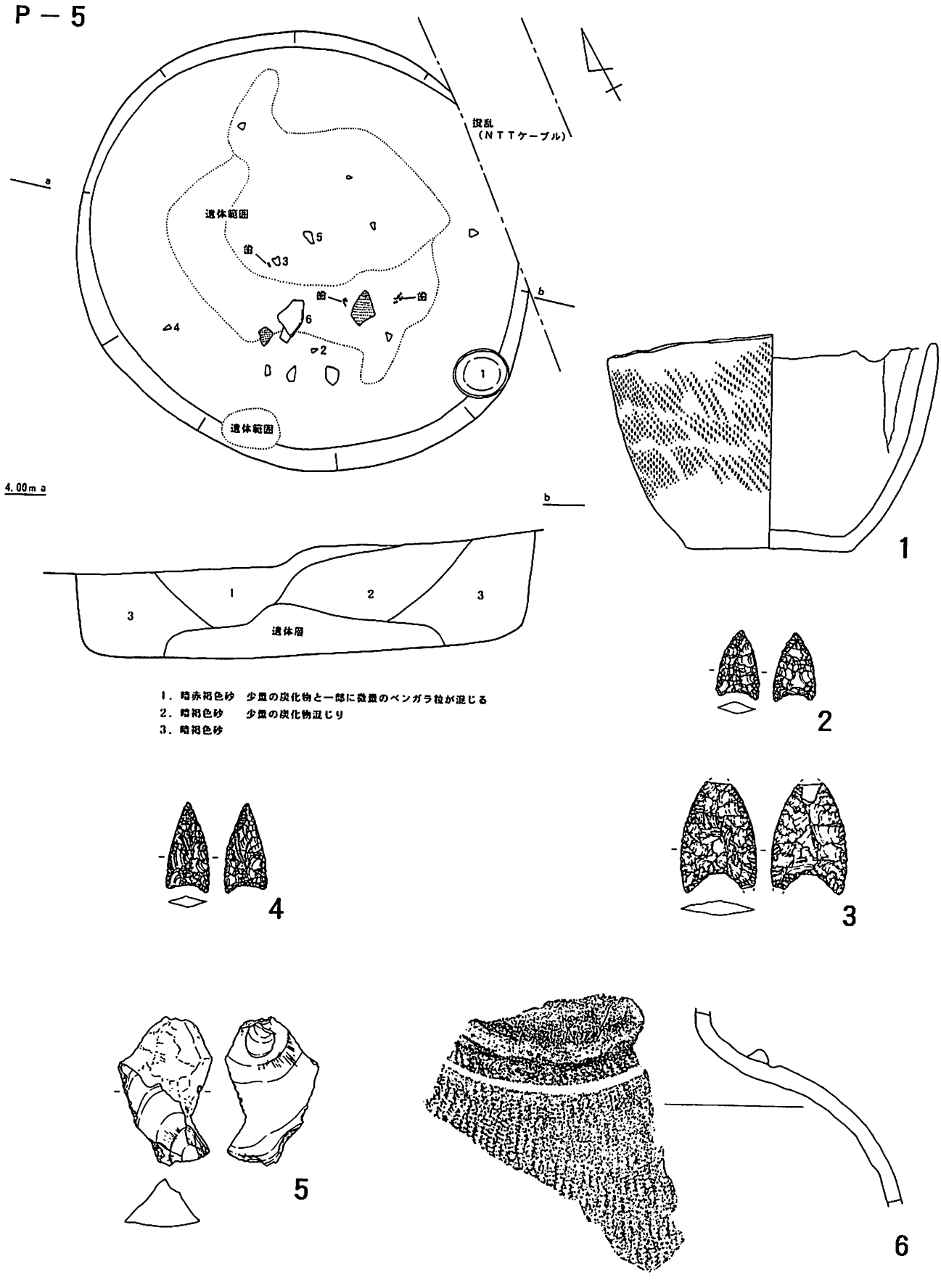


図6　P－5の検出状況と出土遺物

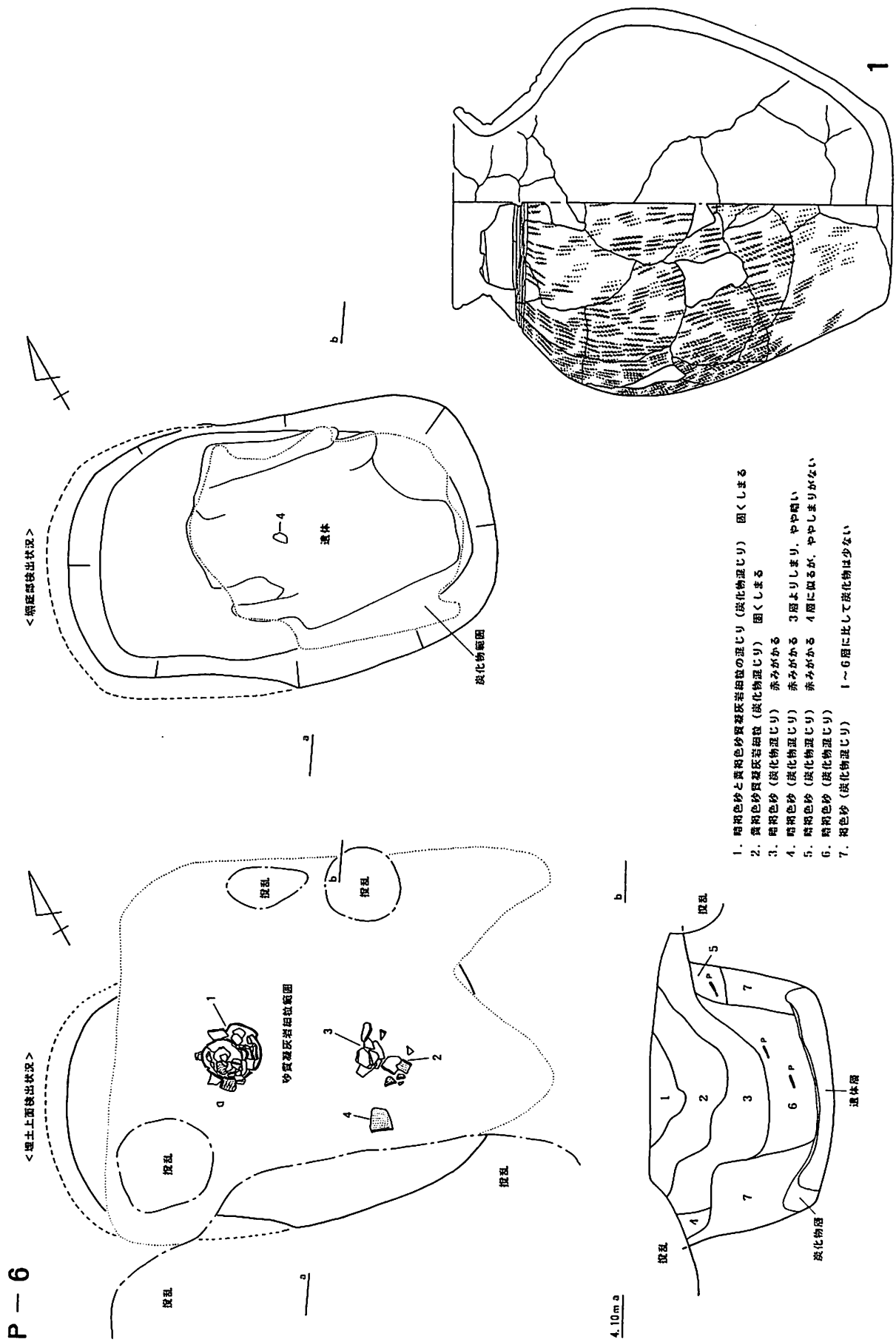


図7　P－6の検出状況と出土遺物

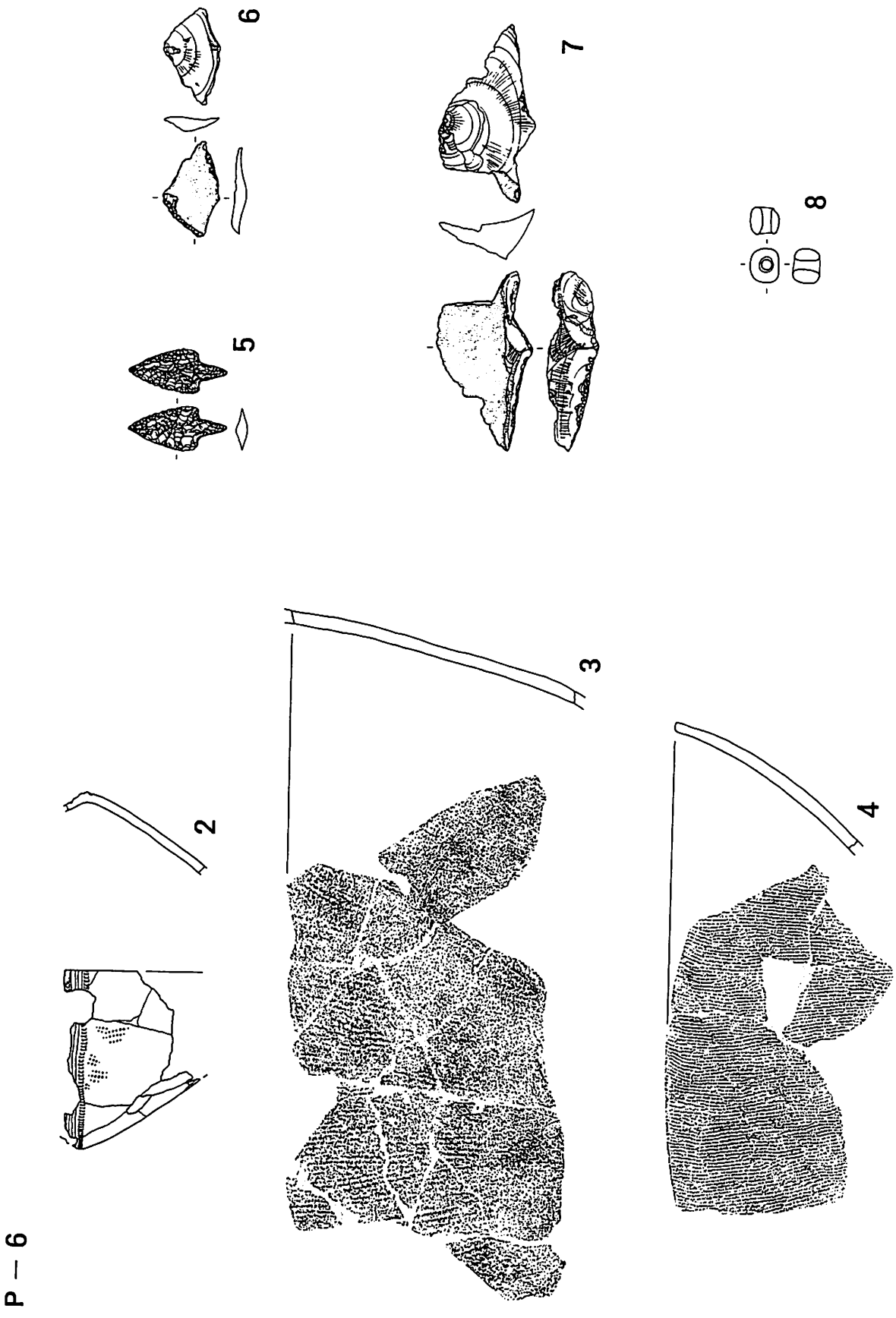


図8　P－6の出土遺物

P－7

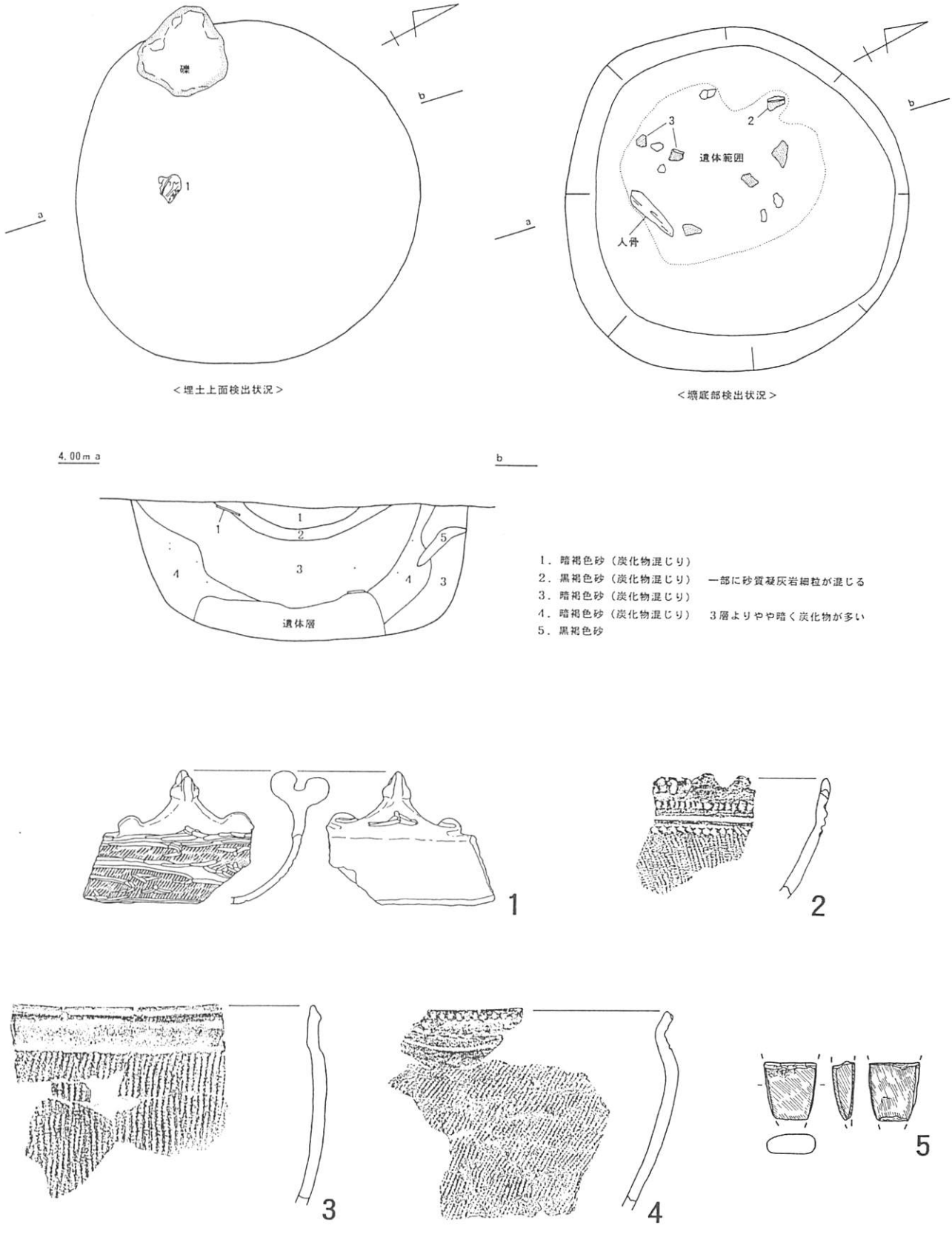


図9　P－7の検出状況と出土遺物

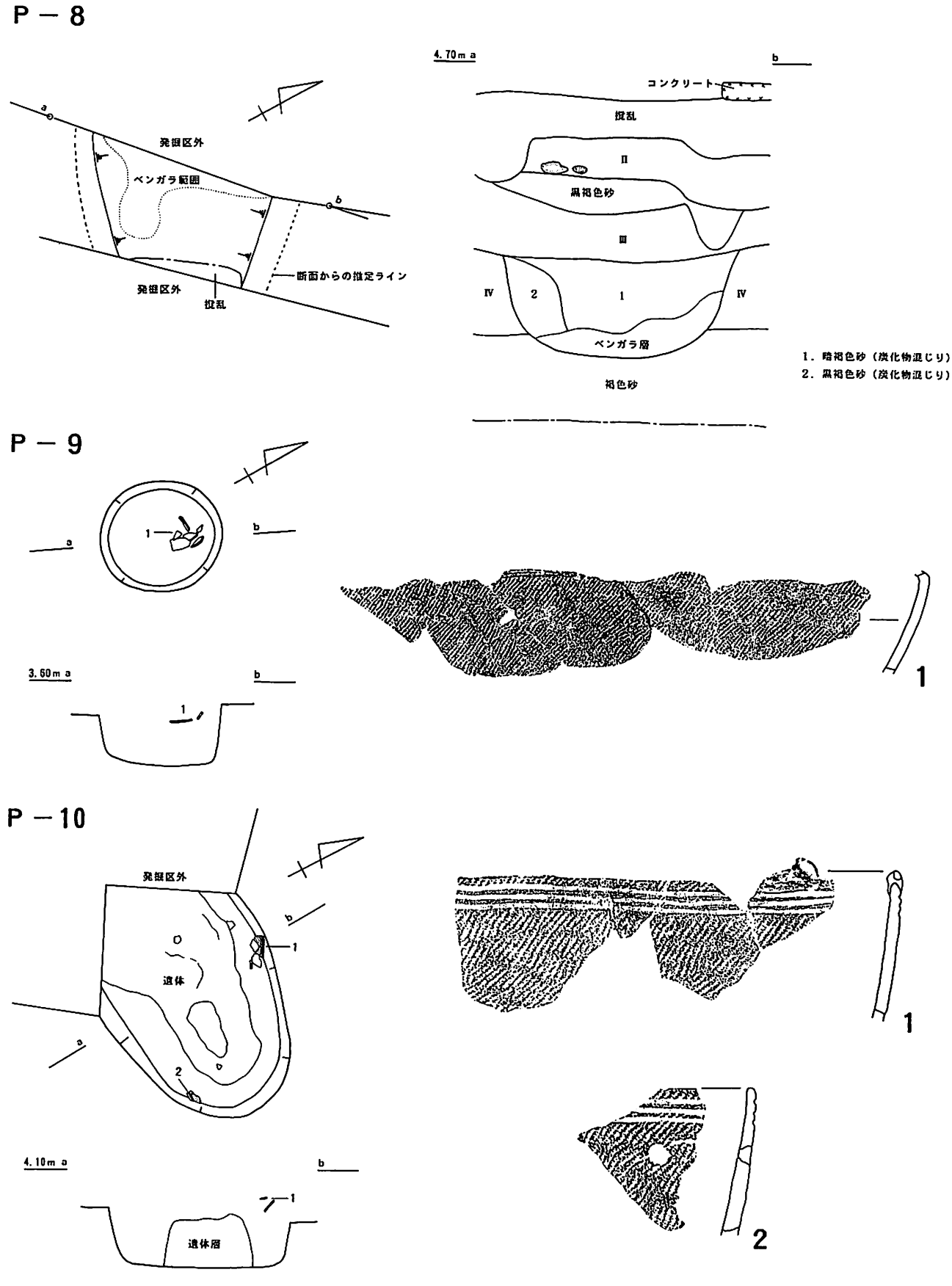


図10　P－8，P－9，P－10の検出状況と出土遺物

P－11

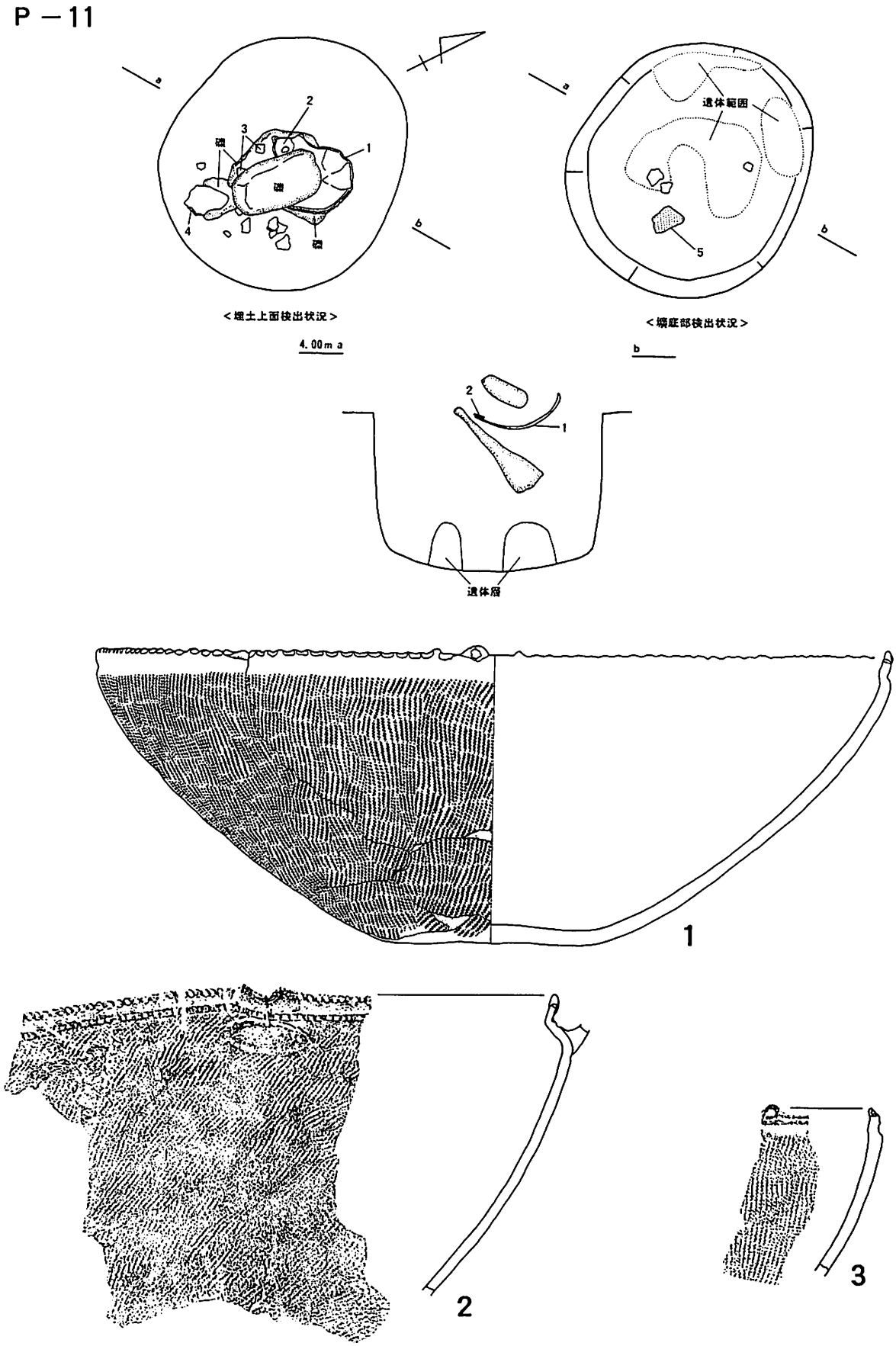


図11　P－11の検出状況と出土遺物

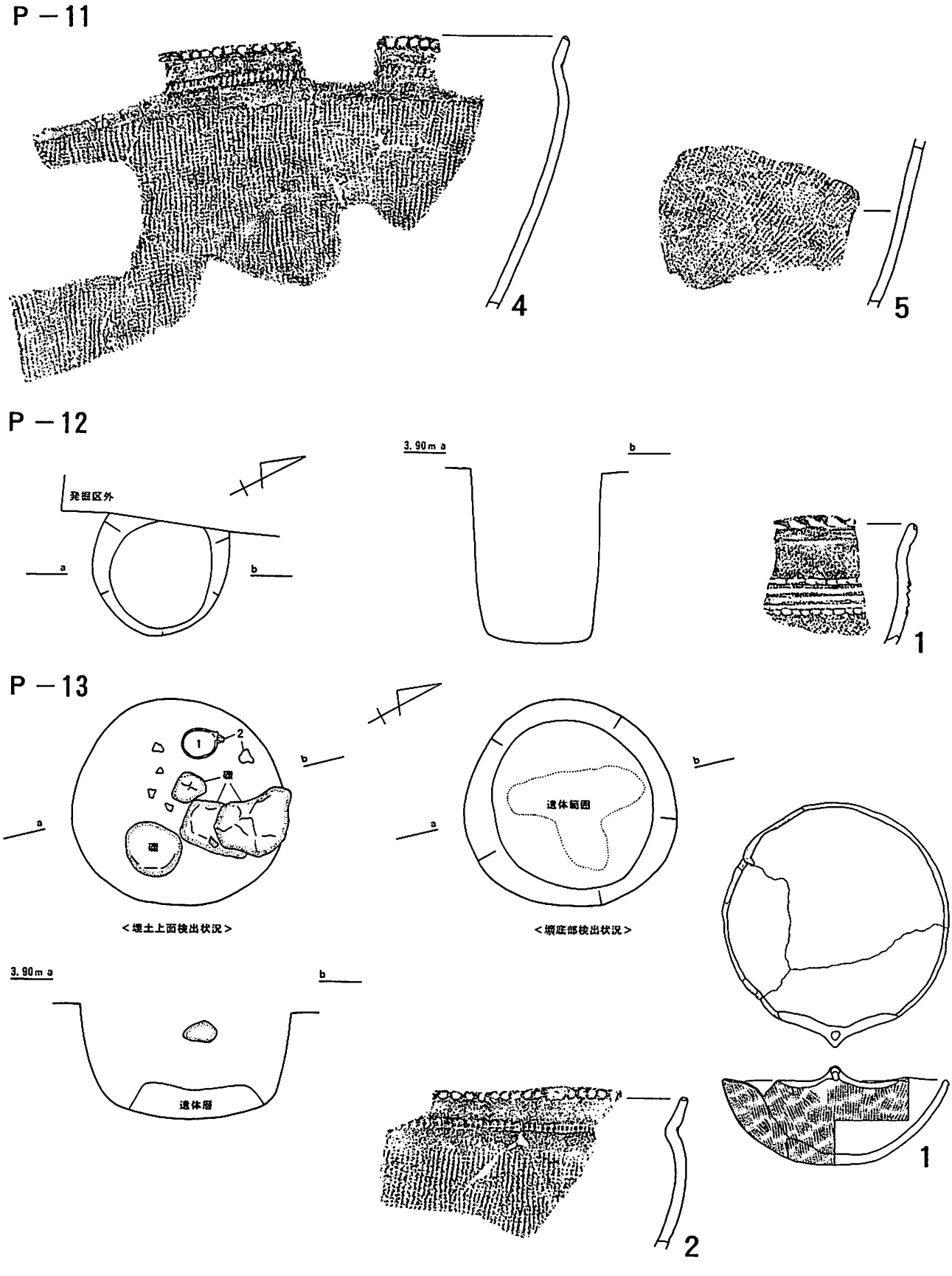


図12　P－11，P－12，P－13の検出状況と出土遺物

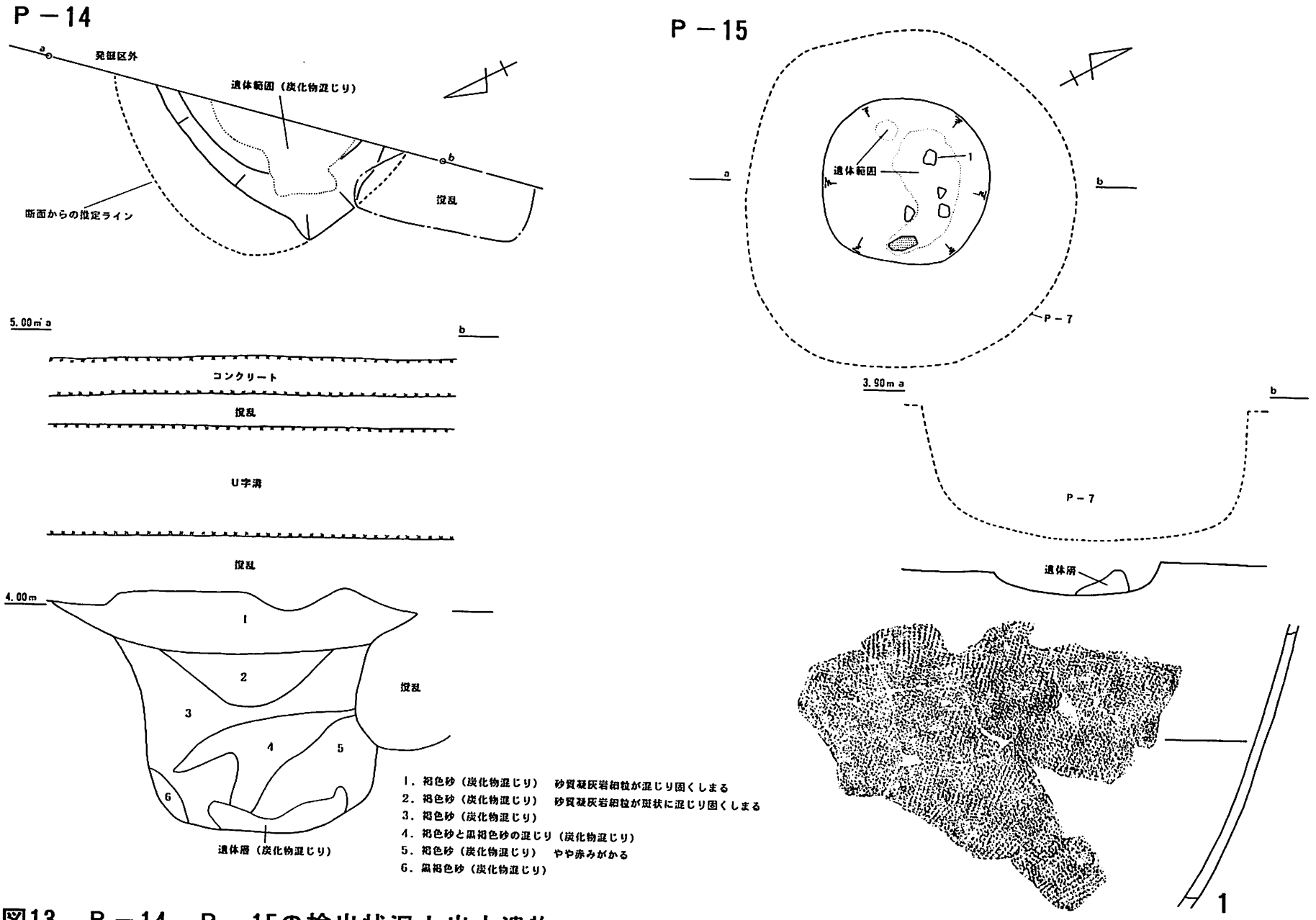


図13　P－14，P－15の検出状況と出土遺物

P－16

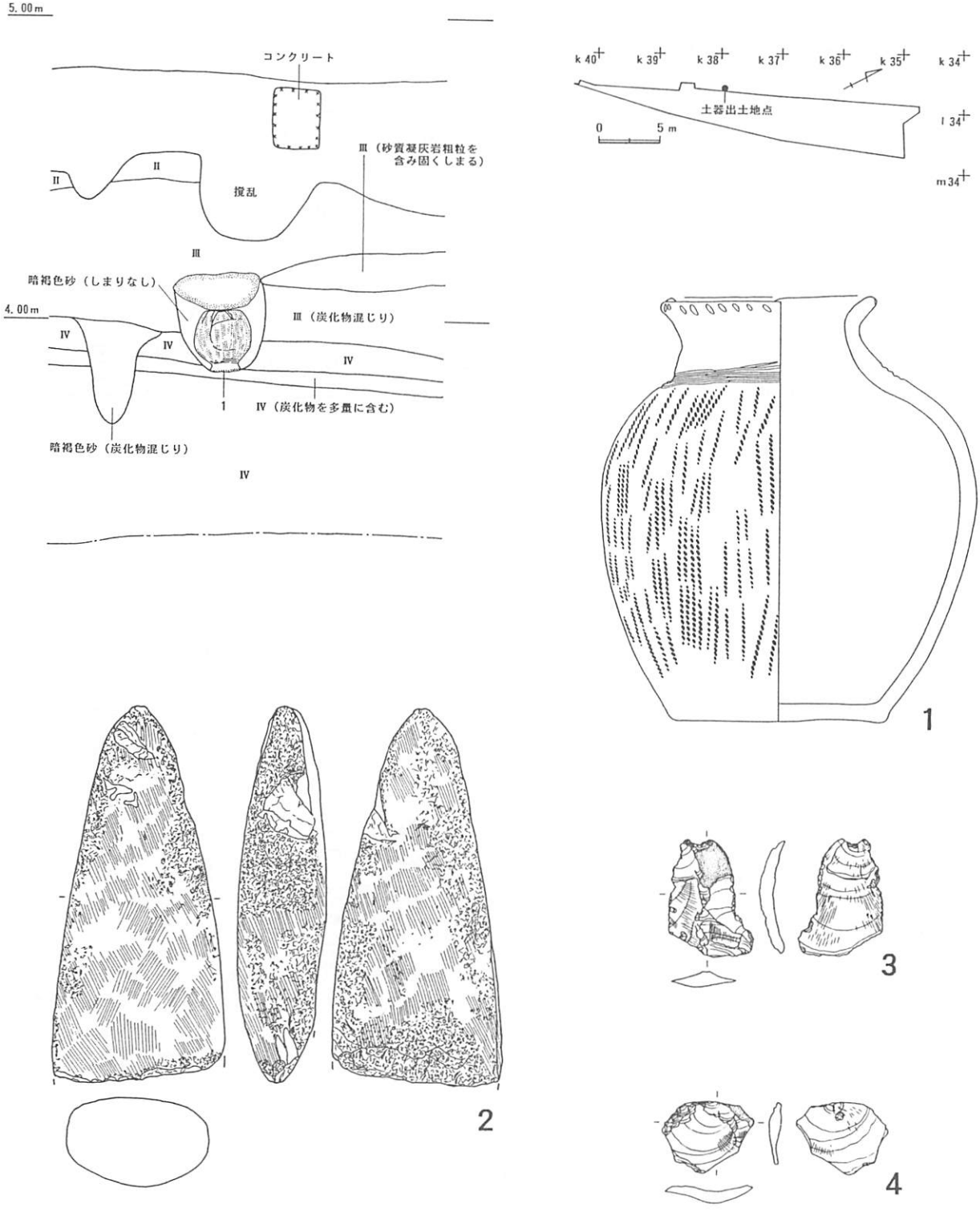


図14　P－16の検出状況と出土遺物

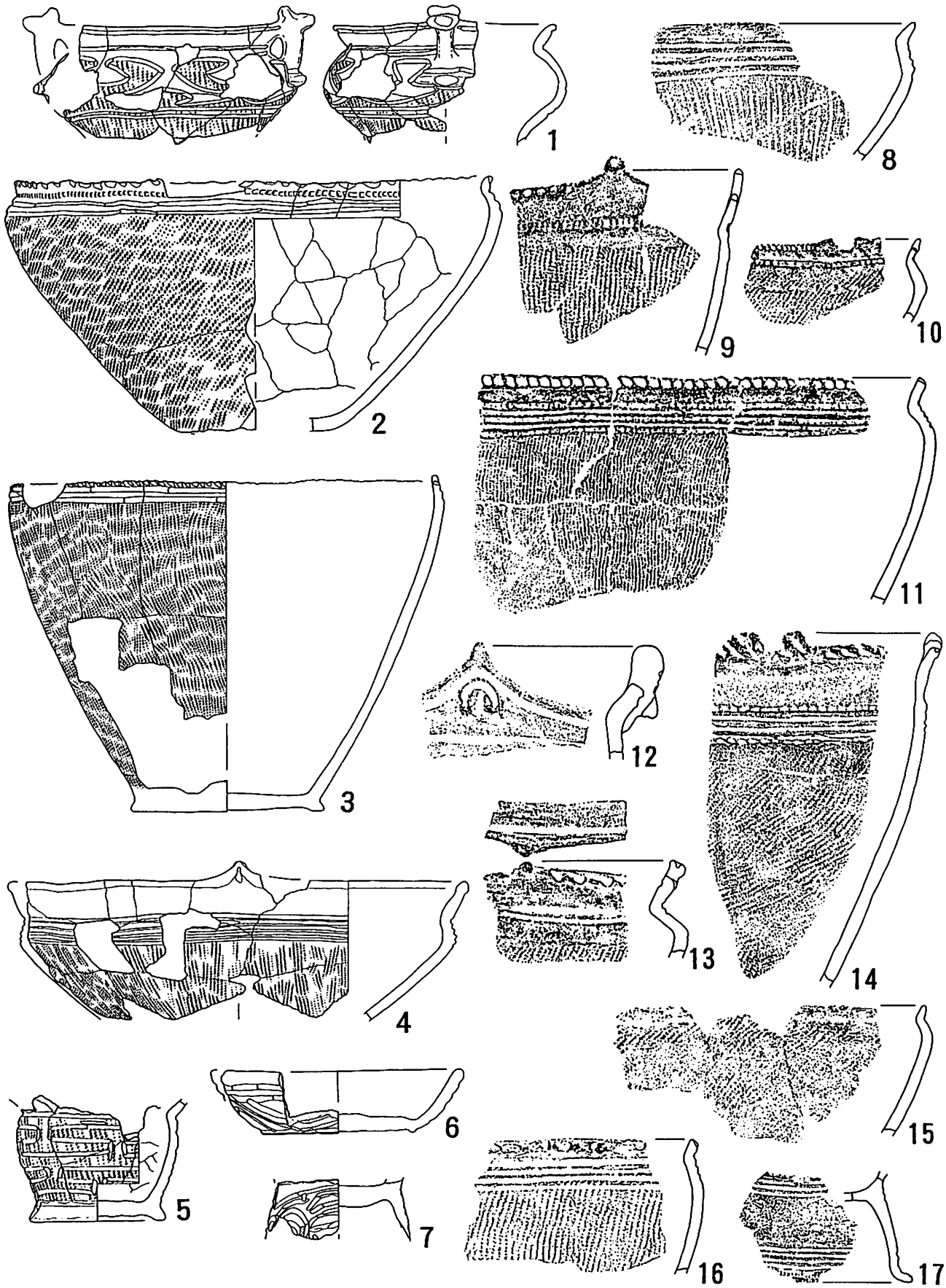


図15　遺構外出土の遺物（1）

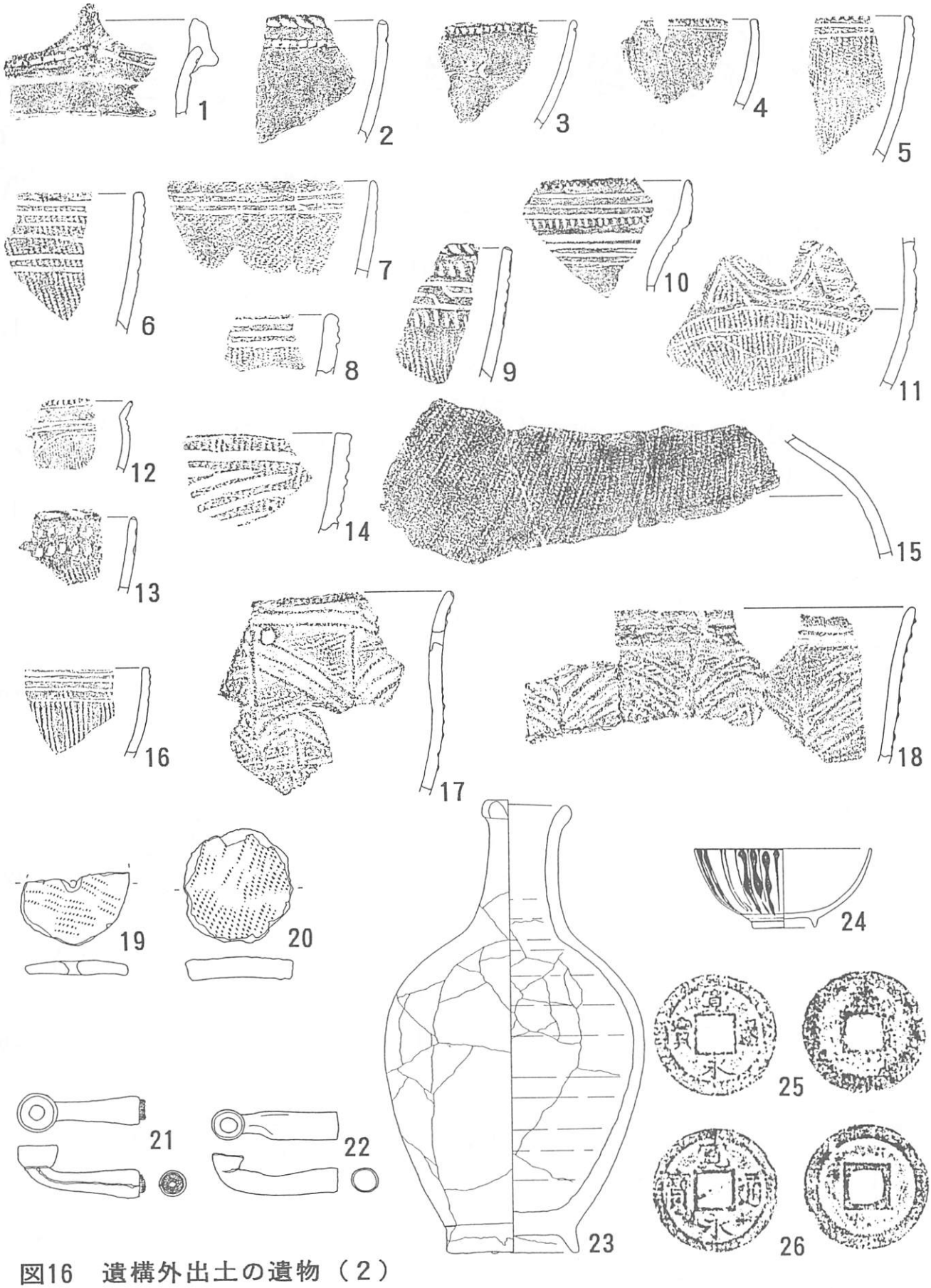


図16　遺構外出土の遺物（2）

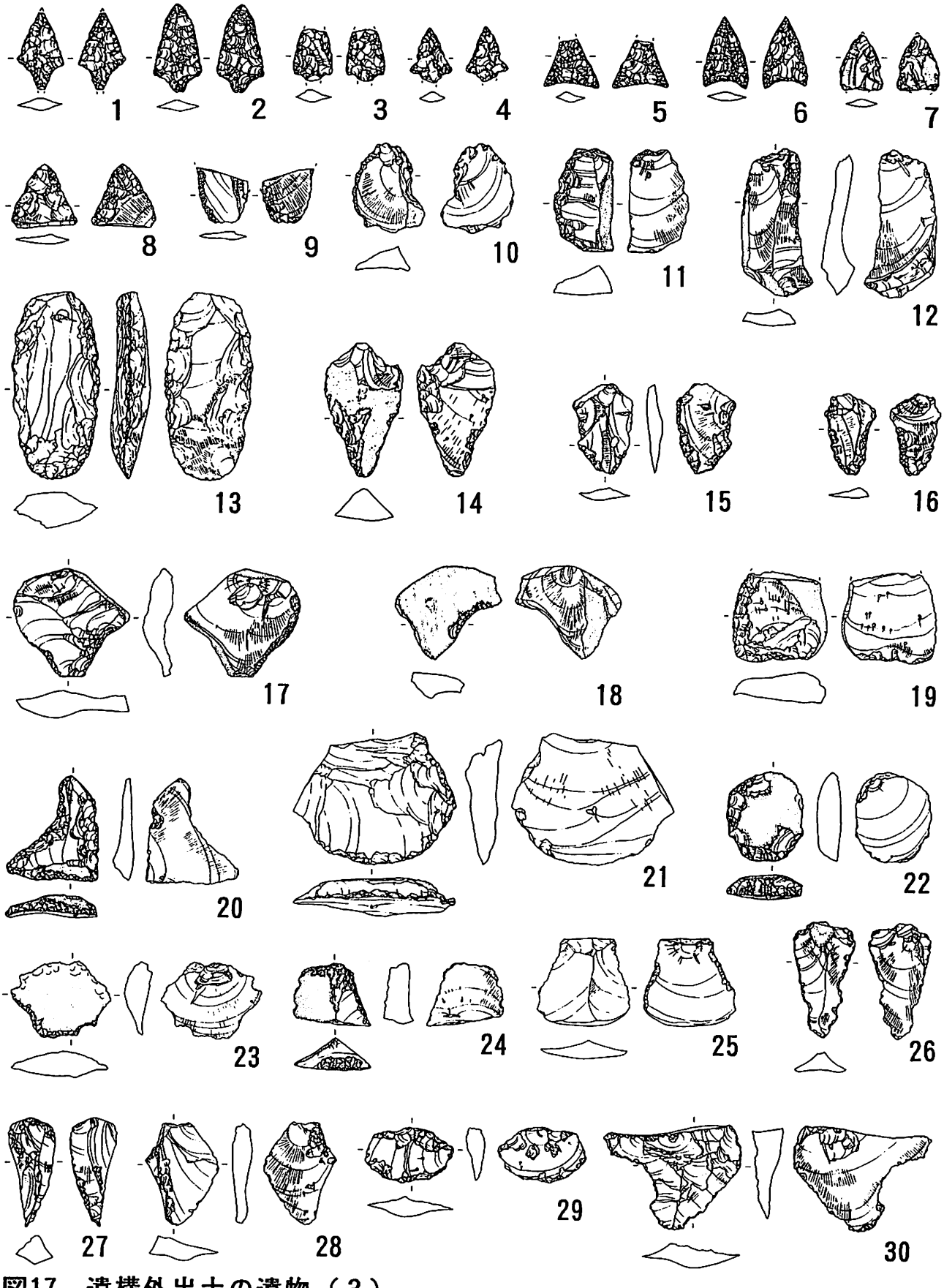


図17　遺構外出土の遺物（3）

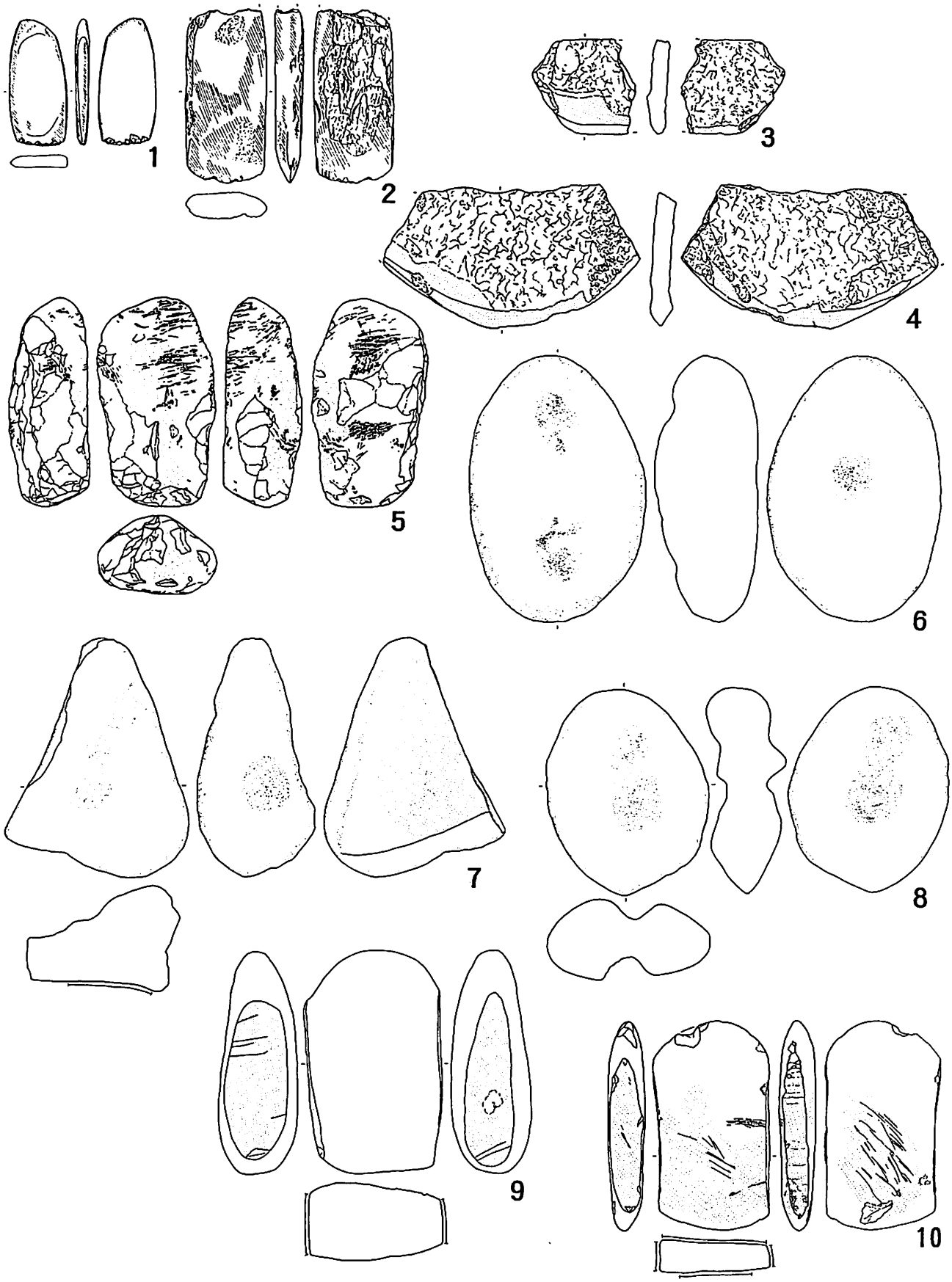


図18　遺構外出土の遺物（4）

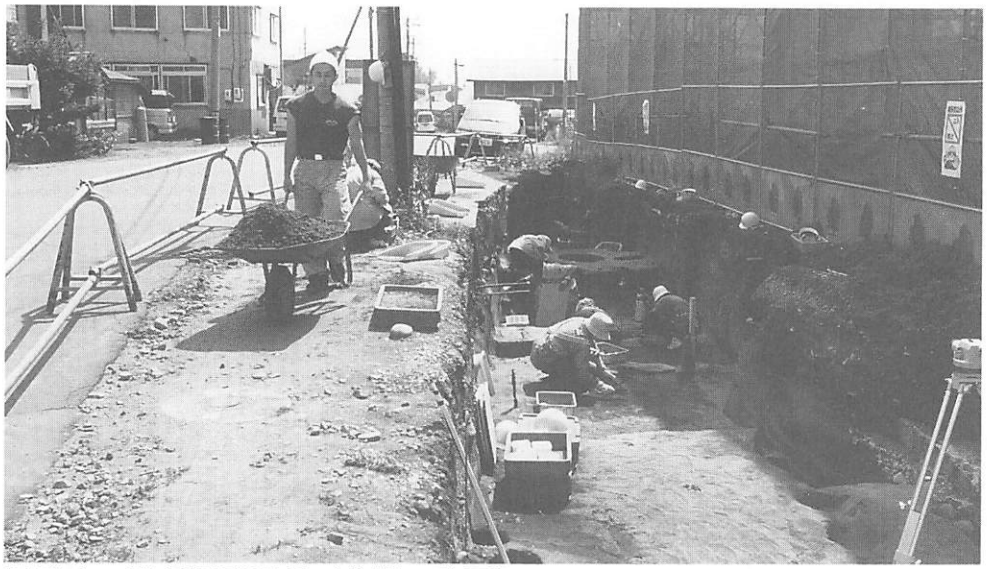


写真１　発掘調査風景（北東→南西）

写真２　Ｐ－４全景（北東→南西）

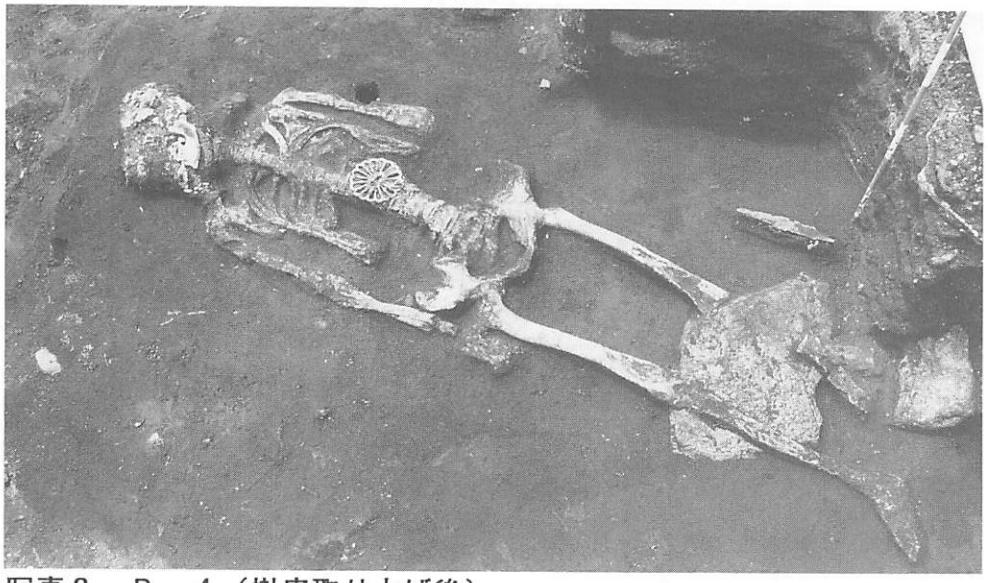


写真３　Ｐ－４（樹皮取り上げ後）

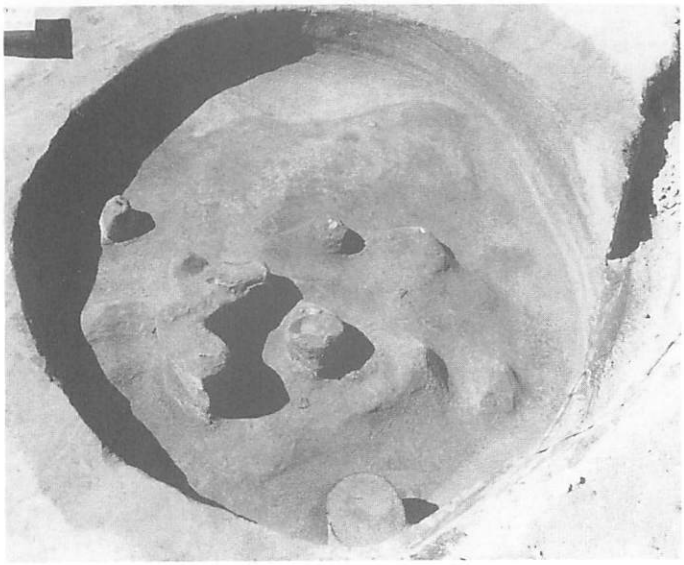


写真４　Ｐ－５全景（南西→北東）

写真５　Ｐ－５土器出土状況（北→南）

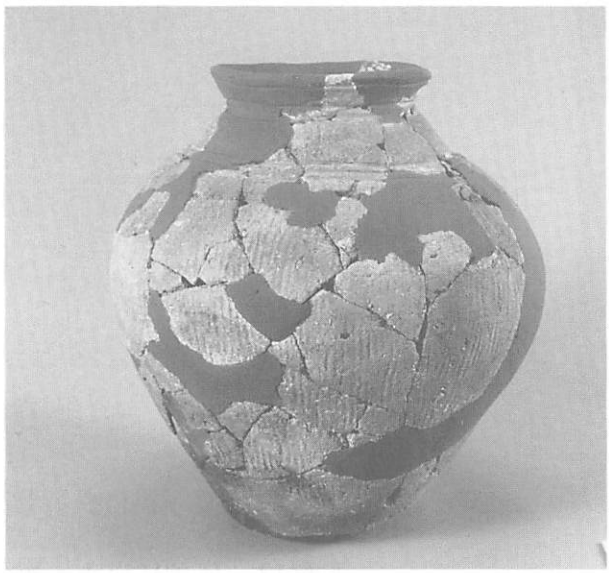


写真７　Ｐ－６出土土器

写真６　Ｐ－５出土土器

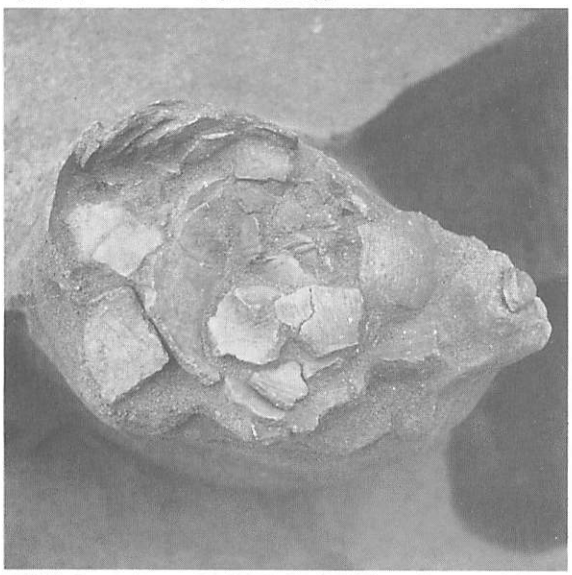


写真８　Ｐ－６土器出土状況（西→東）

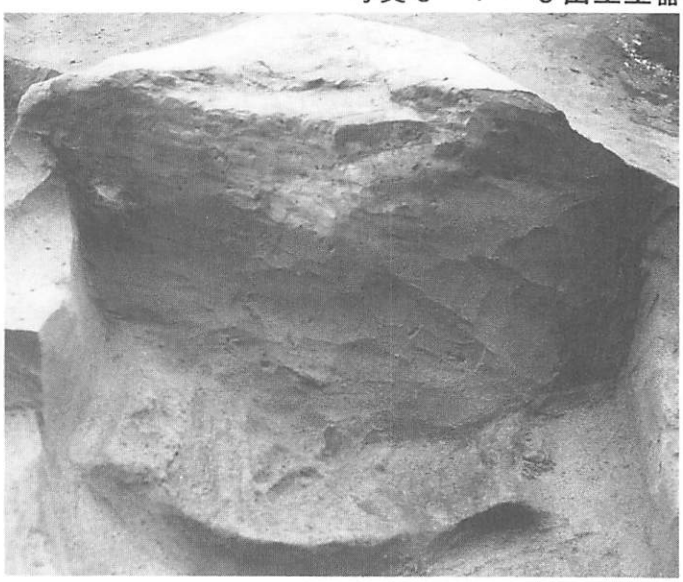


写真９　Ｐ－６断面（北西→南東）

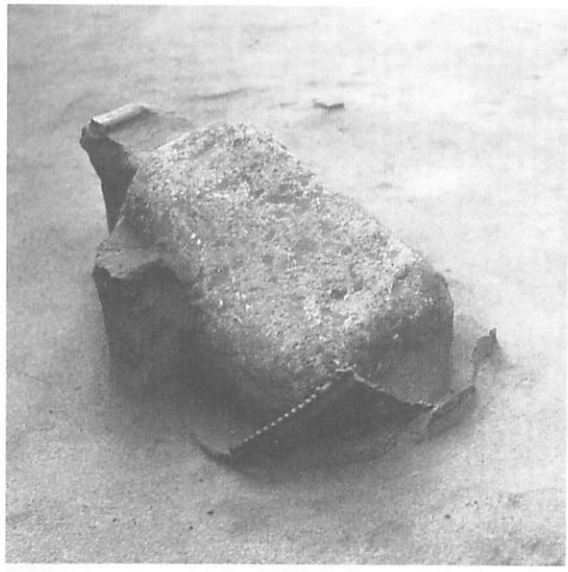


写真10　P－11上面検出状況（北東→南西）

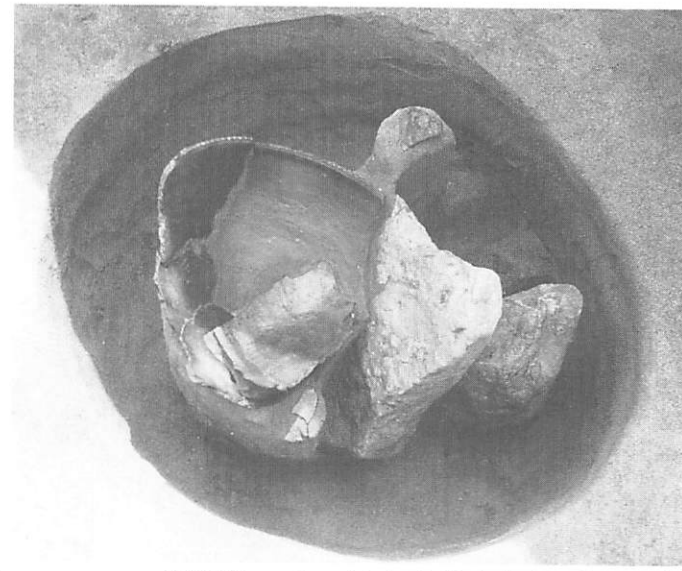


写真11　P－11土器出土状況（西→東）

写真12　P－16検出状況（南東→北西）

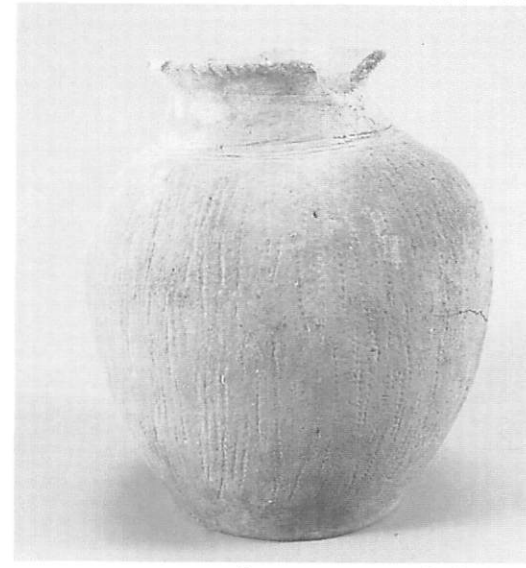


写真13　P－16出土土器

写真14　P－13出土土器

写真15　遺構外出土の土器

参考文献

河野広道　1959　「北海道の土器」『郷土の科学』23
名取武光他　1961　「大川遺跡」余市町教育委員会
名取武光他　1964　「桃内遺跡」『北方文化研究報告』19
吉崎昌一　1965　「縄文文化の発展と地域性～北海道」『日本の考古学』II
野村　崇　1975　「いわゆる亀ヶ岡式土器の北方伝播について」『北海道開拓記念館研究年報』4
村越　潔　1983　『亀ヶ岡文化』考古学ライブラリー18
田村俊之　1983　「北海道における近世の墓制」『北海道考古学』19
木下亀城他　1995　『岩石鉱物』
豊　遙秋　1996　『鉱物・岩石』
岡田淳子他　1999　『入舟遺跡における考古学的調査』余市町教育委員会
青野友哉　1999　「大洞～恵山式土器の墓と副葬品」『海峡と北の考古学』
南北海道考古学情報交換会　1899　『北日本における縄文時代の墓制資料集』
乾　芳宏他　2000　『大川遺跡における考古学的調査』II　余市町教育委員会
2000　『大川遺跡における考古学的調査』III　余市町教育委員会
2000　『大川遺跡（1998年度）』　余市町教育委員会
宇田川　洋　2000　『増補　アイヌ考古学』
安西雅希他　2001　『大川遺跡（1999年度）』余市町教育委員会
乾　芳宏他　2001　『大川遺跡における考古学的調査』IV　余市町教育委員会
宇田川　洋　2001　『アイヌ考古学研究・序論』
高瀬克範他　2001　「入舟遺跡出土の土器について―道央の終末期縄文土器と初期続縄文土器の編年」『余市水産博物館研究報告』4

報　告　書　抄　録

ふりがな	おおかわいせき							
書　名	大川遺跡							
副 書 名	余市川河口港線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
編著者名	乾　芳宏・小川康和							
編集機関	北海道余市郡余市町教育委員会							
所 在 地	〒046-0015　北海道余市郡余市町朝日町26番地　TEL0135-21-2111							
発行年月日	西暦2002年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
おおかわいせき 大川遺跡	ほっかいどう 北海道 よいちぐん 余市郡 よいちちょう 余市町 おおかわちょう 大川町	01408	D-19-6	43° 12'	140° 48'	2001年 11月 ～ 2002年 2月	78㎡	余市川河口港線街路事業
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大川遺跡	包蔵地	縄文晩期 続縄文 近世 近代	墓壙 土壙	土器 石器 金属製品		縄文時代晩期の墓壙群と近世・近代のアイヌ墓が発見された。		

平成13年度史跡フゴッペ洞窟保存調査事業の概要について

1. はじめに

平成10年度から開始された史跡フゴッペ洞窟保存調査事業は3年間の基礎調査が終了し，本年度は基礎調査項目の内，継続調査が必要とされた諸調査と保存施設改修に向けた実施設計が行われた。

また昨年度より北海道開拓記念館を研究主体として新たに開始された文部科学省科学研究費補助金（地域連携推進研究費（2））「フゴッペ洞窟・岩面刻画と文化交流のフィールドステーション作りの基礎研究」及び，鳴門教育大学小川勝助教授による「フゴッペ洞窟・岩面刻画の総合的研究」（同じく文部科学省科学研究費による調査）が現在継続中である。

ここでは，今年度の諸調査の概要と余市町教委文化財課が協力した北海道開拓記念館の地域連携科研調査の中間報告を行う。

2. 平成13年度保存調査の概要

本年度も2回の保存調査委員会（以下，調査委）が実施された。第1回調査委は5月18日に実施され，平成12年度調査事業の総括と平成13年度事業の進め方について議論された。第2回目調査委は11月7日に実施され，本年度調査の中間報告と保存整備の基本計画について議論された。以下に各調査について議事録より概要を紹介する。

(1)洞窟内外部部測量調査

平成12年度は平成10年度から実施している測量調査を継続した。①洞窟周辺の現況地形図作成，②外部壁面崩落危険箇所測量及びステレオ写真撮影，③内部天井面崩落危険箇所測量及びステレオ写真撮影を行った。

周辺現況図作成は，平成11年度までに撮影した現地測量成果をもとに空中写真測量も行い，史跡指定用地を含む周辺広域範囲の現況地形図を作成した。

外壁測量の成果は地質構造解析の基礎資料となる。写真撮影を行い，空中写真撮影と併せて，洞窟内部にて行った測量と同様の手法を用いた立面グリッドを展開させた。

内部天井面にも同様にグリッドを展開させ，単写真撮影を行った。成果は同じく地質構造解析の基礎資料となる。

平成13年度は①洞窟内部北側壁面（C壁）測量調査として22.5㎡を50cm方眼，90グリッドで展開，②洞窟外部南側壁面（E面）測量調査として，トレンチ調査に伴う記録を行い，③植生調査に伴う測量調査として樹木の位置出し測量調査を行った。

これまで行ってきた測量は地質解析の基礎資料となり，また史跡周辺の詳細な地形図となる。今回の保存調査事業に活用されることは勿論，将来の更なる保存調査の際にも比較資料とする。また測量基準点は将来の調査を考え，史跡内に残したい。

(2)地質解析調査

地質的特徴及び崩落等の地質現象の把握を目的として行った。平成12年度調査では，①内壁天井面の地質スケッチ及び崩落危険度評価，②内壁C

氏　名	所　属	氏　名	所　属
◎福田　正巳	北海道大学低温科学研究所 凍上学部門・教授	山岸　宏光	新潟大学理学部自然環境科学科・ 教授
○三浦　定俊	独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所保存科学部・部長	朽津　信明	独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所・国際文化財保存修復協力センター・主任研究官
内田　明人	独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所・埋蔵文化財センター保存工学研究室・室長	土門　仁	余市町建設水道部住宅都市課・課長
三田地　利之	北海道大学大学院工学研究科・ 地盤地学講座・教授	江戸　栄男	余市町教育委員会・教育次長

表. 平成13年度の史跡フゴッペ洞窟保存調査委員会委員一覧(◎:委員長・○副委員長)

面の概略地質スケッチ及び概略崩落危険度評価，③外壁面地質スケッチ及び壁面状況評価，④岩石分析試験，⑤表面波探査，⑥地質解析を行った。

結果として，丸山を構成する地質は数百万年前の新第三紀中新世に堆積した倶知安層群中の凝灰質砂岩から構成され，地層はゆるく西側に傾斜していた。

外壁に見られる亀裂はほとんどが断層によるもので，それらの亀裂系は内部のB壁に見られる亀裂と概ね同じ方向性を示し，同じ成因と考えられた。また組合せによっては不安定岩体を形成していた。

刻画を存する岩相から採取した試験結果では，膠結物質が少なく孔隙が多い（孔隙率は 30～40%）ことから砕片化，剥離化しやすいことがわかった。

表面波探査では，密度が低い低速度層と高い高速度層が混在していることがわかった。

岩壁の水分率が低いと刻画が不明瞭になり，剥離の危険度が増加する傾向が高いことがわかった。保存条件として水分率は重要な要素であると考えられる。

今後の問題としては，C面地質スケッチ，崩落危険度評価を行い，季節ごとの含水率，温度測定を行い，岩石分析試験を行う。今回，風化に弱く孔隙が多い岩相であることが判明したので，別の岩相も系統的に試験することや，諸データの総合解析が必要である。

壁面の剥落量変化を1年間追ったが，もし出来れば季節変化が見たい。小樽手宮洞窟では剥落がひどいのはいつなのかを知るために，3ヶ月ごとに量を比較した。

平成13年度は前年度に引き続き，崩落危険度調査，内部地質調査，聴打診，冬前には再度現地調査を行い，解析を行う（現在継続中）。

(3)陰刻面経年変位量測定調査

継続して陰刻面の経年変位を測定している。洞窟内部に17点，洞窟と保存施設との継目に3点の計20点の変位計を設置している。これまで変位は＋－0.4～0.8㎜でおさまっており，現状では心配はない。降水量などもう少し細かいところを見て今後の課題としたい。

変位に関しては長期的な変動が予想されるので，長期的測定での判断，季節的な影響を勘案，ある変位だけが一方向に変わるとか突然大きく変化するというのは何か起こる前触れと捉えて，その危険を事前に探し出したい。

手宮洞窟では変位の季節がずれた。岩全体が暖まるのに時間がかかって，ひどい時には半年ずれた。そのため手宮では冬になると膨らんできたが，フゴッペではそれがほとんど見られない。

内部気温の平均は15℃程度，余市の年間平均温度を8～9℃として，空調の効果があっても数℃高めにシフトしている。しかもその変動は内気温の幅が10～20℃と若干大きい。

平成13年度中に変位計の接続及び反応方向について誤りがあることが判明した，これまでの13番が0番，同様に0番が13番，12番が13番と訂正し，反応方向はこれまでの土方向を逆にお考え頂きたい。

(4)土壌水分量及び温湿度測定調査

土壌水分計No.51～No.55は山頂部，No.56～No.58は内部の土壌水分計である。No.51～55のグラフで見る山の上の状況では，従来通り，雪解けの季節，春先が最も含水率が高くて夏に下がるという傾向を見せている。2000年については台風が来たときに上がっているが，全体的な傾向としては春先が高く，夏は低いというパターンである。

それに対してNo.56～58は内部の変化で，1999年10月に途切れているが，この時期にNo.57を一番奥の断層に最も近いところに移設した。それ以降のデータで見ると春先が低く，夏が高いという逆転した現象が起きた。

No.56は入口付近のもので，No.57とは距離的に離れているが，この2点は同じような動きをした。

過去4年間の測定の結果，内部含水率は夏場が高く，冬場に低いという傾向が確認できた。密封された環境下で，温度が高くなれば相対湿度は下がるにも関わらず，絶対湿度が夏場に上がっている現象の原因を考える必要がある。

雪解けの時期に山頂で上がった含水率が遅れて洞窟内部に到達している可能性が考えられる。

No.52とNo.53のピークのずれが起きており，水の供給先がどこからか，やはり考えたい。

雪解けと8,9月の降雨が涵養されていると思われる。9月に相対湿度が上昇するのは，山表面上からの水の供給があるということか。現状では湿度は80～90%程度であって，冬は水の供給が抑えられていたものが3月頃に融ける。水分計の数値が異常かどうかは更に変動を見て判断して，従来

と違った挙動をした場合に注目したい。

長期的変動のモニタリングを重視したいので，調査は継続する。保存工事が終了した後もモニタリングは継続するのが望ましい。解析については三次元解析による表現を工夫してもらって，外側と内側のつながりが把握できるようにしたい。また昨年度からの内壁の剥落調査を季節的な変動を追いながら継続したい。

(5)照明影響調査

平成 12 年度調査ではラボにおいて波長制御の有無による藻類増殖比較試験，照射時間の差による藻類増殖比較試験，照度の差による藻類増殖比較試験を行った。

現地での照射試験は，洞窟内部北側に小さな試験区を設けて行い，照明点灯時間の計測をしている。

現地実験での結果から波長，照度，時間の 3 つのファクターを調整することによって藻類の制御が可能であると考えられ，現在までの実験結果から 1 日 4 時間程度までの点灯時間であれば，藻類の増殖はある程度管理できると考えている。

優先順位としては照射時間が一番優先されるファクターで，それを揃えると明るい方が不利になり，更に同じ明るさで光を浴びると波長の差が出てくるということになるか。

照度 20 ルクス位まで下げても，室内実験の結果から言えば効果があると考えられる。不要な光はあてないようにし，可能な限り暗くして，何かあった時には波長による制御を考えるということでよいか。

遺跡が地中にあった時には，藻類はなかったわけで，それがいつ頃から見えるようになったのか，それがわかれば，それを目安にする光を抑えた条件が確定されるということで，元の状態に戻らないまでも，あるレベルまでは戻るのではないかと考えている。

本年度は継続中の調査として，洞窟内部での光照射実験の継続と，現地照明点灯時間測定を行なっている。今後は改修工事後に使用する予定の光源を用いた室内照射実験を行なう予定である。現地照射実験の結果では，照射試験区におけるａ＊値の変化を示したものの経過を見ると，波長制御光より白色光のほうが＋方向に近づいている。

現地照明点灯時間測定では平成 13 年 6 月から 10 月までの月別平均点灯時間を示した。夏季の繁忙期から 10 月まで照明の点灯時間は長くなり 5 時間を越えているが，現在では短くなっている。引き続き経過を観察したい。

(6)施設補強工法調査

平成 12 年度は以下の方針を示した。①刻画保存に関する整備方針（温湿度に急激な変化を与えないこと，光の遮断，気密性・水密性の確保）②来館者に提供する機能に関する整備方針（刻画の視認性の向上，ガイダンス機能，付帯機能の確保，バリアフリー）③立地特性に関する整備方針（わかりやすいサイン，駐車場，地域の入口としての整備された空間）④保存施設の維持管理・運営に関する整備方針（保存機能，資料倉庫の確保，メンテナンスの利便性，耐久性，将来の建替えに配慮した施設計画）

(7)フゴッペ洞窟保存整備の基本計画

1）保存施設の改修整備計画

保存に適した内部環境と改修後のモニタリングについて議論された。

新たなフゴッペ洞窟保存施設の機能として，刻画の保存公開施設，学習施設としての機能を持たせたい。また刻画を公開するだけではなく，周辺遺跡と関連付けたい。北海道開拓記念館の地域連携科研の成果を活かしてほしい。

同時に保存の面から，剥落対策としてのピン打ち等直接的な保護策は採用せず，環境制御を基本的な考え方とする。

丸山の取合部分は二重屋根で，防水面上端部に小さな堰を設け，剥がれ防止に堰に留まる土で押さえる方法が提示された。防水については半永久的に気密性が維持されることはなく，結局一体化しないのであれば，問題が起きたときにカバーする違う視点から捉えても良いのではないか。

洞窟内部環境において適度な湿気は岩には必要で，乾燥は避け，外からの影響を直接うけることのないようにする。過湿になった場合には除湿させる。外からの水分供給があるので人為的な加湿は考えない。

湿度 80％を切ると乾きすぎる。洞窟内部各所の温度のばらつきは，断熱工事によって改善されるであろう。

光は抑え，与えないこととする。

空調は基本的に冷却主体とし，コンパクトな空調機を洞窟用と前室用の 2 系統に分け，機械室に配置して維持管理を行なう。洞窟内部への恒常的

な空調はせず，突発的な現象が現れた場合に稼動させる。

内部の温度としては，極端な変動を与えず年平均に±数℃というところが適当と思われる。

改修後の継続するモニタリング箇所については残すものは今後検討したい。またレーザーによる非接触型の変位測定も視野に入れ，内部温湿度，照度も併せてモニタリングを行なうこととする。

また改修工事時のモニタリングには特に注意を払うべきである。手宮洞窟改修工事では振動の発生による悪影響が懸念され，岩壁へのクッション材使用による保護策が講じられた。それらを参考にして改修工事の際には充分な配慮が欲しい。

2）史跡の友好的活用

フゴッペ洞窟周辺には，西崎山環状列石や大谷地貝塚があり，大谷地貝塚では史跡指定を受けての用地購入が進んでいる。また小樽市には忍路環状列石などの配石遺構があり，それらを結びつけた構想を将来的に考えている。

西崎山環状列石や大谷地貝塚など広い面積をゾーン的に捉えて，フゴッペを核とすることが可能である。総合的学習の場として，地域の小中学生が1日かけて体験しながら学習する場にするのはどうか。そういった機能が今後重要になる。

3. 文部省科学研究費補助金について

（地域振興推進研究費(2)）「フゴッペ洞窟・岩面刻画と文化交流のフィールドステーション作りの基礎研究」

北海道開拓記念館の科研費による調査は平成12年度から3年間の年次計画で行われ，本年度はその中間年にあたる。同調査では，フゴッペ洞窟を情報発信の拠点すなわちフィールドステーションとして活用してゆくことを考えている。

今年度は以下の調査が行われた。

(1) 国内調査（フゴッペ洞窟周辺，関連遺跡，博物館等の調査など）

(2) 国外調査（ロシア，ハバロフスク州及びマガダン州）

(3) フゴッペ洞窟出土遺物の追跡調査

(4) 縄文時代後期～続縄文時代に関する環境復元調査

(5) フゴッペ湾の成立過程に関する環境復元調査

(6) フゴッペ洞窟関連古写真の調査

(7) フゴッペ洞窟フォーラムの開催
（11月24日（土），余市町中央公民館）

講演（報告）名	講演（報告）者氏名・所属
報告1「奈良周辺における史跡の保存と活用」	盛　昭史氏（余市町教育委員会　文化財課長）
報告2「九州における史跡の保存と活用」	乾　芳宏氏（余市町教育委員会　文化財兼学芸係長）
報告3「ハバロフスク州の岩面刻画とその活用」	浅野　敏昭氏（余市町教育委員会　学芸員）
報告4「ロシア極東地域の岩面刻画とその活用」	右代啓視氏・添田雄二氏（北海道開拓記念館　学芸員）
報告5「ヨーロッパの岩面刻画とその活用」	小川　勝氏（鳴門教育大学・助教授）

表. フゴッペフォーラム2001　講演・報告名と発表者名一覧

余市水産博物館研究報告第5号：71－74. Mar. 2002

平成13年度博物館活動報告

1 運営

(1) 組織

余市水産博物館(余市町教育委員会 文化財課)

(平成14年1月31日現在)

教育長	利輝夫	業務係長	盛昭史
教育次長	江戸栄男	学芸員	浅野敏昭
館長 (天体観測所長兼務) (庶務係長兼務)	盛昭史	公務補	相馬征四郎
文化財係長 (学芸員兼務) (社会教育主事)	乾芳宏		

文化財専門委員会(5名)

委員長	本郷 保寛
副委員長	梶 政泰
委員	林 彭
委員	大住 克明
委員	澤野 宗一
任期 (平成12年4月1日～14年3月31日)	

文化財関係施設管理運営委員会(7名)

委員	本間 松喜
委員	星野 一誠
委員	岡島 君夫
委員	川端 有
委員	近藤 芳二
委員	野中 伸隆
委員	田村 政司
任期 (平成12年4月1日～14年3月31日)	

(2) 平成13年度の主な活動状況

4月17日	文化財ボランティア説明員研修会 (～18日)	8月5日	文化財愛護少年団宿泊体験学習(～6日)
4月21日	フゴッペ洞窟写真資料調査(小樽市)	8月20日	北海道開拓記念館考古資料調査
5月18日	第1回フゴッペ洞窟保存調査委員会開催	9月4日	西崎山環状列石文化財パトロール
6月13日	運上家建築調査(北海道大学)	9月13日	寿大学・婦人学級合同学習会
6月28日	地域連携の研究(中央公民館)	9月17日	フゴッペ洞窟前ボーリング調査
7月4日	福原漁場・下ヨイチ運上家文化財パトロール	10月9日	道南地域研究会講演(あゆみ荘)
7月4日	フゴッペ洞窟周辺トレンチ調査 (～9月28日)	10月15日	運上家・福原漁場虫害菌害調査
7月13日	ニシン船資料調査	10月22日	北海道開拓記念館ロシア調査 (～11月3日)

10 月 14 日	北海道開拓記念館地域連携科研 奈良県・大阪府（～16 日）	12 月 13 日	西中学校土器作り
10 月 27 日	文化財専門委員・管理運営委員町外視察 （伊達市）	12 月 20 日	北海道開拓記念館地域連携科研 新潟県（～22 日）,
11 月 7 日	第2回フゴッペ洞窟保存調査委員会開催	12 月 13 日	西中学校縄文土器作り
11 月 9 日	北海道仁木商業高校講演 「余市町内の遺跡」	1 月 21 日	鳴門教育大学小川助教授フゴッペ洞窟調査
11 月 13 日	ニシン漁遺構調査（小樽市・塩谷）	1 月 31 日	奈良文化財研究所内田室長フゴッペ洞窟調査
11 月 24 日	フゴッペ洞窟フォーラム２００１	2 月 1 日	「冬の遊び展」展示図書館
11 月 27 日	博物館大掃除,	2 月 14 日	北海道開拓記念館地域連携科研 臼杵市（～16 日）
12 月 4 日	旧下ヨイチ運上家燻蒸（～6 日）	3 月 10 日	大川遺跡発掘調査報告会

（3）　文化財施設利用状況

平成 13 年度文化財施設見学者数（表参照）

2　教育普及活動

（1）　展示活動

・平成 13 年度博物館特別展『鯡が群来たころ』

期間：平成 13 年 9 月 28 日（木）～平成 12 年 10 月 26 日（日）

展示資料：漁具・昭和初期のニシン漁映像・明治年間の絵図・庚申の掛け軸・明治大正の漁家の文書 大川入舟遺跡出土の近世資料　他

・企画展示『冬の遊び展』（余市町図書館）

期間：平成 13 年 2 月 1 日（金）～平成 13 年 3 月 30 日（土）

展示資料：スキー・スケート・百人一首・宝引き

（2）　教育活動

余市町郷土文化財愛護少年団の年間活動一覧

実施月日	活動内容	実施月日	活動内容
5 月 19 日（土）	入団式	10 月 22 日（土）	特別展見学と昔の遊び
6 月 23 日（土）	西崎山ストーンサークル清掃	12 月 9 日（土）	餅つき
7 月 14 日（土）	土器作り	1 月 27 日（日）	うどん作り
8 月 5 日（日）	宿泊体験学習(福原漁場)	3 月 9 日（日）	解団式

（3）　学芸員の館外活動

本年度は昨年度同様，館所蔵資料を使用した社会科授業協力や講師の派遣依頼を受け，町内外で報告会等に参加した。

月　　日	活動内容	活動場所	担当者
平成13年10月9日(火)	道南地域研修会「鯡が群来たころ」	あゆみ荘	浅野学芸員
平成13年12月13日(木)	総合学習「縄文土器作り」	西中学校	浅野学芸員
平成13年10月22日(月) ～11月3日(土)	北海道開拓記念館(地域振興推進研究費(2)) 「フゴッペ洞窟・岩面刻画と文化交流のフィールドステーション作りの基礎研究」に係るロシア・アムール川流域の岩面刻画の調査	ロシア (ハバロフスク州)	浅野学芸員 乾文化財係長
平成13年9月13日(木)	寿大学・婦人学級合同学習会	余市町中央公民館	乾文化財係長
平成13年11月9日(金)	余市町内の遺跡	北海道仁木商業高校	乾文化財係長

4 資料収集活動

平成14年1月31日までの受入資料は記録資料284点，漁業資料3点，生活資料13点，7式の計300点7式である。

5 調査研究活動

(1) 大川遺跡本多地点発掘調査　　担当：乾芳宏

本年度は大川遺跡のうち，本多地点における発掘調査を実施した。詳細は本研究報告参照。

(2) 史跡フゴッペ洞窟周辺のトレンチ調査　　担当：乾芳宏

史跡フゴッペ洞窟保存調査事業に関わるトレンチ調査を平成13年7月4日から同年9月28日の間で実施した。トレンチは史跡海側敷地，保存施設東側地点，及び同南側地点にA～Lまでの12区を設定した。標高約4mの大川砂丘上にあり，包含層は地表下30～50cmに見られ，擦文時代初冬頭の遺物が殆どで焼土が点在して発見された。施設南側のKトレンチでは昭和2年に発見された「畚部古代文字」(旧フゴッペ彫刻)の存在を確認するために実施したが，かつてのものとの比較は困難であった。

(3) フゴッペ洞窟保存調査　　担当：浅野敏昭

平成10年度から開始されたフゴッペ洞窟保存調査事業に関わって，継続中の定点撮影及び温湿度測定，浸透水のPh測定，昨年度からの文献及び写真資料など基礎資料の整理を継続している。

(4) 漁家文書調査　　担当：浅野敏昭

明治から昭和にかけての漁場経営について記された川内家文書の整理作業の継続作業と，林家文書の調査及び，本研究報告に掲載した漁家の聞取り調査を行っている。

表 1　　平成12年度文化財関係施設入場者数　　（下段の数字は平成11年度）

施設名	フゴッペ洞窟	旧下ヨイチ運上家	余市水産博物館	旧余市福原漁場	総　計
4月	527 472	287 214	126 136	150 136	1,090 958
5月	1,439 1,570	716 797	373 334	782 448	3,310 3,149
6月	1,569 1,644	1,737 1,432	892 532	1,513 1,205	5,711 4,813
7月	1,515 1,861	1,429 1,617	462 636	1,677 1,216	5,083 5,330
8月	1,893 2,402	1,037 1,023	485 478	667 639	4,082 4,542
9月	1,498 1,735	910 1,147	633 623	729 933	3,770 4,438
10月	1,111 1,465	791 1,021	534 483	525 543	2,961 3,512
11月	419 489	355 290	162 158	272 180	1,208 1,117
12月	68 70	54 56	32 24	38 57	192 207
1月	30 67	29 52	69 32	24 69	152 220
2月	121 89	90 45	78 32	49 51	338 217
3月	268 167	106 91	70 108	52 115	496 481
計	10,458 12,031	7,541 7,785	3,916 3,576	6,478 5,592	28,393 28,984

表 2　　平成13年度文化財関係施設入場者数

施設名	フゴッペ洞窟	旧下ヨイチ運上家	余市水産博物館	旧余市福原漁場	総　計
4月	598	353	159	180	1,290
5月	1,339	834	321	829	3,323
6月	1,256	1,094	641	963	3,954
7月	1,530	1,103	574	1,155	4,362
8月	2,127	877	423	719	4,146
9月	1,330	934	423	579	3,266
10月	1,110	550	318	377	2,355
11月	514	278	299	257	1,348
12月	79	28	88	177	372
1月	88	59	40	18	205
計	9,971	6,110	3,286	5,254	24,621

余市水産博物館研究報告　第 5 号

平成14年3月31日　発行

編集・発行　余市水産博物館
〒046-0011 北海道余市郡余市町入舟町21
TEL&FAX　0135-22-6187